

21 世紀教育実践の手引き

---

# 高校実用国語表現教室

---

江端義夫 編

---

広島大学教育学部国語文化教育研究室

21世紀教育実践の手引き

# 高校実用国語表現教室

江端義夫 編

広島大学教育学部国語文化教育研究室

## はじめに

江端義夫

「国語」には、①理解することを指導する面と②表現することを指導する面との二つがあります。

従来、①の方が重視されてきました。たとえば、国語の授業で、夏目漱石の『こころ』を読んだり、松尾芭蕉の『奥の細道』の冒頭部分を暗唱したりするのも、文学作品を理解する学習です。これは、一定の教材に基づいて読み解いていく形式の授業でしょう。今までに、誰もが経験してきた授業であろうと思います。たしかに、多人数の生徒を、同時に導いていく一斉授業では、このやり方は効果的です。

しかし、これは学習者本位の授業ではありません。生徒は一人一人能力に差があり、理解力にも差があります。人として生きる権利は対等ですが、個性の差は、あらゆる場で現れてきます。ただし、それらの違いをどのように認めつつ、伸ばして行けばいいかとなると大変に難しい問題です。

そこで、個人毎に異なる表現力の差をどのように伸ばしていくかということになると、一斉授業でどのように指導したらいいかと悩むことになります。そこで、②の表現することを指導する面が敬遠されてきたのは、それなりの理由があったわけです。もちろん、かつて「綴り方教育」や「作文教育」が盛んに教育現場で行われた時代もありました。それらが盛んに行われた時代には、焦土の中から希望を抱いて立ち上がり、国民の生活を改善し復興を目指そうとする国民運動とでもいうべき勢いがあったように思われます。

しかし、現代に求められている「表現すること」の力は、それとは大きく異なるものでしょう。すなわち、現代の生徒に期待されている「表現する力」は、「生きるのに必要な基本的な表現力」であろうと思います。いわば、実用の国語力と言っておきましょう。たとえば、手紙を書く形式は、社会に出て必ず求められる能力ではありますが、大学の入学試験には出ません。しかも、教育現場では、「自由に書く」ことを個性の発露と考え違いして、「形式に対する行き過ぎた嫌悪感」が見受けられます。「How to」ものを毛嫌いする傾向が極端に

強く出ています。したがって、知識に関わる箇所は、たいてい、取り扱われな  
いようです。教科書に出ているから家で読んでおきなさいということで済ませ  
てしまいます。その代わりに、わくわくする冒険や心にじいんと来る愛の物語  
とか、異国情緒のあるルポルタージュの作品の方が選ばれます。やりやすいか  
らです。授業がしやすいので、そのような教材へと移って行ってしまうのです。  
しかし、これでは、文学青年は育っても、生きる力は育ちにくいと思います。

そこで、教師になろうとしてする学生に、どうすれば、「表現する力」を楽  
しく授業させられるかを考えることにしました。

実用国語表現教室を学生と一緒に研究することにしたのです。ここで使用し  
たのは、広島の本 D という出版社の『国語表現』をテキストとし、それに基づ  
いて、系統的に国語表現の力をつけさせる指導案づくりをさせてみました。学  
生は、真剣に取り組み、模擬授業まで執り行った班もあります。当演習で鍛え  
られた学生達は、きっと、教育現場に就いたなら、率先して子供たちに表現す  
る力を付けさせるのを得意とする教師になるでありません。

指導案についても、各班で時間をかけて討議した結果なので、かなり、よく  
出来ているものもあります。また、指導教官や他の生徒からの意見に基づき、  
改正したものがほとんどです。

平成十五年から『国語表現』が高校現場での必須科目になります。教員の卵  
たちが、一所懸命に取り組んだ本書を、是非とも手にとってお読みいただけれ  
ば幸いです。若い学生ならではの発想とみずみずしさの窺われる意欲的な授業  
案が少なくないのです。教えていて、毎時間が楽しみでした。楽しい教室を作  
ってくれた学生達に、心からの感謝を記したいと思います。

—— 目次 ——

はじめに 江端義夫

第1章 表現の楽しみ

第1節 逆物語をつくろう	杉本良徳 田島誠	1
第2節 日本一短い手紙を書こう	磯村祐子 古賀由佳 佐々木孝徳	9
第3節 絵の情景を詩や文章に表そう	佐伯友紀子 森下美紀	23
第4節 歌詞のイメージを文章に表そう	板持百香里 河村朝子	31

第2章 表現の基礎

第1節 自己表現	長坂哲志 秦恭子	37
第2節 わかりやすい表現	安富聖子	43
第3節 表現の工夫	石松祐二 下田華世	51
第4節 言葉のキャッチボール	大塚隆正 川上秀夫	61

第3章 表現の実践(1) —— 通信・案内・伝達 ——

第1節 手紙の心	梅原誠 中崎ゆり	67
第2節 手紙を書く	大久保理恵 坂下直子	75
第3節 プレゼンテーションの必要性	縄田悠紀 脇坂知子	85
第4節 紹介文・宣伝文を書く	川津崇志 菅原光貴	99
第5節 二つの言葉が一緒になって	福家香織 山口理恵	107

第4章 表現の実践(2) —— 記録・報告 ——

第1節 記録文	酒匂慎一郎 富安慎吾	113
第2節 聞き書きを書く	小川俊輔 斎藤奈緒美	121
第3節 レポートを書く	片岡由香合 松下淳	131
第4節 方言と共通語を使いこなす	坂田彩 里見友紀	143

第5章 表現の実践(3) —— 意見・主張 ——

第1節 意見文を書く	布谷友亮 西健吾	151
第2節 ディベートをする	今井英里子 小川奈都	161

おわりに 江端義夫

# 第1章

## 表現の楽しみ

第1節 逆物語をつくろう

第2節 日本一短い手紙を書こう

第3節 絵の情景を詩や文章に表そう

第4節 歌詞のイメージを文章に表そう

## 第1章 表現の楽しみ

### 第1節 逆物語を作ろう

教科教育学科国語教育学専修

杉本良徳 田島 誠

#### I 本節のねらい

「これはこういうものだ」という固定的な思考から脱却し、自己の自由な発想を活かしながら、物事をもう一度見つめ直そうとする態度を身につけさせる。さらに、自分が捉え直した事柄を「言葉」によって他者に伝えるという活動を通じて、「国語表現」の面白さや可能性に気付かせ、生徒の学習意欲・活動意欲を喚起させる。

#### II 学習者観 (対象学年 高校1年生)

高校における学習内容は、中学校の時と比べ、格段に難しい。さらに、学校全体を通じて常に「大学入試」が意識され、教師たちは声高に受験勉強を促す。それまで経験したことのない不安と重圧の中、生徒たちの心に、余裕などあるはずもない。

そんな日々を過ごすにつれ、生徒たちは、目の前にある学習活動をすべて「ノルマ」と考えるようになる。「とにかくやらなければならないもの」として、ただ無気力に、ただひたすらに、学習活動を「消化」しようとするのである。「意見を交わす必要などない。先生が答えを教えてくれたらそれでよい。」そんな空気が、教室を覆い始めるのである。

想像力や発想を表に出すこともなく、ただ漠然と課題をこなす生徒たち。本章第1節では、彼らを「固定的な思考」状態から脱却させるとともに、自身の内に眠っていた感性を呼び起こす「きっかけ」を提供したい。

#### III 本節の可能性

- ・国語表現の多様性・自由さに触れ、それを楽しむことができる。
- ・様々な表現活動を通して、表現することへの親しみを養い、意欲的に活動に取り組むことができる。
- ・心に浮かんだ自由な発想を、言葉を用いて表現し、他者に伝えることができる。
- ・自分と異なる表現や捉え方を理解し、それを受け入れることができる。

○指導目標

- ・ 国語表現の多様性・自由さに触れ、それを楽しむことができる。
- ・ 国語表現の学習活動に対し、意欲的・積極的に取り組むことができる。
- ・ 心に浮かんだ自由な発想を言葉を用いて表現し、他者に伝えることができる。

○指導計画（全一時）

指導目標	学習活動	指導上の留意点
自由な発想を、文章として表現することができる。	逆に並べた場合・ランダムに並べた場合の物語を、ワークシートに記入する。（ランダムに並べたものを5種類ほど準備し、計6種類ほどのプリントを作成しておく。）	机間指導を行い、柔軟な発想を導く。
他者の発表を聞き、自分と異なる表現を楽しむことができる。	考えた物語を発表する。	机間指導のときに、発表させたい生徒を選んでおく。
国語表現の多様性・自由さに触れることができる。	同じ場面の絵がもつ意味を、それぞれの物語ごとに比較する。	同じ絵に、その用いられ方によって、全く異なる意味付けが可能なことを理解させる。

○指導目標

- ・ 国語表現の多様性・自由さに触れ、それを楽しむことができる。
- ・ 国語表現の学習活動に対し、意欲的・積極的に取り組むことができる。
- ・ 心に浮かんだ自由な発想を言葉を用いて表現し、他者に伝えることができる。

○指導案

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	逆物語の説明を聞く。	逆物語とランダムに並べた物語のプリントがあることを説明する。	聞く姿勢ができているか。
3分	ワークシートに物語を記入する。	机間指導を行い、柔軟な発想を導く。 発表の時間を持てるよう、時間に注意する。	積極的に書こうとする姿勢が見えるか。 自由な発想を活かして書くことができているか。
35分	考えた物語を発表する。	机間指導のときに、発表させたい生徒を選んでおく。 できるだけ多くの種類のプリントを多くの生徒に発表させる。	自信を持って発表できているか。 他者の表現を楽しみながら聞くことができているか。
45分	同じ場面の絵がもつ意味を、それぞれの物語ごとに比較する。	同じ絵に、その用いられ方によって、全く異なる意味付けが可能なことを理解させる。	表現の多様性・自由さを感じることができるか。



# 題名

[ 鶴工哀史 ~ 明治編 ]

(X: 女工哀史)

作 [ 田島 誠 ]

④



「お前もちのくる布は、アガイン  
が面白い。シマではラベルの企業  
の買入てしまふ。そこで明日から  
アガインに変更する。お前たち  
鶴が買ったのだから、鶴模様  
だ。二本はうたまで、はっはっは。  
俺たち、鶴の人権(鶴権)は、  
完全な踏みにじられたのだ。」

⑤



一月二十六日、深夜二時。  
キニス加語れた。疎の女が、  
の工場にたがもてきたのだ。  
黒い髪ヌストリート。二重まぶた。  
しかも色白。田村の好みを佳境  
したような、美しい女だった。  
その髪ヌまう女田村も、すっかり  
その美しさに心を奪われていた。  
「うだ...俺たちは土産盛助に  
そう思った。そーそー  
10分後、俺たちは大室へと飛び  
立、たのめである。」

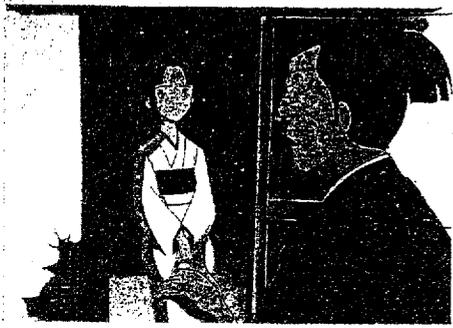
⑥



しかし突然...俺と相棒の  
鶴助が、佳境を山崩した。そう、  
俺たちの体は、もう満口口に飛ぶな  
程、衰弱してしまっていたのだ。  
「鶴助...鶴助...」  
俺の声を、女はうしろ、ほろろと  
えして、そのまま、大地へと落。下た。  
後ろには女の男の姿が見える。  
助けるかマ...ニッ...まま...  
...一瞬の葛藤。しかし俺は、ま  
ま飛びつづけた。女は、悲し  
閉二えた。それでも俺は、飛びつづ  
けた。海の前が見えなへ、でも、俺は  
いたまら、飛びつづけた。

END

# 『ぼくたちの、雀鳥物語』②



「良子さん。今夜は冷えるから  
 気をつけて帰るんだよ。」  
 「はい。良徳さんも風邪には  
 気をつけてね。」  
 「いつもすまん。鶴子が  
 判さへ押しにくれたら、  
 堂々と一緒に暮らせるのに。」  
 「いいえ、私は今の関係でも  
 満足していますわ。これ  
 以上は高望みというもの  
 です。」  
 ザッ  
 カタッ



「キィーキィー(あなたまた  
 そんなせとイチャイチャして  
 いるの。)」  
 「鶴子、もういい加減に別れ  
 てくれ。確かに俺はお前  
 の細い足が好きだ。でも  
 や、ぱりお前は鶴なんだ。  
 人間と鶴なんて、最初から  
 うまく行くわけなかったんだよ。  
 キィ〜〜〜(絶対に別れないわよ。  
 バタバタバタ  
 「あー、飛んで行っちゃった。」



三日後。  
 「明日は良子の誕生日だな。  
 よし、ちよと奮発して着物で  
 もプしゼントしようかな。」  
 ああ、良子の喜ぶ姿が目  
 浮かぶ。そしてこの愛溢れる  
 光景を見せつけたら、さすがの  
 鶴子もあきらめられてくれるん  
 じゃないかな。よし、じゃあちよと  
 出かけてこよう。」

# 題名

(負けるな鶴子!かじんはれ!!)

作 ( 杉本 良徳 )

④



「ちょっとオヤジさん。こんなに  
鬼趣味な鶴子の柄しり  
この店にはないのかい？」  
「何言ってるんだよ、徳ちゃん。  
あんたの愛妻鶴子ちゃん  
への誕生日プレゼントなん  
だろ？ピッタリじゃないか。」  
「えっ、明日は鶴子も誕生日  
なのかつ、知らなかったよ。」  
「おいおい、しかりしろよ。」  
「カタッ、カタッ、カタッ」  
「はっ、今のは鶴子聞いてたのか。」

⑤



「キー、キー。(あゝ、明日  
は私の誕生日だというのに、  
あの人にとっては何子の誕生  
日というこじか頭でないのね。  
やっぱりもうダメなのかしら。  
もう判を押した方がいいの  
かしら。その方が楽になれる  
かも。(ミミシ)。」  
「こんな所にいたのか。しめしめ、  
ショックを受けたようだな。  
これで明日は良子の誕生日ど  
ころか二人の結婚記念日になる  
かも(しれないぞ)。」

⑥



「カタッ、カタッ。」  
「こんな夜中に鶴子のやつは何を  
やってるんだ？」  
「キーッ、キーッ。(負けないわ。  
私、負けない。いつかあの人私の  
所に戻ってくるわ。そうよ、そうに  
決まってるわ。だから、今は我慢  
するの。今は耐える時よ。明日、誕生  
日は一人で淋しいけど、せめて私  
から私にプレゼントを贈りましょ。  
もちろん趣味のいい、鶴子のやつを。」  
「ちー!! 全く懲りない女だ!!」

## <今後の課題>

本教材「逆物語を作ろう」は、第1章：表現の楽しみの第1節にあたり、それ以降の表現に関する学習へとつながる導入教材である。はじめは、副教材を用いた発展学習を視野に入れていたのだが、それでは時間数が2～3時間程度必要となるため、果たして本教材にそれだけの時間を費やす必要があるのか疑問となった。そこで我々は、本教材の導入としての意味を強く意識することにし、国語表現の内容に深く踏み込みこむことは避けるようにした。まずは楽しく授業を行い、国語表現への親しみを持たせることを第一に考えるようにしたのである。そのため、指導計画の目標や内容が物足りなく思えるかもしれないが、ここ（「表現の楽しみ」）をスタートに、「表現の基礎」「表現の実践」「表現の探求」へとつながっていくため、本授業のみを見ての評価ではなく、教科書全体の流れを踏まえたいうえでの評価が必要となる。これが今回の演習の面白いところで、各教材の指導計画を練るときには、教科書全体の流れを意識し、それまでに学習者が行ってきた学習活動を受け止め、なぜここでこの教材を扱うのか、そして、以降の学習にどのようにつなげて行くのかを十分考慮しなければならないのである。

今回の教材では、物語を逆から作っていくことに加え、場面の順番をランダムに並びかえた物語も作らせるようにした。このことにより、さらに多くの自由な発想・表現が導き出され、各場面の絵に対する様々な意味付けが生まれるだろう。しかし、これらの作業は学習者にとっては困難なものかもしれない。そこで、あらかじめ6枚のカードのようなものを用意し、学習者自身が場面の順番を選択できるようにしたり、教師も逆物語を作り、それを例示したりするというような工夫が考えられる。これらのような工夫を取り入れていくと、時間の節約にもつながり、スムーズな授業展開が可能になるだろう。

## 第1章 表現の楽しみ

### 第2節 日本一短い手紙を書こう

日本語教育学科

磯村祐子 古賀由佳 佐々木孝徳

#### I 本節の狙い

表現をするということは、内面的・主観的なものを身振り・言語・絵画・音楽などであらわすことである。よって、国語教育の場での表現とは言語による表現である。効果的な表現を追究することにより、表現することの楽しみだけでなくそれが相手に伝わることの楽しさを知る。

表現方法の特徴的なものとして、日本に古くから伝わる短歌・俳句がある。これらには制限された文字数のなかに作者の想いが込められ、そこには無限の世界が広がっている。そこで、自分の思いを表現するために、ただだらと長い文章を書くのではなく短い文章で端的に伝える方法を身につける。

#### II 学習者観

対象：高校1年生（1学期）

表現をするためにはまず、何を伝えたいかを考えなければならない。そのためには、自分を見つめ直すという過程が必然となってくる。また、表現する際に、それが自分の本当の想いでなければ、真剣に伝えようという想いがうすくなる。

そこで、今回は「誰かに何かを伝える」ことに焦点を置き、ただ文章を書くのではなく、手紙の形をとる。中でも日本一短い手紙という課題を設定することによって、効果的な表現の追究につなげたい。

#### III 本節の可能性

- ・ まず、導入段階でいくつかの作品例を読み、短い文章の中に作者の想いがきちんと込められていることを認識する。
- ・ 自分の伝えたいテーマを考え、誰に何を伝えたいかを考える。
- ・ その内容を効果的に伝えるための表現を追求する。
- ・ 他者の作品をみて、評価することで短い文章で表現することの面白さや魅力を味わう。
- ・ よりよい表現を考え、作品を完成させる。

#### IV 指導目標と指導計画

##### 指導目標

- ・ 日本一短い手紙に触れ、自ら作品を創作することができる。
- ・ 表現技法の工夫により、少ない文字数の中で自分の想いを表現できる。

##### 指導計画

次	時	指導目標	学習活動	指導上の留意点
第一 次	第一 時	<p>○短い文に込められた作者の想いを読み取る。</p> <p>○日本一短い手紙を書くにあたって、その歴史的背景を知ると共に、短い文章に多くの想いが込められていることに気づく。</p> <p>○手紙のテーマを複数考える。</p>	<p>○プリント①の作品例を鑑賞する。</p> <p>○本多作左衛門重次の作品を読む。</p> <p>○テーマを複数考え、ワークシート①に記入する。</p> <p>○考えたテーマを発表する。</p>	<p>○プリント①を配布する。</p> <p>○作者の想いを読み取る際には固定された答えはなく、感じたことを大切にするように呼びかける。</p> <p>○ワークシート①を配布する。</p> <p>○事前に教室内を見回っておき、よいテーマを発表させる。</p>
第二 次	第二 時	<p>○表現工夫を考えながら、作品を練り、35字以内で表現する。</p>	<p>○ワークシート①で考えた内容を元にテーマを絞り、作品を作る。</p>	<p>○相手に伝えたいことの要点がまとまっているかを確認させる。</p> <p>○来時に作品を回収することを伝える。</p>

	第三時		○第二時の復習をし、短い手紙の作成を続ける。	○全員の作品を回覧する。
第三次	第四時	○文章作成の表現技法について理解を深める。  ○他者の作品に触れ、短い文章で表現することの面白さや魅力を味わい、評価できる。 ○表現技法の工夫に気づくことができる。	○前時の復習をする。 ○表現技法について学習する。  ○プリント②を基に、自己や他者の作品を評価し、表現を楽しむことが出来る。  ○気づきを発表する。	○プリント②を配布する。 ○表現技法について板書を行う。  ○作品の表現技法や鑑賞を明確にさせる。 ○鑑賞が感想にならないように注意する。 ○言葉を選び、表現したいことが具体的な表現になっているか。
第四次	第五時	○自分の感想を持ち、反省することができる。	○前時の発表をもとにワークシート②に自分の作品を練り直す。  ○ワークシート②に本時学習を振り返り感想を書く。  ○希望者のみ、一筆啓上コンテストに応募する。	○ワークシート②を配布する。    ○実際のコンテストに応募を促す事によって、本時学習内容に現実感を持たせる。  ○みんなの作品を集め、後日作品集として配布する。

## V 指導案

### 〈指導案〉 第一次第一時

#### 本時の目標

- ・一筆啓上コンテスト受賞作品に触れ、創作意欲をかきたてる。
- ・いくつかの作品例を読み、自分のテーマを決める。

時間	学習活動	指導の意図と手立て	評価
0	○プリント①を読み、短い文に込められた作者の想いを読み取る。	○プリント①を配布し、各自読ませる。それぞれの手紙に書かれている内容やイメージを膨らませながら読むよう呼びかける。 ○作者の想いを読み取る際には固定された答えはなく、感じたことを大切にするように呼びかける。	○自分なりの感想や読み取りができているか。
10	○本多作左衛門重次についての資料を読む。 ○日本一短い手紙を書くにあたって、その歴史的背景を知ると共に短い手紙にも多くの想いが込められることを知る。	○本多作左衛門重次の作品を例にあげ、含まれている内容の深さや想い、短い手紙の歴史を感じさせる。	○日本一短い手紙を書くにあたって、その歴史的背景を正しく理解するか。 ○短い文章の中にも多くの想いが込められていることを理解できたか。
30	○テーマを複数考え、ワークシート①に記入する。	○ワークシート①を配布し、自分の書くテーマを決めさせる。	○複数のテーマが見つけられているかどうか。
45	○決めたテーマを発表する。	○数名の生徒に決めたテーマを発表させる。	

〈指導案〉 第二次第二時

本時の目標

- ・自分の決めたテーマに基づいて、35字以内で表現する。
- ・伝えたい要点を短くまとめる。

時間	学習活動	指導の意図と手立て	評価
0	○前時の振り返りをする。		
5	○実際に35字以内で作品を作る。	○前時に決めておいたいくつかのテーマの中から一つを選択し、それについて創作をさせる。	○テーマを選択し、それについての手紙文がかけられているかどうか。 ○相手に伝えたいことの要点がまとまっているか、字数制限を守っているか、を確認させる。
45		○来時に回収することを伝える。その際に、複数の作品を作っても構わないことを告げる。	

〈指導案〉 第二次第三時

本時の目標

- ・前時に引き続き、自分の決めたテーマに基づいて、35字以内で表現し、伝えたい要点を短くまとめる。

時間	学習活動	指導の意図と手立て	評価
0	○第二時の復習をする。 ○短い手紙の作成を続ける。		
45		○全員の作品を回収する。	

〈指導案〉 第三次第四時

本時の目標

- ・表現技法についての正しい知識を得る。
- ・他者の作品を評価し、短い文章で表現することの面白さや魅力を味わうことができる。

時間	学習活動	指導の意図と手立て	評価
0	○前時の復習をする。	○プリント②(生徒の作品を載せたもの)を配布する。	
3	○表現技法について既知のものをあげ、新しい知識を身につける。	○指導者は表現技法について板書(内容はPOWER POINTに載せて置く)を行う。その際に、一方的に説明をするのではなく、生徒の発言を拾い上げて進めていく。	○表現技法をただしく理解できたか。
10	○自己や他者の作品についての気づきをノートに書く。  ○表現技法についての考察を含めた気づきを発表する。	○作品の表現技法や気づきを明確にさせる。  ○言葉を選び、具体的な表現ができているかを評価、あるいは注意する。	

〈指導案〉 第四次第五時

本時の目標

- ・前時で学んだ表現技法をいかし、再度作品を練り直す。
- ・表現することそのものを楽しむことができる。

時間	学習活動	指導の意図と手立て	評価
0	○前時の復習をする。	○投げかけの形で、表現技法の復習を促す。	
5	○前時の気づき、表現技法の学習をもとにワークシート②に自分の作品を練り直す。	○ワークシート②を配布する。	○前時の内容を生かし、作品の更なる検討ができたか。
35	○ワークシート②に本時学習を振り返り感想を書く。	○完成した作品、感想を提出させる。	○自分の感想を持ち、反省することができたか。
45	○希望者のみ、一筆啓上コンテストに応募する	○実際のコンテストに応募を促す事によって、本時学習内容に現実感を持たせる。 ○全作品を回収し、後日、作品集として配布する。	

## VI 今後の課題

今回は「自分の思いを短い文章で端的に伝える方法を身に付ける」というテーマを設定し、指導案を立てていった。しかし、「楽しい表現を迫及する」ことをテーマとし、自分の内面を出し、手紙を書かせるのもいいだろう。また、気遣い（時節の扱い）や心（事柄）、感謝などのイメージを持って、手紙を書かせるのもいいだろう。

また、授業の展開として「誰かに何かを伝える」ことに焦点を置いた。実際に、授業の中で、誰に書くのかを自由に決めさせることにしたが、中には、時間内に決めることの出来ない生徒や出したい相手が変わることもある、という問題点がある。「時間があれば複数の相手に書いてもよい」ということは述べているので、手紙を出したい相手が変わった場合はカバーできるだろう。しかし、出したい相手が決まらない生徒が多くでそうな場合には、最初から一筆啓上コンテストに提出することを決めておき、そのテーマに従って手紙を書かせたり、「誰」に対して手紙を書くのかを授業の最初に生徒に話し合わせ、書かせるのもいいだろう。

最後に、私たちが実際に使用した「POWER POINT」による説明と、プリント作成時に用いた参考文献を載せておく。

# 日本一短い手紙を書こう。

プリント①

## 作品例

○「私、母親似でブス。」

娘が笑って言うの。  
私、同じ事泣いて言ったのに。  
ごめんねお母さん

田口信子（群馬県 36歳）

○お前の大きな財産の一つは、  
いじめの痛みを知っていることだ。  
荒平翔太（高校二年生）

○お母さん、もういいよ。

病院からお父さん、つれて帰ろう  
二人とも死んだら、いや。  
安野栄子（千葉県 44歳）

○ずっと“いい子”の私。  
やめたいのに本当の私を  
忘れてしまったの。  
私は何がしたいの？  
金島道子（高校三年生）

○一筆啓上 火の用心

お仙泣かすな 馬肥やせ  
本多作左衛門重次（福井県 45歳）

ここでちょっと豆知識

### **【本多作左衛門重次と日本一短い手紙】**

徳川家康の家臣。1575年、長篠の合戦の折に陣中から妻にあてて出した手紙が日本一短い手紙として有名になる。

「火の用心」—当時、消火設備は整備されておらず、一度起こった火事はなかなか消すことができなかった。何もかも焼き尽くす火事は恐ろしい。今以上に火の取り扱いに関して注意を払って欲しい、ということを表している。

「お仙泣かすな」—お仙とは重次の長男仙千代のこと。彼が40歳ときようやく授かった跡取り息子であり、大事な後継者である仙千代を彼は大変気にかけていた。ちなみに、重次の家康への働きが評価され、重次死後、かれは四万八千石を与えられた。

「馬肥やせ」—当時、馬は戦に欠かすことのできないもので、馬の良し悪しは武將の生命に関わっていた。いつでも補充できるように予備馬養っておく必要があった。また馬は時には人の命よりも大事にされていた。

陣中で、自分が留守の間、領地のことを心配している手紙であることが見て取れる。



# 日本一短い手紙を書こう。

## ① テーマを決めよう

誰に、どのような内容を伝えたいのかを考えよう。

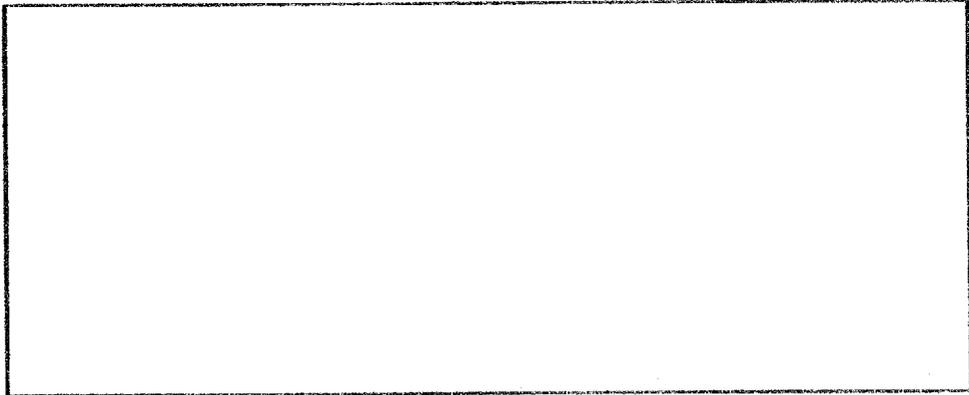
	誰に伝えたいのか	何を伝えたいのか
例	友達に	時に厳しくしてくれてありがとうということ
①		
②		
③		

## ② 実際に手紙を書いてみよう。

①	
②	
③	

# 日本一短い手紙を書こう

みんなの作品に触れ、自分の作品をもう一度練り直そう。



最終的に自分の作った作品の中から一つ選び、清書をしよう。

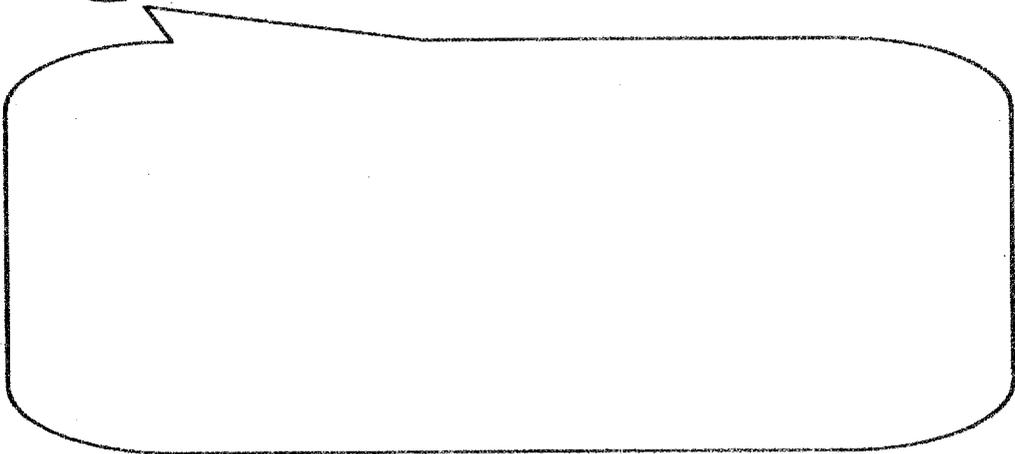
私の一筆



## 投票を通しての感想



**先生から一言**「一筆啓上コンテスト応募締め切りは、〇月〇日です。授業時に作成した作品でなくてもかまいません。ぜひ応募してみてください。」



## 日本一短い手紙を書こう

### 学習

作品を参考に、母、父、友、  
ふるさとなどへの手紙を、  
三十五字以内で書いてみよう

## 作品例 (英語)

Having a wonderful time. Glad you are here.  
(すてきな時間が過ぎて、あなたがおこりに来てうれしいわ。)  
アサヒカネのウォール・ポスター 2407番

I create the myth of myself day by day.  
(私は日々私自身の物語を作っているのです。)  
アサヒカネのウォール・ポスター 63番

When I am 25, I want to be a bachelor and I will be  
a bachelor and I think there will be a sign.  
(私が25になったとき、大工さんになりたいわ。まだ25歳でわ。その前に結婚  
と字遣人が書いていると思うよ。)  
オースティン 10番

## 効果的表現の工夫

「修辞法」の確認！

主を比喩表現の例

- ① 直喩 (明喩)
- ② 隠喩 (暗喩)
- ③ 擬人法
- ④ 反復法
- ⑤ 省略法 (格言とか)
- ⑥ 対句法
- ⑦ 借喩 (擬人法)
- ⑧ 声喩 (擬声語・擬態語)

## テーマを考える

- ・ 親族 (母、兄、祖母、叔父・・・) へ
- ・ (過去・現在・未来の) 私 (自分) へ
- ・ 友人へ
- ・ 先生へ
- ・ 先輩へ
- ・ ペットへ
- ・ 知人へ
- ・ お世話になった人へ
- ・ 芸能人へ
- ・ ...

## ⑦ 戦場から送られた火の用心

①「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」これは、徳川家康の家臣であった本多作左衛門重次が、戦場から妻に送った手紙文として知られ、簡潔にして要を得たこの文は、手紙文の手本として今日でもよく紹介されています。

この手紙を解説しますと、この時代は、今日のように消防組織や消防ポンプ車などが整備されている時代と異なり、必要以上と思われるほど、火の取扱いについて注意を払っていることが分かります。

お仙とは、重次の長男仙千代のことで、重次が40歳を過ぎたときに生まれた大事な跡取りのため、大変気にかけていました。

また馬は、戦には欠かせないもので、時には人の命より大事にしていました。以上のことからして、夫の留守を気遣った手紙と思われる。

この手紙は、本多作左衛門重次が、小牧、長久手の戦い(天正12年、尾張国(愛知県)の小牧・長久手を中心として、豊臣秀吉と織田信雄・徳川家康の連合軍とのあいだで行われた戦い)のときに、国元の妻に送った手紙であるという説がありますが、これは誤りのようで、どうも長篠の戦いのときのように思われます。

そのキーワードは、「お仙泣かすな」にあります。お仙は、元龜3(1572)年に浜松で生まれ、重次が、長篠の戦い(天正3年三河國長篠(愛知県南設楽郡鳳来町)を中心に行われた武田勝頼と徳川家康・織田信長の連合軍との戦い)に参戦したのは、お仙が3歳のときでした。

このことから「お仙泣かすな」の部分の意味が理解できるものと思います。仮に、小牧・長久手の戦いのときとしますと、お仙は12歳になっているので「お仙泣かすな」という言葉が当てはまりません。

お仙は後に、丸岡城(福井県丸岡町にあり、天守閣は、国の重要文化財に指定されている)の城主になりました。

火の用心という言葉が、町触れの中でいつごろから使われはじめたか、はっきりとは分かりませんが、慶安元(1648)年に出されたお触れの中に、次のようなものがあります。

「町中の者は交代で夜番すべし。月行事はときどき夜番を見回るべし。店子たちは各々火の用心を嚴重にすべし」

こうしてみますと、本多作左衛門重次が「火の用心」という言葉を使ったのは、一般に使われたときより大分前のことで、彼が第一号使用者ということになるかもしれません。

### 本多作左衛門重次の肖像画



ここで、本多作左衛門重次について、少し触れておきます。本多作左衛門重次は、享祿2(1529)年三河の國に生まれ、同國の奉行となったとき、余りにも厳格な奉行であったために、「鬼作左」の異稱が付けられました。

数々の戦に出陣して手柄を立てましたが、後に豊臣秀吉の忌諱に触れ、上総の國に蟄居を命じられた後、慶長元(1596)年、下総國の井野でその生涯を閉じました。享年68歳でした。

本多作左衛門重次の菩提寺は、茨城県取手市青櫛一ノノ五七の「本願寺」で、寺宝として、重次の肖像画・家紋・旗印・兜・馬具・徳川家康から拝領した金団扇などが保存管理されています。

丸國城の一画に、「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の石碑が建っていますが、丸國町はこの碑文にあやかって、平成5年に、「日本一短い母への手紙」を公募して話題となりました。

「火の用心」という言葉は、火災予防の合言葉として現在も広く使われており、「火之要領」や「火之用心」などと言葉もじりをしながらも、今日に至っています。

防火標語は、それぞれの時代の社会的背景を反映して生まれてきています。明治時代に馬引き蒸気ポンプが登場すると「ポンプ百より用心一つ」という標語ができ、大正時代の関東大地震を経験した後には「不意の地震にふだんの備え」、「火事だ地震だ まず消せ火種」という標語が登場しました。昭和時代に入ってから戦時中は「火事は身の損、国の損」、「火の用心 だれにもできる御奉公」というものが、戦後の物資欠乏時代になると「火の手に渡すな衣食住」という当時の社会情勢そのままの標語が生まれました。

これらの防火標語は、それぞれの消防機関が独創性を凝らして作っていますが、そのほかに全国的に統一した標語が必要だという声が高まってきたため、統一標語を作るようになりました。標語の決定に当たっては、昭和41(1966)年度の標語から自治省消防庁と(社)日本損害保険協会が共催して、火災予防思想をより広く普及させるために、一般から募集することになり現在に至っています。

なお、東京における「火災予防運動標語の変遷」もご参照ください。



## 第1章 表現の楽しみ

### 第3節 絵の情景を詩や文章に表そう

教科教育学科国語教育学専修

佐伯 友紀子 森下 美紀

#### I 本節のねらい

第1章は、「国語表現」の導入として設定されている。そこでは、個々の自由な発想をもとに表現することの楽しみを味わうことが目的となる。その中で第3節は、一枚の絵を観察し、絵に描かれている情景を個々の捉え方をもって文章に表わしていく。そのような活動を通して表現するということを楽しむ。

#### II 学習者観（対象：高校1年生）

従来「書く」活動は、遠足や運動会といった学校行事の感想や反省文というように、学習者の実体験をもとに文章を書き進めることが中心となっていた。これらを書くためには事実にも忠実でなくてはならないという制約があり、そのために学習者は苦しみ続けてきた。「書く」ときには、事実にも忠実でなくてはならないという固定観念が出来上がってしまっている。学習者にとって「書く」ことは何の喜びもなく、むしろ苦痛を伴うものとして存在している。

そういった学習者の固定観念を払拭するためには、「書く」作業を想像や自由な発想から始めることが考えられる。自由な想像や発想は、自由な表現へと導いてくれる。言語で表現するという制限は変わらずに存在するが、文体や分量は自由なものとなる。「書く」ということが、実は自由に楽しめるものだとすることに気付かせたい。

#### III 本節の可能性

- ・物事をさまざまな視点で捉え、自由に発想することができる。
- ・自由に「書く」ことから表現に対する楽しみを養うことができる。
- ・他者の表現に触れ、自己の発想の豊かさにつなげることができる。

◎指導目標

- ・一枚の絵を観察し、さまざまな視点で捉え、自由に発想することができる。
- ・自由な発想から自由に書き、「書く」ことを楽しむことができる。
- ・他者の表現に触れ、自己の発想と照らし合わせるができる。

◎指導計画（全一時）

指導目標	学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・出来事を、さまざまな視点から捉えることができる。</li> <li>・自由な発想から、楽しんで「書く」ことができる。</li> <li>・他者の表現に触れ、自己の発想と照らし合わせるができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵を観察し、何が描かれているかをノートに書き出す。</li> <li>・詩や文章を書く。</li> <li>・出来上がった詩や文章を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵の隅々まで観察させる。</li> <li>・机間指導を行い、柔軟な発想を導く。</li> <li>・自主的に発表する者を優先するが、いない場合は机間指導であらかじめ選んでおいた学習者に発表させる。</li> </ul>

◎学習指導案

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の活動について説明を聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カラーOHPで、教科書の絵を拡大して映す。カラーOHPがない場合には、カラーコピーして拡大しておいた絵を黒板に貼る。</li> <li>絵を観察して、そこから詩や文章を書くということを知らせる。指導者が例示するのも可。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業に取り組む姿勢が整っているか。</li> </ul>
3分	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵を観察し、何が描かれているかをノートに書き出す。</li> <li>観察したものから想像が生まれた時点で詩や文章の創作に入る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>描かれた出来事、または、事物について見つけられる限りをノートに書き出すよう助言する。</li> <li>机間指導を行いながら、行き詰まりを感じる学習者には、どの視点から文章を書くか、といった助言を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵をよく観察しているか。</li> <li>自由な発想を生かして書き進めているか。</li> </ul>
35分	<ul style="list-style-type: none"> <li>出来上がった詩や文章を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自主的に発表する学習者を優先するが、いない場合は、机間指導であらかじめ選んでおいた学習者を指名する。</li> <li>発表者には、教室の後ろに立って発表するよう指示し、聞く側は黒板の絵を見ながら発表を聞くように指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>堂々と発表できているか。</li> <li>他者の表現を、味わっているか。</li> </ul>
45分	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者の発表を聞いた感想を発表する。</li> <li>本時の学習を振り返って、感想を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ランダムに指名する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「書く」こと楽しさを感じることができたか。</li> </ul>
50分	<ul style="list-style-type: none"> <li>ノートを提出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コメントを付して、後日返却する。</li> </ul>	

### ◎今後の課題

今回は、教科書に載っている谷内六郎氏の絵をそのまま取り扱った。しかし、他の方法として学習者自らが選んだ絵はがきや写真などをもとに創作活動をすることもよいかもしれない。そのほうが描きたいことがどんどん浮かんできて、「書く」楽しみを味わうには最適だと考えられる。けれども、そこには伴うリスクがある。絵を選ぶことに時間がかかるであろうし、選ばれた絵もさまざまな角度から観察することに耐えられるものか分からない。今回取り扱った絵は、複数の人物が描かれており、その人物たちの間で交わされる何らかの会話が想像できる。絵に描かれる出来事が物語性を持っているということもあり、比較的容易に想像が膨らむであろうと考え、採用することにした。しかし、創作のきっかけとなる絵はこれから考えていく余地があるようだ。

また、創作の場面において、今回の指導案ではワークシートを用意しなかった。たいていの学習者は自分のノートを持っている。学習記録は主としてノートに残していくもので、ワークシートという別格のものは、糊で貼るか何かの手間を挟まなくては記録として残らない。さらに、今回の授業は「自由に楽しむ」ことが中心である。ワークシートを配って指導者の指導したい型に学習者を収めたくないという配慮からもある。けれども、場合によってはさまざまな捉え方をすることに抵抗があり、題材探しやその活用の仕方をワークシートで導いてやらなければならないかもしれない。学習者の実態にあわせて考えていく必要がある。

### ◎参考文献等

- ・谷内六郎文庫③『風とぬりえ』 谷内六郎 著 2001年4月 マドラ出版
- ・「横須賀バーチャル美術館 谷内六郎のアトリエから」  
<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/v-museum/taniuti/index.html>

《参考》

文章の視点となる題材とその活用例



谷内六郎作「影だよ」

視点となる題材例	その活用（中心に描かれるであろうもの）例
泳いでいる少年	魚をしとめたつもりであったが、実は魚の影だった。少年の悔しさと恥ずかしさを中心に描く。
岸で休む少女	夢中で魚を追いかけるあまり、ついつい魚の影を本物の魚と勘違いしてしまった少年をほほ笑いながら罵める。淡い恋心。実は病弱。
泳ぐ魚たち	少年に捕まらないように逃げまわる。間違えて影にもりを立てた少年を嘲笑う。
その他（岩、太陽、麦わら帽子、水中眼鏡、ゴム草履、海、絵には描かれていない人間など）	少年、少女、海（または湖）、絵に描かれるあらゆるものを優しくみつめる。



谷内六郎作「おいしい宿題」

視点となる題材例	その活用（中心に描かれるであろうもの）例
道草をする少女	もう一人の少女との会話。花かざりを作ることに夢中になって、カバンの中身を山羊に食べられていることに気付かない。帰りぎわに気付いて大慌てする。
山羊	大好物の紙を食べる至福のひとつ。印刷のインクが甘くて絶品。
カバンの中のプリント	見たこともない物体が、自分に液体らしきものをたらす。気持ちが悪いと思っているうちに食べられてしまう。
その他（空、太陽、山、家屋、木、木の目、草、花、蝶、絵には描かれていない人間など）	少女二人が道草している間に、山羊が二人の宿題を食べてしまうという一部始終を暖かい眼差しで見つめる。

◎作品例

タイトル 「夏のふたり」 （「影だよ」より）

視点 第三者  
設定 兄と妹の夏休み

友紀子と雅治は、いつものように家を出た。  
それは、夏休みに入ってからの日課であった。  
いつものように目的地に到着すると、水着に着替え、一目散に水の中に飛び込んだ。  
しばらくして、友紀子が言った。  
「雅治兄ちゃん、今日こそは、おっきい魚とってよね。いつも口だけなんだから。」  
「そんなはずはないさ。俺は魚とるのうまいぜ。」  
口をとがらせて雅治は言った。  
「じゃあ、とってみせてよね。」

静かに時は流れた。水の上にはちいさなヨットの模型がゆらりゆらりと揺れていた。  
雅治もゆらりゆらりと揺れていた。友紀子は岩に座り、音を立てずに静かに待っていた。  
その時だ。  
「あっ！取れた。おっきい〜！」友紀子は思わず叫んだ。  
『兄ちゃん、すご〜い。』そう言って立ち上がろうと足を動かした瞬間、  
とれたはずの魚は、あっという間に消えてしまった。  
そう、とれたはずの魚は実は、魚の影だったのだ。  
「大物がとれたのにな。」  
水から上がると、雅治はそう言って笑った。  
「うん、見た見た。かっこよかったよ。」  
太陽も笑っているみたいだった。

タイトル 「影」 （「影だよ」より）

視点 第三者  
設定 仲良しな男の子と女の子

あつい夏の日 少年は魚の影を追いかけた  
麦わら帽子 少女は少年の影を追いかけた  
あつい夏の日 光の強い日だった



## 第1章 表現の楽しみ

### 第4節 歌詞のイメージを文章に表そう

教科教育学科国語教育学専修

板持百香里 河村朝子

#### I 本節のねらい

自由なイメージや発想によって一つの作品をつくりあげること、表現の自由さに気付かせる。ここで、表現の基礎的な事柄を理解・習得させる前の準備段階として、表現活動に対して親しみをを持たせる。また、日常触れることの多いものを教材に用いることで、表現活動に興味・関心を持たせ、意欲的に学習を行う態度を身に付けさせる。

#### II 学習者観

対象は高校一年生。

受験を終えた高校一年生。これまでの学習、特に高校受験を目指した学習では、答えは一つであるという意識が強く、学習者は正解というものに縛られてきたであろう。また、これから大学受験や就職など進路を考え始める学習者は、勉強に対する不安を感じているに違いない。そのような学習者にとって、普段の生活で身近に感じ、自分自身の感性に直接かかわってくる音楽の歌詞が教材となれば、親しみを持って学習に取り組むことができるだろうと考えられる。

また、学習者は日常の生活の中で様々な経験や考えを持っており、それを誰かに伝えたいという思いも持ち合わせているだろう。たとえありのままに伝えることが難しい内容であっても、歌詞からうけたイメージに便乗し、物語やドラマといった虚構のものによって語ることは可能であるだろう。このように物語やドラマは、学習者自身の内にあるものや独自の自由な発想によってつくり出すことができるため、学習者は表現の自由さに気づくだろうと考えられる。

本章第4節では、歌詞のイメージを物語にすることを通して、表現活動に対する親しみや楽しさを覚え、国語表現活動の初段階のうちに学習者の不安や抵抗を少しでも和らげることを目指したい。

#### III 本節の可能性

- ・歌詞を教材とすることで、表現活動への取り組みに親しみを持つことができる。
- ・独自のイメージや発想で表現することの楽しさを知る。
- ・物語やドラマをつくりあげることを通して、表現することへの親しみを覚え、意欲的に活動に取り組むことができる。
- ・イメージすることにとどまるのではなく、イメージしたものを物語やドラマにして表現することができる。

○指導目標

- ・自由な発想による表現を楽しむことができる。
- ・国語表現の学習活動に対し、意欲的・積極的に取り組むことができる。
- ・イメージしたことを言葉で表現することができる。

○指導計画（全一時）

指導目標	学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由な発想による表現を楽しむことができる。</li> <li>・国語表現の活動に対し、意欲的・積極的に取り組むことができる。</li> <li>・イメージしたことを言葉で表現することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージをふくらませて物語をつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の説明のもと、各段階を追っていく意味を理解しながら物語づくりを進めさせる。</li> <li>・机間指導を行い、活動が進まない学習者に対しては助言する。</li> </ul>

○学習指導案

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・歌詞のイメージから物語をつくることを知る。	・生徒誰もが知っているような流行の歌を例に取り上げ、そこから受けたイメージと自分の日常の経験や思いとを結び付け、虚構の物語やドラマをつくるのが容易であることを伝える。	
2	・各自で歌詞を読む。	・この後物語をつくることを、意識させながら読ませる。	
5	・CDを聞く。		
10	・ワークシートの使い方の説明を聞き、物語をつくっていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを配布する。</li> <li>・物語を書くまでは、教師の説明のもと、順に活動させる。</li> <li>・各活動を行う意味を理解させる。</li> <li>・机間指導を行い、活動が進んでいない学習者に対しては助言する。</li> <li>・授業終了5分前までに書き終えるよう指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明を聞く姿勢ができているか。</li> <li>・物語を書こうとする意欲がみられるか。</li> <li>・イメージをふくらませて表現できているか。</li> </ul>
45		<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のまとめをする。</li> <li>・ワークシートを回収する。</li> <li>・全員分の物語をプリントにして、後日配布する（この時、名前はふせペンネームで掲載する）ことを伝える。</li> </ul>	

### 《今後の課題》

今回、中島みゆきの『幸福論』を教材にして、物語やドラマをつくることに決め、実際に私たちは活動してみた。しかし、材料も手段も少ない状態からでは物語やドラマを書き進めていくのは意外に難しいものであった。そこで一つの対策として、物語づくりの導入をするという案があがった。第一時からいきなり物語やドラマをつくるのではなく、まず他の歌詞を用意し、そのタイトルをつけるという活動である。さらになぜそのタイトルにしたのかを書かせる。そうすることで、歌詞に対する自身のイメージを出せるだろうし、表現の楽しさを感じられ、表現活動に対して抵抗をなくし親しみを抱くことができるだろうと考えたからである。私たちは当初この活動を授業の中に取り入れようと考えていた。だが、その活動を取り入れるとどうしても二時間必要になる。私たちは本時を導入と考え、そこまで時間をかけたくないと思い、今回は取り入れないこととした。そこでワークシートをつくり、それを利用して物語やドラマをつくっていくこととした。

また、物語を書く過程で学習者が気付いたであろう表現の自由さを、他の学習者が書いた物語を読むことで、より明確に気付かせたいと考えている。しかし、一時間で終わらせることを前提に授業をつくと、物語をつくる活動にどうしても時間がかかり、授業中で他の学習者の作品に触れることができない。そこで、授業後ではあるが全員分の作品をプリントにして配布することとし、一応の対策としたい。

# 1/36 ストーリー

シチュエーション

物語をつくるときの手助け  "役にたします。"

★歌詞をよんで、どのような言葉が浮かんできましたか。  
例) 悲しみ、暖かい...など

さみしい、多岐り、シズ

★あなたの日常を振り返ってみて、そのような言葉が当てはまる経験や出来事があったら書いてみよう。

自分のやっていたことが言えられなくて、悔しい思いをした。  
(歌詞が一生懸命努力していたのに、レキエレーになれなかったことなど)

★歌詞の中で強く心に残った箇所はどこですか？

今夜泣いている人は 1人一人ではないはずだ"  
悲しいこと言ひ憶は 此の星の裏表 溢れるはずだ"

★そこではどんな場面や状況が想像できますか？

電気もついていない真暗な昔屋の中に、  
何もせず泣いて泣いて泣いている男の人がいる。

→想像した場面・状況は、あなたのつくる物語の材料のひとつとなるはず！

★あなたのネタバレを自由につくってみよう。

例えば・・・登場人物、状況設定、物語の展開、自分の思い、など。

男の人

30歳くらい  
歌手 (その前に売れていない)

学生時代から音楽をはじめた

卒業してデビューしたものの、

なかなか売れない

自分ま(言いで、曲をかき続けるが)  
世間で言えられたい

自分の歌が言えられたい

学生1年

→ 歌うことの迷い、とまどい  
ためらい

たけれど、や(10)歌が大好き

歌を続けたい  
歌うことの意味

前向きに生きる  
希望のあるもの

# 1/36 ストーリー

キャラクター

物語をつくる時の手助け 

★歌詞をよんで、どのような言葉が浮かんできましたか。  
例) 悲しみ、麗しい心...など

女 子

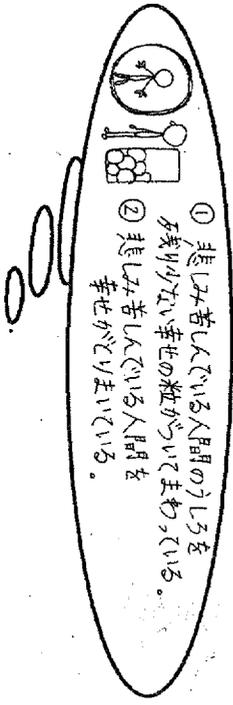
★あなたの日常を振り返ってみて、そのような言葉が当てはまる経験や出来事があったら書いてみよう。

他人をうらやましいと思うことはこれまでに何度もありました。  
そんな時、自分は運が悪いのか不幸な人じゃないかと思ったりしました。だけどそんなことはないと今は思える。

★歌詞の中で強く心に残った箇所はどこですか？

プラスマイナス 幸せの在庫はいくら？

★ここではどんな場面や状況が想像できますか？



① 悲しみ苦しんでいる人間の光りを残さず少ない幸せの粒がうつりまわっている。  
② 悲しみ苦しんでいる人間を幸せが溢れまわっている。

→想像した場面・状況は、あなたのつくる物語の材料のひとつとなるはず！

★あなたのネ夕帳を自由につくってみよう。

例えば・・・登場人物、状況設定、物語の展開、自分の思い、など。

◎ “幸せ”というものは、少なくなったり、なくなってしまうものではない。どんな人間にも幸せは同じようにある。ただそのことに気が付かなかったり忘れてしまっただけ。

悲しいことやつらいことがあっても

生れた時からずっと幸せに包まれている。

↳ どうせ、生れに入っているのか。どこに用意されているのか。

誰も気づかない見えない世界、  
神様が手と手と  
神様が手と手と

生れたときはみんなが、神様が“幸せ”で包んでくれる。  
大人へ成長していく中で、他人の競争負か争争しくなるけど悲しいことがある。  
そんな時は自分から“幸せ”で包んで感じている。(でも本当は...)。

神様の違うのもの — 普通では存在しない、馬 生れたときはみんなが、  
神様が手と手と見えない。  
「土ま」みんなに運んでいくこと。  
いつも大切に。だから神様が信じて  
送られている。

イメージを膨らませて物語をつくってみよう。

タイトル

歌女

涙を流したのは何年ぶりだろう。悔しくて、悲しくて、肩を落してしまえばいい。真暗な部屋の中で、俺は一人だった。

俺の歌女は誰にも届かなかった。声がかれるほど歌ったのに、伝えずうとしたのに、誰の胸にも届かなかった。テーブルの上の煙草がゆくゆく燃えている。煙が真横に空に向かっていく。カーテンのすき間から街の明りがこぼれてくる。黒い闇にのまれてしまえばいいとつぶやいた。窓の外からは道行く人の笑い声。俺の心は、荒々しい無神経な手によって握りつかされた。

俺はまだ歌えるのか？  
いつか、俺の歌女は誰かのもとへ届くのか？  
答えのない問いが、いくつも浮かんで消えていく。

『今夜泣いている人は、業一でいいよ。』  
そう口ずさんだとき、俺の目から再び涙があふれた。そうだ、俺は歌女が好きなんだ。好きで好きで仕方ないんだ。あどからあどから涙があふれてきた。

俺はこれからは歌女をいいんだから。  
それが俺の願いから。

「俺はもう歌女をいいんだ」

心象 4/10

イメージを膨らませて物語をつくってみよう。

ジャンル

しあわせ

遠い遠い誰か知らない所に不思議な島があった。そこには半透明でコップ色をした美しい風船の上には、何個も何個も積み重ねられていた。

これを「幸せ」というのです。ある日、透明なロケットを持ち、銀色の鳥が「神様、今日は誰の心へ運んであげたいのですか？」と尋ねると、「いつか御苦労でした。今日はさき生まれた15歳の、15歳と16歳の人の心へ運んであげてくれ。落ちた心でさかちと帰らせてあげよう。お母さん、と神様は答えてくれました。銀色の鳥は息を吐き落とさないように、大切に大切に15歳の心へ運んでいき、そして16歳に「さき、今日は誰の心へ運んであげたいのですか？」と尋ねると、「いつか御苦労でした。今日はさき生まれた15歳の、15歳と16歳の人の心へ運んであげてくれ。落ちた心でさかちと帰らせてあげよう。お母さん、と神様は答えてくれました。銀色の鳥は息を吐き落とさないように、大切に大切に15歳の心へ運んでいき、そして16歳に「さき、今日は誰の心へ運んであげたいのですか？」と尋ねると、「いつか御苦労でした。今日はさき生まれた15歳の、15歳と16歳の人の心へ運んであげてくれ。落ちた心でさかちと帰らせてあげよう。お母さん、と神様は答えてくれました。銀色の鳥は、今度は桜さんの心へ運んであげよう。」

「さき、今日は誰の心へ運んであげたいのですか？」と尋ねると、「いつか御苦労でした。今日はさき生まれた15歳の、15歳と16歳の人の心へ運んであげてくれ。落ちた心でさかちと帰らせてあげよう。お母さん、と神様は答えてくれました。銀色の鳥は息を吐き落とさないように、大切に大切に15歳の心へ運んでいき、そして16歳に「さき、今日は誰の心へ運んであげたいのですか？」と尋ねると、「いつか御苦労でした。今日はさき生まれた15歳の、15歳と16歳の人の心へ運んであげてくれ。落ちた心でさかちと帰らせてあげよう。お母さん、と神様は答えてくれました。銀色の鳥は、今度は桜さんの心へ運んであげよう。」

ちわり

心象 1/10

## 第2章

### 表現の基礎

第1節 自己表現

第2節 わかりやすい表現

第3節 表現の工夫

第4節 言葉のキャッチボール

## 第1節 『自己表現』 加藤秀俊

教科教育学科国語教育学専修  
長坂哲志 秦恭子

### I 本節のねらい

我々は日常生活の中で数多くの言葉を発している。それは思いを語っているのかもしれないし、考えを述べているのかもしれない。しかし我々は、これら自己の内面を言葉を用いて表現するというそのこと自体に対して意識を向けるということはほぼないと言ってよい。本節では、まずこの、「言葉を用いて表現する」とは一体どういうことなのかということを見つめさせることで、日常の中で行われている表現活動にも目を向けさせたい。

本教材においては、表現という事象が洗練、抽象化されて述べられている。この哲学的な内容を押さえることにより、学習者は実生活における自身の表現についても新たな捉え直しをすることができるだろう。

今日、社会は多様化・複雑化し、私たちは自分の考えを言葉を用いて語り、伝えることのできる能力を要求されている。この能力の育成のためにも、表現行為の内実を見つめさせることは重要であると考ええる。

### II 学習者観 (対象：高校1年生)

内的世界が複雑化し始める時期にある学習者にとって、自己の内面世界を言語化し自己に対する認識を深めたり、また相手に伝えたりしていくことは非常に重要なことであると思われる。

しかし、高等学校に進学した学習者を待ち構えているのは、国文学中心主義の大学入試に向けた読解を中心とした国語科の授業であり、小中学校を通じて学んだ初歩的な表現技術は発達の可能性を探求されないままに放置されてしまっているのが現状である。そのため学習者は自分の思いや考えを言葉で相手に伝えることになんとなく苦手意識を持ちながらも、それを自覚して克服していこうとする姿勢を持たない。

私たちは本教材を通じて「表現するとはどういうことか」を考えさせることで、学習者に自分自身の「表現」の姿を見つめさせ、表現技術を磨いていくことの重要性を実感させたい。この実感を持つことで、学習者は次節からの表現活動に意欲的に取り組めるのではないかと考える。

### III 本節の可能性

日常生活における自身の「(言語による)表現」の姿とその問題点を見つめることで、よりよい言語生活を求める姿勢を身に付けさせる。

●指導目標

- ・音楽を聴かせることで「感覚の大海」を実感させる。
- ・日常生活における自身の「表現」の姿や言語における自然主義の限界を見つめさせることで、よりよい表現能力を身に付けることの必要性に気付かせる。

●指導計画

	指導目標	学習活動	指導上の留意点
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の日常生活における「表現」行為を見つめさせる。</li> <li>・筆者の主張を捉えさせる。</li> <li>・音楽を聴かせることで、「感覚の大海」を実感させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自己表現」について考える。</li> <li>・本文を読み、筆者の主張を捉える。</li> <li>・教師の用意した音楽を聴く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・捉えにくい箇所については、図を用いて説明を補う。</li> </ul>
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の学習を想起させる。</li> <li>・筆者の主張を捉えさせる。</li> <li>・言語についての自然主義の実態を知り、表現能力を高めていくことの必要性に気付かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文を読み、筆者の主張を捉える。</li> <li>・自ら表現する能力はなぜ必要なのかを考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教材において省略されている話題を提供する。</li> <li>・教材において省略されている結論に至る論拠の部分を補い、表現の必要性を考える活動の補助とする。</li> </ul>

第一時 指導案

○本時の目標

- ・日常生活における自分の表現行為を見つめさせる。
- ・「表現」とはどのようなものなのかを知る。

分	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	1「自己表現」という言葉について考える。	○日常生活の中で行われている自分の表現行為に意識を向けさせる。	・様々な表現行為に目を向けることができているか。
5	2本文に述べられていることについておおまかにおさえる。	○全文を意味段落ごとに範読し、その都度要約させる。 ○抜き出し・繋ぎ合わせだけではなく、自分の言葉で発表させるようにする。	・自分の言葉で語る事ができているか。
	3.段落ごとに詳しく読んでいく。	○適宜図示・説明を加える。	・本文の内容を正確に理解できているか。
17	・筆者のいう表現とはどのようなものなのかについて。	・筆者が表現をどのように捉えているかをおさえさせる。	
22	・身体的表現について。	・「気がすまない」という表現については図（資料①）を用いて説明をくわえる。	・言語表現と身体的表現の関係がおさえられているか。
27	・ランガーの論とコミュニケーション楽天主義について。	・ランガーの論については図（資料②）を用いて説明をくわえる。	
45		○教師の準備した音楽①を聴かせ、『感覚の大海』を実感させる。	

第二時 指導案

○本時の目標

- ・文化的社会的背景をおさえたうえで、表現能力の必要性を理解する。

分	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	1.前時を想起する。	○教師の準備した音楽②を聴かせる。	
10	2.(第一時学習活動3の続き)  ・基本的欲求であるということについて。	○表現がどのようなものかということから、表現能力の必要性に話題が移っていくことをはっきり意識させるようにする。  ・原典に見られる、愚痴をこぼすことや幼児期のおしゃべりについての例も挙げ、本文省略による論理の飛躍を補う。	・基本的欲求であるということを感じ覚的に理解することができるか。
22	・現代日本の問題点について。	・「表現」が本能に近いものでありながら学習の要素も関係あるということをおさえさせる。	・本能の側面だけでなく、学習の必要性についてはっきりと理解することができるか。
30	3.自らを表現する能力はなぜ必要なのかを考える。	・日本人の中に存在する言語についての自然主義のエピソードを補い表現の必要性を考える補助とする。	・日本人の文化的側面をも理解しつつ自分自身の問題として捉えることができるか。
45		・資料②を用いて次節からの活動に意識を向かわせる。	

## ●今後の課題

本教材を分析する段階で、本文中に明らかな論理の飛躍が見られるということが問題となった。そこで原典（加藤秀俊『自己表現』中公新書）にあたってみたところ、飛躍が見られた箇所には編集が加えられており、結論に至るまでの論拠にあたる部分が省略されているということが明らかになった。そのため本教材は、筆者の最終的な結論と中心に論じられている内容との間に微妙なずれを孕むものになっていると言わざるを得ない。

しかしこの教科書の性格・教材の配列を考慮すると、「表現の楽しみ」から本格的な表現の学習に意識を向かわせるために、本教材を通じて筆者の最終的な結論を理解することが学習者に求められていることは明らかである。そのため授業を構想する際、結論に至らしめる論拠の部分（本教材において省略されている部分）を補う必要性が生じた。

だがここで、原典における論拠の部分には現在の国語教育に対する痛烈な批判が多く語られており、すべてを取り上げて提示するわけにはいかないのではないかという問題が浮上した。結果的に今回は、学習者を筆者の主張の実感・理解に促すために適当だと判断される話題を取り上げたわけであるが、その判断が的確であったかは再度考え直す余地があると言えるだろう。

また本教材は説明的文章であるため、筆者の主張を読み取ることに終始してしまうと学習者は主体的に「自己表現」していく姿勢を持たないままに次節からの活動に臨むことになってしまう。それを防ぐために私たちは、学習者が筆者の主張を身をもって体験できる活動を取り込むことを考え、「『感覚の大海』を実感する」という活動を設定した。（他にも、表現の欲求を実感するために一時間黙っておくという案もあった。）しかし教科書本文にもある通り、学習者の実感（感覚）を教師が見て取ることは非常に難しく、本授業において中心となる活動であるにも関わらず評価の観点を持ちにくいものとなってしまったことが反省及び今後の課題として挙げられる。

## ●参考文献

「自己表現～文章をどう書くか～」（加藤秀俊著／中公新書／昭和45年12月25日発行）

## ●音楽資料

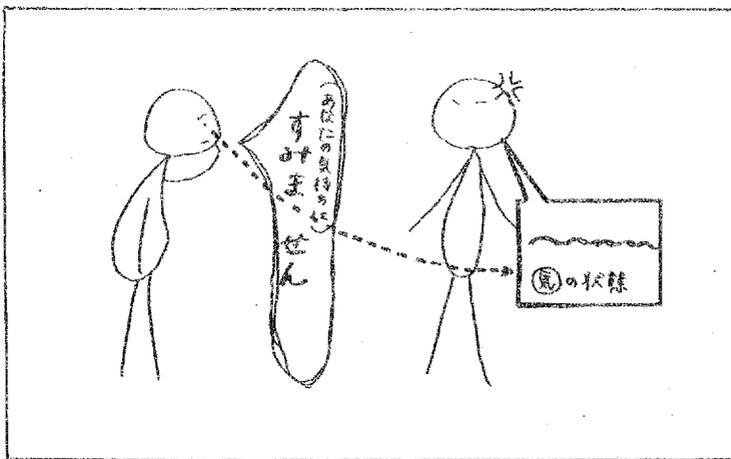
### 音楽②

「EINOJUHANI RAUTAVAARA ～Complete Works For String Orchestra Vol.1～」

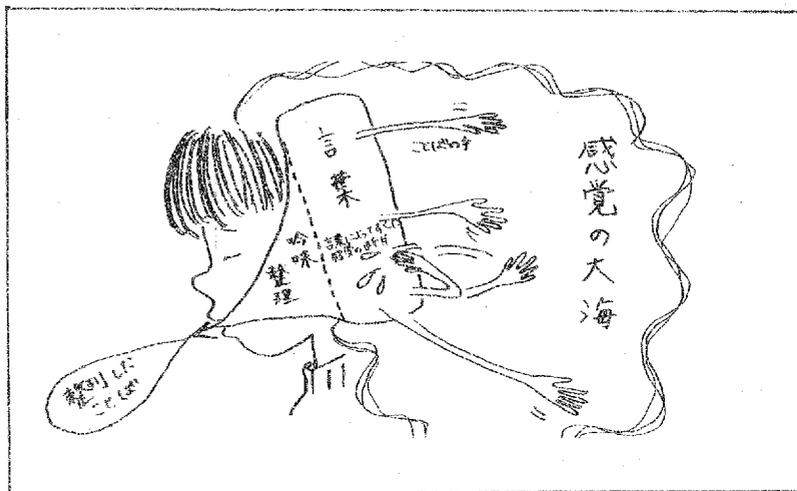
『PELIMANNIT—FIDDLERS, Op. 1 (1952)』

(ONDINE/ODE821-2)

資料①



資料②



音楽①



### 第2節 わかりやすい表現

教育学部教科教育学科国語教育学専修  
安富聖子

#### I 本節のねらい

本節では、①読む人にわかりやすいように、②自分の伝えたいことをできるだけ正確に伝える、ということの大切さを知り、他者を意識し文章を書くという態度を身につけさせる。また、どういう表現が読み手に分かり難く誤解をまねきやすいのか、どういう表現がわかりやすいのかを、例文もふまえてわかりやすく学習し、表現の基礎・推敲の基礎力を身に付けさせる。

#### II 学習者観

私たちは、学習者にとって自分の考えや気持ちを文章に書き表す機会はあまりないように思いがちである。しかし、はたしてそうであろうか。情報化の波のなか、文章を書く機会は増えてきているのではないだろうか。パソコンや携帯電話のメールを活用する生徒も多いはずである。ただ自己中心的に文章を書いてしまい、相手にいいたいことがうまく伝えられなかったという苦い経験をした学習者もいるであろう。

この章では、学習者の様々な表現活動において、読み手・相手を意識することの意味・大切さに気付かせたい。どうしたら自分の考えを相手にうまく伝えられるかを学習し、その手法を活用してわかりやすい文を書ける基礎力、推敲の力を身に付けさせたい。

#### III 本節の可能性

- ・文章を書くときに、読む人にわかりやすいように表現することの大切さを理解する。
- ・どのような表現がわかりにくいのか、わかりやすいのかを認識する。
- ・わかりにくい表現を、わかりやすい表現に改めることができる。
- ・文章を推敲するときの基礎的な注意点を学べる。

ただし、本節の授業は、「文章の書き方」における生徒作文を教材に使用しているが、都合により、授業実践全体を省略している。しかし、本節の授業実践には必ずしも影響はないものと考えられる。

○指導目標

- ・自分の考えを表現するときは、読み手を意識してわかりやすい表現を心がけるという意識を育てる。
- ・問題のある表現になる原因と、わかりやすくなる表現方法を理解し、実際に適切な表現に改めることができる。

○指導計画（全一時）

指導目標	学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを伝えるときには、相手にわかりやすいように表現しなくてはならないことを理解する。</li> <li>・問題のある表現になる原因と、わかりやすい表現にするための方法をしる。</li> <li>・問題のある文章を見つけ出し、適切でわかりやすい表現に改めることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二つの解釈のできる文章の二つの解釈を考え、発表する。</li> <li>・ワークシートを用いながら内容を理解する。</li> <li>・例文をわかりやすい表現に直す。また、問題点を発表する。</li> <li>・前回の授業で書いた作文（または問題文）から問題ある表現を抜きだし、わかりやすい表現に改める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次の活動に結びつけるための導入にあたる。</li> <li>・ワークシートを配る。</li> <li>・理解しやすいように補足説明をする。</li> <li>・自分の作文に問題点の少ない学習者のために、問題文を用意しておく。</li> </ul>

○指導案

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	例文Aの二つの解釈を考える。 今回の学習目的を知る。	わかりやすい表現を学習する理由をしらせる。	問題意識が持てたか。
8分	ワークシートの内容を理解し、例文の問題点を指摘し、わかりやすい表現に直す。	ワークシートを項目ごとに指名読みさせる。	内容を理解できたか。
30分	自分の書いた作文（または問題文）を読み、問題のある表現を見つけだし、わかりやすい	ワークシートの説明をする。机間指導をおこなう。	問題のある表現を見つけだし、その問題点を指摘し、適切に添削できているか。

40分	表現に直す。	本時のまとめをして、ワークシートと作文を回収する。	ワークシートに記入できているか。
-----	--------	---------------------------	------------------

### 〈今後の課題〉

今回、わかりやすい表現を学習させるにあたって、問題意識（どうしてわかりやすく表現する必要があるのか）をどうしたら持たせることができるかについて考えた。結局、学習者にとって一番わかりやすいと思われる「二つの解釈のできる文」を用いることにした。しかし、もっと良い導入方法があったかもしれない。

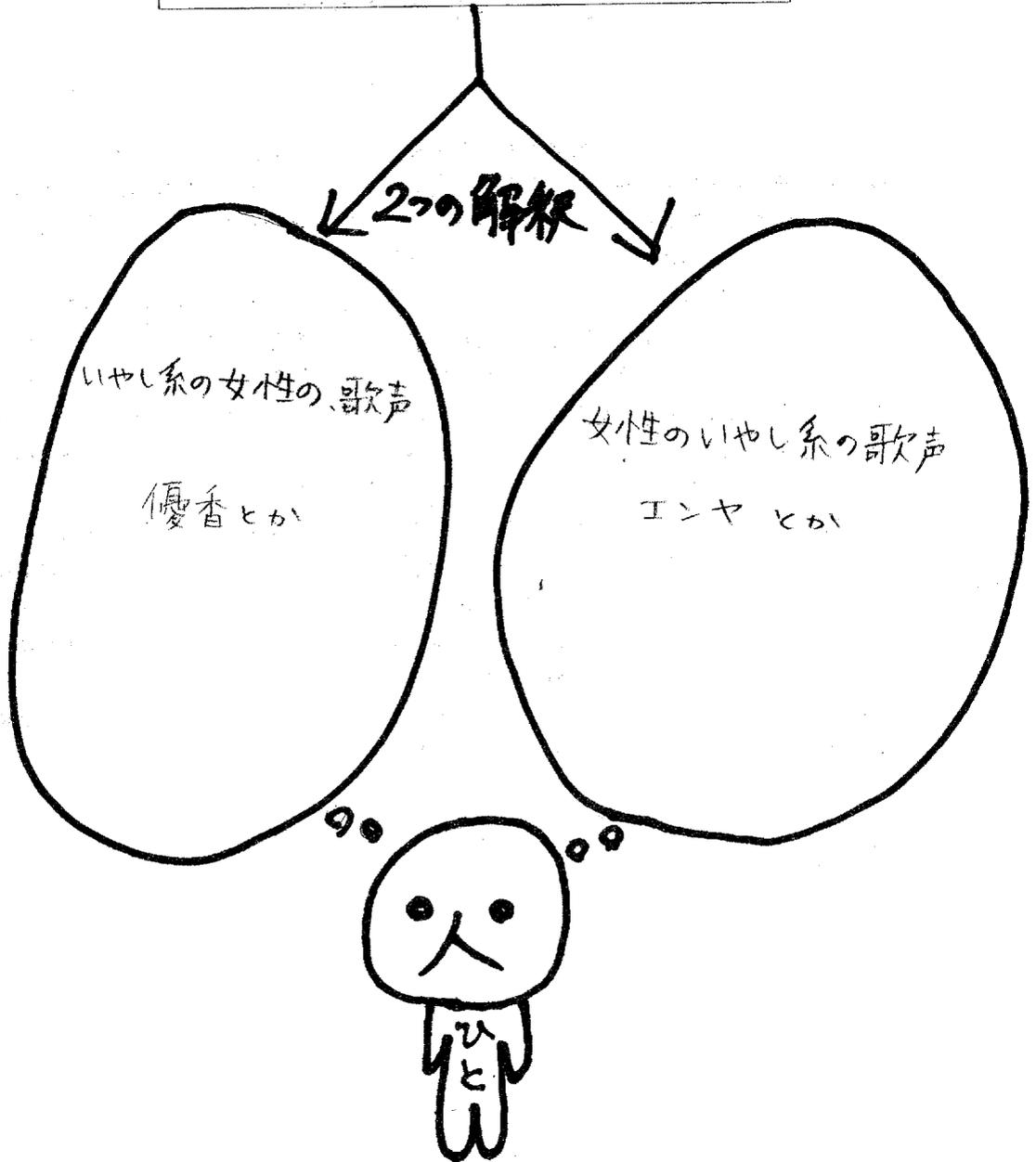
自分の作文を添削するという活動を組み込んだ。これは自分の表現の問題点を自分で見つけ、自分で直すことが大切だと思ったからである。しかし、学習者にとって、自分で問題点を見つけるのは少し難しいかもしれない。グループ学習の形にすることも考えたが、悪いところを他人に指摘されることに抵抗を持つ学習者のことを考え、却下した。また、隣の人とペアを作ってお互いの作文を添削しあう方法を取れば、自分自身で添削を行なうよりも楽しく取り組み、さらに問題点を見つけやすくなると考えられる。

文章能力には個人差があるので、添削する必要の無い学習者もいると思われる。よって、その対策として、問題点の含まれている文章を問題文として用意した。全ての学習者に暇な時間がないように考慮したい。また、添削する作文は前章「文章の書き方」で作成したものを活用させてもらうことにした。この授業のために作文を書かせることも考えたが、前時で作文していることを考え却下した。

前時の作文を添削するにあたって、プリントを使用することにしたが、そのまま原稿用紙に赤ペンなどで書き込む方が良いかも知れない。

例文A

癒し系の女性の歌声を聞いた。



Q. どうして、二つの解釈ができたり、読み手に理解されにくかったり、誤解を生むような表現になってしまうことがあるのかなあ？

A それには四つの理由があったのです。

1. 言葉と言葉の対応関係がわかりにくい！
2. 言葉の順序がわかりにくい！
3. 一文が適切な長さでない！
4. 読点が不適切である！



Q. じゃあ、どうしたらわかりやすくなるんだろう？

A. それには七つの改善方法があるぞ。

①主述のねじれをなくす！

例文：料理で一番大事なことは、味付けでも見た目でもなく、作る人が食べる人のことを思いやる気持ちがなければならない。  
である。

☆ (述語) は (主語) に対応した表現にする。

②主述の関係を明確にする！

例文：母が電話で父が明日で定年退職すると言ってきた。  
父が明日で定年退職すると母が電話で

☆ (主語) を明確に示す。

③修飾・被修飾の関係を明確にする！

例文：ゆっくり回転しながら移動する物体 / 美しい少女の歌声  
・回転しながら、ゆっくり移動する物体 / ・少女の美しい歌声  
・ゆっくり回転しながら、移動する物体 / ・美しい少女の、歌声

☆ (修飾部) を (被修飾部) のすぐ前におく。(読点) を打つなどの工夫をする。

④副詞の呼応の乱れをなくす。

例文：どんなにつらいことがあっても、決して努力だけはするべきだ。  
怠るべきではない。

☆ (副詞) のなかには (叙述) のしかたに一定の制約を伴うものがあるので気をつける。

☆5W1H

⑤言葉の順序をわかりやすくする。

例文：久しぶりに買物に私は昨日銀座へ出かけた。  
昨日久しぶりに私は銀座へ買物に

☆一般的に(5W1H)の順に従うと良い。

いつ (When)  
どこで (Where)  
だれが (Who)  
何を (What)  
なぜ (Why)  
どのように (How)



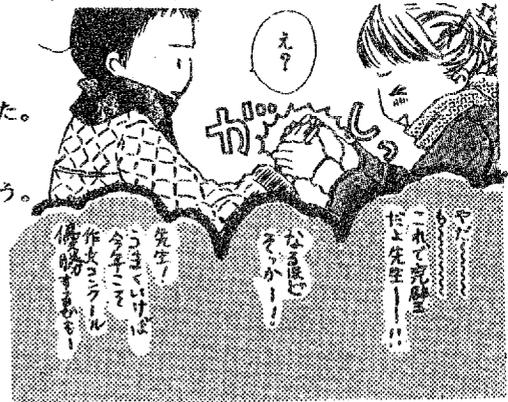
⑥一文を短くする。

例文：夏場はマムシが出るそうで、<sup>X</sup>地元の人が、長靴を履いてできるだけ日の当たるところを歩くほうが安全だと言っていたので、<sup>X</sup>長靴を忘れないで持ってきてください。  
夏場はマムシが出るそうです。  
言っていました

☆理解しやすく、文中の（対人関係）がわかりやすい長さにする。

⑦読点を適切にうつ。

例文：私は急いで走りさった男の後を追いかけた。  
・私は急いで走りさった男の後を追いかけた。  
・私は急いで走りさった男のイ後を——。  
☆（修飾関係）が明確になるように読点を打とう。



○実際に自分の書いた作文を読み返して、わかりにくい表現がないか調べてみよう。

読み返した作文の題名…「

」

わかりにくいと思った文章	問題点	わかりやすく直した文章

◎学習の手順◎

1. 自分の書いた文章の中で、わかりにくい文章があったら抜き出してみよう。
2. どこに問題点があるのか、どういうところがわかりにくいのかを、書き込もう。
3. わかりやすい表現に直してみよう。
4. 早く終わってしまった人は、問題文「僕の夏休み」を読んで、わかりにくい表現に赤ペンで線を引き、その横にわかりやすい表現に直した文を赤ペンで書き込みましょう。

僕の夏休みは最悪な事件とともに幕をあげた。

七月二十日、きれいな友達の写真をなくしてしまった。僕の宝物だったのに。その日の夜は涙で枕を濡らしてしまった。  
友達のまぶたは写真

七月二十四日、こっそりと夜の学校内に河村君とじのびこんだ。僕は小さなペンライトをにぎりしめ、いさを殺して七不思議の一つ「恐怖の音楽室」へと向かった。しかし、「こらまー誰だおまえらーなにしてるー」という叫び声が聞こえた。なんと、最もこわい村田先生に見つかったのだ。僕は全力で走った。しかし、階段で河村君がその時利刃を階段で二けてけがをしてしまった。僕は村田先生に捕まってしまった。その後一時間説教された。

八月十六日はまことに待った盆踊り大会だ。僕は、盆踊り大会を楽しみに踊りの練習をしてきたが、前日から雨が降りだしてやきもきしていましたが、当日は適度に涼しい絶好の盆踊りにもってこいの夜になった。夜中まで僕は踊り続けました。

八月二十五日、僕は事故にあってしまった。事故の知らせを聞いて、母はさぞかし驚いた。さいわいなことに、僕のけがはかすりも軽傷ですんだ。  
だだもろ

本当に今年の夏休みは嫌なことがたくさんあった。そこで、来年の夏休みの目標をかかげた。一番の目標は、来年はスリリンダだけと平和で楽しいくすくすして、精一杯くいの  
ないものじだい。  
やることだ。

## 第2章 表現の基礎

### 第3節 表現の工夫

教科教育学学科国語教育学専修

石松 祐二 下田 華世

#### I 本節のねらい

現在、自分の表現したいことを、うまく相手に伝えることができない人々が増えているように思われる。人々が、うまく表現できない原因の一つとして、飾った言葉で表そうとする傾向が強いことが挙げられる。しかし、本来「うまく、美しく表す」というのは、様々な表現の工夫を用いて、自分の伝えたいことを生き生きと、できるだけ的確に伝えることなのである。また、ものごとを表現する方法は人によって様々であるが、なるべく自分の言いたいことを生き生きと表現しようとする姿勢が重要である。したがって、第II章は、様々な表現の基礎を学ぶことを目的としている。第II章において、本節は、相手に自分の伝えたいことを的確に、かつ生き生きとした言葉で伝える表現技法を身に付けることがねらいである。今回私たちは、キャッチコピーを考えさせる活動を通して、学習者に様々な表現技法を身に付けさせることとする。

#### II 学習者観（対象学年 高校一年生）

現代の高校生は、独自の言葉、いわゆる若者言葉を使い、お互いのコミュニケーションをとったり、仲間意識を持ったりする。若者言葉は、高校生にとっては、一つの勲章のようなものである。しかし、実際に社会に出てみると、若者言葉は、話し相手にとってもわかりにくく、むしろ、煙たがられるものである。よって、学習者は、社会に出る準備期間である高校時代に、自分の主張を的確に、かつ、生き生きとした表現で相手に伝える技術を学ばなければならない。また、様々な表現技法を、机上だけではなく、

実際に使えるようにならなければならない。そのためには、学習者が興味を持って取り組み、表現を工夫することの重要性、表現を工夫する面白さを実感する必要がある。

本節では、学習者に、工夫した表現でキャッチコピーを作らせることによって、表現の工夫の重要性、面白さを実感させたい。

### Ⅲ 本節の可能性

- ・自分の表現したいことを的確に、かつ、生き生きとした表現で相手に伝えることができる。
- ・表現の工夫をする重要性、面白さに気付き、机上だけではなく、実際の生活にも表現の工夫を行おうという意欲を喚起させることができる。
- ・自分の魅力の一つとなりうる表現技法を身につけることができる。

## 指導目標

- ・表現技法を学び、「表現の工夫」のおもしろさ、重要さを実感させる。また、学んだ表現技法を実際の生活において進んで用いることができる。
- ・自分の伝えたいことを的確に、生き生きとした表現で伝えることのできる力を養う。

## 指導計画 (全二時)

	指導目標	学習内容	指導上の留意点
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現技法を学び、実際に技法を使うことができるようにする。</li> <li>・表現の面白さ、重要さに気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「表現の工夫」をする意義を考える。</li> <li>・教科書に記載されている表現技法を学習する。</li> <li>・学習した表現技法を用い、「表現の工夫」をする面白さに気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書に記載されている例文だけでなく、学習者の生活に即した例文を挙げて学習させる。</li> </ul>
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学んだ表現技術を使って、的確に、生き生きとした言葉で表現することが出来る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班でキャッチコピーを作る。</li> <li>・作ったキャッチコピーを発表する。</li> <li>・他者の発表を聞き、評価することで、「表現の工夫」をする面白さや魅力を味わう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・効果的に発表させるようにする。</li> </ul>

## 第一時 指導案

○本時の目標

- ・「表現の工夫」の必要性、また「表現の工夫」をすることの面白さに気づくことができる。
- ・表現技法を学び、それらの技法を実際に用いることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容を明らかにする。</li> <li>・項目①～④までの表現法を理解する。</li> <li>・項目⑤～⑦までを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身の回りには様々な表現の工夫がみられることを指摘し、それが我々に与える効果を考えさせる。</li> <li>・魅力があり、生き生きとした表現とするために、表現の技法を学ぶことを伝える。</li> <li>・各項目ごとに教師が説明をする。</li> <li>・それぞれの表現法について、学習者の興味・関心に即した例を提示する。(歌詞、CM等より)</li> <li>・項目⑥の例文を用いて説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者が学習の目的を意識できているか。</li> <li>・すでに知っている技法を、改めて学習者が確認しているか。</li> </ul>
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートを用いて学習を進める。(項目①～②までの表現技法を実際に使用する。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由に回答するように指示する。</li> <li>・机間指導を行い、学習活動を支援する。</li> <li>・机間指導をする際に、発表させる生徒を決めておく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由に様々な表現ができているか。</li> </ul>
30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートで考えた内容を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者に、他者の「表現の工夫」のおもしろさに気づかせる。</li> <li>・次時にキャッチコピーを作ることを告げ、その手順を確認させる。</li> </ul>	
40	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチコピーのビデオをみる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチコピーを作る手順を理解できているか。</li> </ul>

## 第二時 指導案

○本時の目標

- ・学んだ表現技法を使って、的確に、生き生きとした言葉で表現することができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・前時の想起をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチコピーを作る手順を確認させる。</li> <li>・お菓子のキャッチコピーを作ることを提示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチコピーを作る手順を想起できているか。</li> </ul>
5	・班でキャッチコピーを作る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お菓子を配る。</li> <li>・お菓子は授業の一環として使用することを告げる。</li> <li>・お菓子の外見や味に注意しながら食べるように指示する。</li> <li>・第一時で学習した項目①～④までの表現法を用いるようにさせる。</li> <li>・表現技法を用いたキャッチコピーを例示する。(他のお菓子で)</li> <li>・机間指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班で各自のアイデアを出し合いながら話し合いが出来ているか。</li> <li>・「表現の工夫」を用いてキャッチコピーを作ることができているか。</li> </ul>
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャッチコピーを発表する。</li> <li>・発表班以外は、発表班についての評価を評価シートに記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の仕方を参照して、発表するように指示する。(評価シートに記入してある。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・考えたキャッチコピーの説明を明確にできているか。</li> <li>・他班の発表を聞き、評価できているか。</li> </ul>
45	・教師の評価を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現を工夫することで、受け手の印象が大きく異なることに気づかせる。</li> <li>・生き生きとした魅力ある表現の素晴らしさに気づかせる。</li> </ul>	

## 《今後の課題》

今回私たちは、学習者に表現技法を使う面白さに気付かせ、意欲的に学習させたいと考えた。その結果、キャッチコピーを作らせるという活動をとり入れることにした。しかし、この活動を取り入れることで、二点の問題が生じる。

第一点は、教科書の内容のすべてを、しっかりと学習させることができないということである（教科書 p 28～p 29 の五～七にあたる部分）。もちろん、第一時において、すべての技法に関して指導をしている。しかし、キャッチコピーを作らせるという活動をとり入れることで、学習者に残る表現技法の印象は、比喻や体言止め（教科書 p 26～p 27 の一～四にあたる部分）ばかりになってしまう恐れがある。

第二点目に、学習者が、文章を書く際に、表現技法を使うことができないのではないかということである。キャッチコピーには、様々な表現技法が用いられており、生き生きとした表現という概念を体感するには、格好の教材となりうる。しかし、学習者の中で、キャッチコピーを作ることで学んだ表現技法を、文章を書く際に用いるという意識が芽生えるのかどうか、心配される点である。

以上の二点を受け、私たちは、キャッチコピーを作るという活動をやめ、文章を書かせる活動を取り入れようとも考えた。しかし、第二章本節のねらい（生き生きとした表現技法のすばらしさに気付かせ、実際に技法を身に付けさせる）を考えると、やはり、キャッチコピーを作る活動の方が適していると考えます。また、文章を書かせる活動は、今後、教科書を学習する際に何度も取り入れる機会がある。その際に、適宜、文末表現・敬体や常体を学習させた方が、本節で学習させるよりも効果的ではないだろうか。

そこで、今後の課題として、以下に二点述べることにする。

まず一つ目に、今後、文章を書く活動を取り入れる際に、適宜、表現技法を指導する機会を設けることである。例えば、記録文を書く際、手紙を書く際、それぞれにあった表現技法を指導するということである。短い時間でもよい。一度、本節で学習したからである。本節で、学習した基本的な技法を、文章を書くという応用の部分で反復して学習させることで、

学習者にしっかりと表現技法を定着させることができる。

二つ目に、本節で取り入れた活動を、今後の学習にも生かすということである。例えば、今回の活動で、自分達のキャッチコピーを、全員の前で発表させるというものがある。発表をさせる際、工夫をするように指示することにした。これは、今後の活動につなげるためである。学習者が発表している様子をビデオに録画し、プレゼンテーションの必要性を考えさせる時の教材にしたり、ディベートの作戦を考えさせる時に参考にさせたりするのである。

一つ、一つの節では、時間が限られているし、様々な活動を取り入れることは難しい。よって、それぞれの節で、しっかりねらいを定め、他の節との関連を考えながら活動を考えていくことが重要であると考え。また、第一章、第二章で学習した基本的なことを、第三章以下の応用の場において、反復学習させることも重要である。基本、応用と分別するのではなく、体系的・総合的に学習させていかなければならないと考える。

## 生き生きとした表現技法を学ぼう！！

\_\_\_\_\_ に言葉を入れて、文を完成させよう！

### ①直喩

\_\_\_\_\_ 君は、\_\_\_\_\_ のような  
\_\_\_\_\_ だ。

### ②隠喩

高校時代は、人生の \_\_\_\_\_ だ。

③天気や気候を擬人法で表現してみよう！！

④・「パチパチ」という擬音語を使って、文をつくってみよう。

・「ゆうゆう」という擬態語を使って、文をつくってみよう。

**☆学んだ表現技法を使って、自由に表現してみよう！☆**

## 発表の仕方も工夫してみよう！！

今日の発表は、新製品のキャッチコピーを話し合う会議における発表（プレゼンテーション）です。自分達のキャッチコピーを採用してもらうためには、そのキャッチコピーの魅力を的確に、明確に聞き手に伝えなければなりません。どのように発表すれば、聞き手の心を掴むことができるのでしょうか。キャッチコピーとともに、発表の仕方も、班で話し合ってみよう！

（例）

①キャッチコピーを発表する。

②発表したキャッチコピーの説明をする。

- ・商品の（ ）点を強調するために、（ ）表現を使った。
- ・消費者の印象に残るように、リズムを考えた。

等、表現の工夫をした点と、その目的を明示する。

③自分達のキャッチコピーのセールスポイントをアピールする。

- ・この（ ）というキャッチコピーを採用すると、（ ）ことが期待されます。

等、自分達のキャッチコピーの魅力を明示する。

☆例に挙げたような発表の手順だけでなく、発表の仕方（声の大きさ、間とり方等）も工夫しよう！

友達のキャッチコピーを評価してみよう！！

1年( )組 氏名( )

班	キャッチコピー	発表班へのコメント	評価

## 第2章

### 第4節 言葉のキャッチボール

教科教育学科国語教育学専修

大塚 隆正 川上 秀夫

#### I 本節のねらい

第2章は表現の基礎を学ばせることを目的として掘えている。そのなかでも本節は、私たちの生活で重要な位置を占めていながら、普段省みられることの少ない日常生活での会話を題材に取ったものとなっている。今回、私たちが学習者に本節を読み取らせることのねらいは、そのような日常生活での会話を改めて見つめなおさせ、自己の言語生活を振り返らせるきっかけを与えること。そして、話し手・聞き手という立場について着目させることで、日々のコミュニケーションを捉えなおすためのひとつの観点を学習者にもたらすことである。

#### II 学習者観（対象学年 高校一年生）

高校に入学し、少しずつ周囲の人間関係が固まっていく。その過程のなかで、自分の思うとおりの関係が構築できなかつたり、友達との踏み込めない壁を感じてしまったりすることで、対人関係の難しさを改めて経験し始める学習者も多いのではないだろうか。だが、学校という空間のなかで、そのような問題を改善させるような時間や要素は極めて少ないものであるだろう。もちろん、そのような問題は一朝一夕にして解決できるものではない。だからこそ、高校生一年生である学習者が対人コミュニケーションを考えるヒントを得る必要があるのではないかと考える。

本節では、評論形式を採りながら、日常生活の対話を考えるヒントが分かりやすく盛り込まれている。また、ひとつの理想ともいえる対話場面においての心がけが示されているため、学習者は本節の内容に自らの言語生活を照らし合わせ、それを振り返ることが可能となるであろう。そうしていく過程で、自分にとってよりよい対人コミュニケーションとは何かということを探索するためのきっかけを提供することができればと考える。

#### III 本節の可能性

- ・ 言葉や話し方について、改めて着目させることができる。
- ・ 日常生活において「話すことの目的」について考えさせることができる。
- ・ 日常の対話を円滑に行うためのヒントを与え、対話の大切さについて考えさせることができる。

## 指導目標

- ・ 日常生活の会話について改めて意識を高めさせ、自己の言語生活を振り返らせる。
- ・ 日常会話を行う意味について考えさせ、会話への意欲を持たせる。
- ・ 会話を行う上でのヒントを学習者に与え、自分の言葉や話し方を省みるためのひとつの視点を学習者にもたらし。

## 指導計画

	指導目標	学習内容	指導上の留意点
第一時	○ 日常の会話に着目させる。	○ 本文を通読する。 ○ 本節を読んでいく際の姿勢を知る。 ○ 本文が何に注目したものであるかを考える。 ○ 第八段落までを読解する。	○ 本節に書かれている内容や理論が、絶対的なものでないことを強調する。 ○ 日常会話について注目させるようにする。
第二時	○ 自分の言葉や話し方を省みるためのひとつの視点を学習者にもたらし。  ○ 日常会話を行う意味について考えさせる。	○ 会話のアドバイス1～7を読む。 ○ 会話のアドバイスそれぞれについて考える。 ○ 「会話のアドバイスを全て満たした人」について班で話し合わせる。 ○ 最終段落について考える。 ○ 感想を書かせる。	○ 学習者それぞれが、自身の言語生活について振り返ることのできるように配慮する。 ○ 話し合いが終わった後、本節で示されていたような話し方ができていたかについて軽く触れる。 ○ 日常会話を行う意味を考えさせる。

## 第一時 指導案

### ○ 本時の目標

- ・ 日常会話について注目させる。
- ・ 会話場面における言葉の持つ性質について考えることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・ 本文を通読する。		
5	・ 感想を発表する	・ いろいろな意見を発表させるようにする。 ↓	・ 本節に意欲を持って望む姿勢が見られるか。
10	・ 本節を読んでいく上での姿勢を意識する。	・ 本節に書かれている理論を絶対的なものとして伝えないようにする(作者は～と言っていますね)。	
12	・ 本文が何に注目したものであるかを考える。	・ 「日常会話」に注目させる。さらに、「日常会話」には目的のあるものかないもの(雑談)があることを意識させる。「目的のある会話」「雑談」あるいはその両方のどれに注目した段落かを、段落に入る前にそのつど考えさせる。	・ 本節における「日常会話」の位置付けを理解できたか。
20	・ p.32-1.2「いったい何の目的で話しているのでしょうか。」に注目する。	・ 「何の目的で話しているか」に注目させ、本文に興味を持たせる。	
23	・ p.32-1.8「言葉の問題」について考える。		・ 「言葉の問題」について考えることができたか。
35	・ p.32-1.14「雑談に類する日常会話の本来の目的」に着目する。	・ 「何の目的で話しているか」の答えを確認する。	・ 雑談のもたらす効果について自分なりの考えが持てているか。
45		・ 次時は「会話を上手に進めるためのアドバイス」という言葉をキーワードに学習を進めることを告げる。	

## 第二時 指導案

### ○ 本時の目標

- ・「日常会話のコツ」という会話を行う上でのヒントを学習者に考えさせる。
- ・学習者の日常生活の会話を、本節に示された観点から振り返らせる。
- ・日常の会話を行う意味について考えさせる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前時を想起させる。</li> </ul>	
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ p.33-1.12「目的のある会話を上手に進めるためのアドバイス・1～7」を読み進めていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 補助プリント②を配る。以下の活動は補助プリントを使って進めていくようにする。</li> </ul>	
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1の内容を考える。</li> <li>・ 6の内容を考える。</li> <li>・ 聞き手・話し手について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ボール」を使った例えがどんなことを表しているかを、学習者を指名しながら答えさせる。</li> <li>・ 「洗練された正しい言葉」「誤解を与えるかもしれないと思われるような言葉」について考えさせる。また、p.32-1.7「何気ない言葉が人を傷つけたり、あるいは誤解を招いたりします」との類似性に着目させ、この1～7の内容が「雑談」にも通じるものであることを意識させる。</li> <li>・ なぜ話し手よりも聞き手を優先させているのかについて意見を出させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本文中にある言葉について積極的に考えることができるか。</li> <li>・ 話し手と聞き手という立場から自己の言語生活を振り返ることができるか。</li> </ul>
20		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークシートをもとに、1～7のような態度が相手に対してどのような効果をもたらすかを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 言葉・話し方という観点から自己の言語生活を振り返ることができるか。</li> </ul>
30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 最終段落「豊かな人間関係」「自分自身が成長していくこと」について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「日常会話のコツ」を身に付けることが「豊かな人間関係を築いていくこと」と「自分自身が成長していくこと」という結果につながる理由について考えさせ、本節のまとめとする。</li> </ul>	
40		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本節を通しての感想を書かせる。</li> </ul>	

## ★「会話にもコツがある!？」★

	会話のコツ	その態度が相手にどのような印象を与えるだろう?
1	話すことよりも、まず聞くことに注意を払い、よい聞き手になるように心がける。	自分のことを考えて、よく聞いてくれている。相談事をしたくなる。
2	話すときも聞くときも、にこやかな親しみのある態度をとり、誠意を持つ。	話しやすさを与えらると思うけど、あんまり嬉しくなくさい。
3	聞くときには必ず相づちを打ちながら終わりまで聞き、相手の話を中断しないようにする。	言いたいことを最後まで言わせてくれるのは優しいイメージにつながると思う。
4	話すべきときには積極的にはっきりと意見や事実を述べる。相手に気を配りながら発言や質問をして、相手の話をさらに引き出すように努める。	事実を述べることは大事だ。プロパガンダは人の信用を失わせらると思うから。信用できるイメージを与える。あんまりしつこく質問せらるのイヤ。けど、人ほららるとき質問せらるとうれい。
5	相手やその場にふさわしい話題を選び、言葉遣いに気を配る。	場や言葉に気がつけるのは難いから、それができている人を見ると、カリスマ性を感じるよね。
6	人の感情を害さないよう洗練された正しい言葉を使い、誤解を与えるかもしれないと思われるような言葉には、説明を加えるよう努力する。	これはほ、ギリ言てムリだと思ふ。だけど、説明を加えてる人を見ると、相手のことを気遣っている印象を受ける。
7	声の大きさや高低に気をつけ、表情豊かに話すようにする。	オーバーリアクション。てことだろうが? 必要以上でなかつたら親しみが持てらると思ふ。

※1の本文中における意味を考えてみよう。



『言葉のキャッチボール』

→ 会話。

『ボールを独り占めにして他人に渡さないこと』

→ 一人でしゃべりつづけること。

『ボールを受け取ろうとしないこと』

→ 相手の意見を聞かない。受け入れようとしな<sup>い</sup>。



※6はどんな話し方を示しているのか、「感情を害す」「誤解を与える」に注目して考えてみよう。

→ 言葉の問題を、ある程度意識して話す話し方。

## 《今後の課題》

私たちがこの『言葉のキャッチボール』の授業を考えるうえで、常に気をつけなければならないと留意していたことが大きく二点あった。それは「本節で述べられている説や会話のコツを、絶対的なものとして教えないこと」そして「会話における注意点のみを強調して、会話をするのが難しいことであると考えさせないこと」であった。

一つ目の留意点「本節で述べられている説や会話のコツを、絶対的なものとして教えないこと」は、本節の論調が、「～なりません」「～ものです」のように断定的な表現で書かれてあるところから生じたものである。また、本節で進められている会話のポイントが、「正しいもの」として教えられると、それこそ個性ある「楽しい会話」が否定される可能性が出てくるという懸念もあった。

以上のような理由から、本節をこのまま「正しい」ものとして学習者に読ませることは控え、指導目標に示したように、本節の内容は、言語生活を振り返るきっかけを作らせ、日常会話を行う上でのヒントを与える、というものにした。授業内容に関してもそのように配慮を行っている。しかし、実際に学習者に主体的に各個人の言語生活を振り返らせる授業にするには、やはり何らかの活動を体験させ、学ばせることも必要なのではないかとも考えた。そこで学習者たちに、本節にあるアドバイスをふまえて実際に二人一組、もしくは三人一組で会話をさせるという活動を盛り込むという案も出た。しかし、その活動を行うことで、学習者に本節の内容を「正しい」ものとして押し付ける形になるのではないか。そして、学習者にはもっと自然な形で活動を行わせなければ、言われたことをむりやりやらされる活動になってしまうのではないか。という二つの理由から、本節と具体的な活動を連結させることはやめたほうがよいという結論に達した。

二つ目の留意点「会話における注意点のみを強調して、会話をするのが難しいことであると考えさせないこと」は、本節が会話を行う上での注意点・アドバイスをうながす内容を含むものであることから生じたものである。そのような注意点・アドバイスに過敏になることのないように、授業では、本節の内容をある程度客観的な視点から読ませるように進めている。また、日常会話で「豊かな人間関係を築いていくこと」ができ、「自分自身が成長していくこと」につながるということで結論付けている。だが、本節で述べられている日常会話に関するアドバイスのなかに、自分を抑えてでも相手を立てるという姿勢が見られることは確かである。恐怖心とはいかないまでも、日常会話が面倒なものに感じられてしまう可能性はどうしても残る。

また、この日常会話は、学習者が日々行っているものなので、学習者は自分が日常会話を成立させているという自覚はあるだろう。そうした意識のなかで、日常会話に改めて注意を払うことの必然性を感じない学習者もいるだろう。そうすると、本節を読み解いていく前段階において日常会話に注意を向けさせることが大事になってくる。

もうひとつは、本節を学習する高校一年生にとって、授業のなかで考えさせる問題の難易度は適当か、という問題である。例えば私たちは本節中にある語句「言葉の問題」について理解させるように授業を展開しているが、そのような問題を意識できるか、また興味をもって考えられるか、などには疑問が残る。逆に、「目的のある会話を上手に進めるためのアドバイス」の項目を、ワークシートに取り上げることにたいして「言われなくてもわかっている」と反発する学習者が出てくることも予想される。これらのことを改善する授業方法を考案していくことが、今後の課題となってくるだろう。

## 第3章

### 表現の実践(1) —— 通信・案内・伝達 ——

第1節 手紙の心

第2節 手紙を書く

第3節 プレゼンテーションの必要性

第4節 紹介文・宣伝文を書く

第5節 二つの言葉が一緒になって

### 第3章 表現の実践(1) —通信・案内・伝達—

#### 第1節『手紙の心』 外山滋比古

日本語教育学科  
梅原誠 中崎ゆり

##### I 本節のねらい

近年、パソコンや携帯電話の普及で、Eメールなどの通信手段がますます身近なものとなっている。その一方で、手紙というのは着者を中心に利用されなくなってきている。そのため手紙の書き方を知らない、手紙の必要性を感じない者が多くなってきているように思われる。

しかし、長い人生の中で手紙を書かないでいるということはまずありえない。また、手紙というのは「書くこと」の中でもある意味特殊な分野なため、手紙の書き方、最低限のマナーなどを身につけておかなければ書けるものではない。そのため、手紙のことをよく知ることは非常に大切である。

本節は、手紙を書くには相手を思いやる心、すなわち「手紙の心」が必要なのだということを理解させることがねらいである。

##### II 学習者観

○対象：高校1年生（2学期）

現代は、高校生であっても携帯電話を持っていることは珍しいことではなくなっている。パソコンの普及にともなってEメールを利用する生徒も増えているだろう。しかし、そのため「手紙」にふれあう機会がますます減ってきていると思われる。手紙の必要性を感じていないということも十分考えられる。たしかにこれから手紙が廃れていく時代が来るかもしれない。だが、現代社会においてはまだまだ手紙が活用されている。社会に出て初めて手紙の書き方を知るよりは、高校生のうちに最低限の手紙のマナーだけでも理解させておくべきである。

本節では、筆者の手紙に関するさまざまなエピソードをもとに、手紙を書く際の心がまえを理解させたい。そのために、ただ本文を読むだけではなく、実際に手紙を書かせる活動を取り入れる。

##### III 本節の可能性

- ・ 基礎的な手紙のマナーを理解させることができる。
- ・ 手紙を書くときの相手への配慮の必要性を理解させることができる。
- ・ できるだけ相手のことを考えて手紙を書こうとする姿勢を身に付けさせることができる。

### 指導目標

- ・身近にある手紙の種類を知ること、その必要性を理解する。
- ・手紙を書く上で気をつけなければならない基礎的なマナーを身に付けることができる。
- ・手紙を書くときに必要な「相手を気遣う心」＝「手紙の心」について認識し、実践できる。

### 指導計画

	指導目標	学習内容	指導上の留意点
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近にある手紙の種類を認識し、その必要性を理解することができる。</li> <li>・「手紙の心」とはどのようなものかを知ることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近にある手紙の種類を挙げる。</li> <li>・教科書の内容を整理することで、手紙を書く際の注意事項を知る。</li> <li>・整理した内容を発表し、まとめながら「手紙の心」を考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幅広く手紙の種類を例示する。</li> <li>・ワークシートに沿って内容を整理させる。</li> <li>・ワークシートに整理した内容をもとにして考察させる。</li> </ul>
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙を書く際の基礎的なマナーを身に付ける。</li> <li>・「手紙の心」を実践に結びつけることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お世話になった目上の相手への年賀状の内容を考える。</li> <li>・年賀状を書く。</li> <li>・年賀状を書くときに注意した点をそれぞれ発表する。</li> <li>・年賀状を提出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導で、失礼な文面になってないかをチェックする。</li> <li>・机間指導をする際に、発表させる生徒を決めておく。</li> <li>・後日返却して、各自投函させる。</li> </ul>

### 第一時 指導案

#### ○本時の目標

- ・身近にある手紙の種類とその特徴、必要性を理解することができる。
- ・手紙を書く上での注意点を理解することができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・学習内容を明らかにする。	・ワークシートを配布する。	
3	・身近にある手紙の種類を挙げてみる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広い意味での手紙にどのようなものがあるか例示する。</li> <li>・生徒が持つ手紙に対するイメージを的確につかむ。</li> <li>・手紙の種類を適宜挙げ、その存在と必要性に気付かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幅広い種類の手紙が挙げられているか。</li> <li>・手紙の必要性を理解できているか。</li> </ul>
15	・教科書を項目ごとに読み、そこに書かれている内容を整理する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文のエピソードに現れている手紙の種類、特徴、注意点を整理させる。</li> <li>・整理したものをもとに、手紙を書く際の一般的な注意点をまとめさせる。</li> </ul>	・教科書に書かれている内容を的確に理解しているか。
40	・手紙を書く上での注意点を通して「手紙の心」について考えさせる。	・「手紙の心」とは何なのかをワークシートに記入させる。	・「手紙の心」を認識できているか。
48	・次時の活動内容を知る。	・次時までには年賀状を書く相手を考えてくるよう指示する。	

## 第二時 指導案

### ○本時の目標

- ・実際に年賀状を書いてみることで、手紙を書く際の基礎的なマナーを身に付けることができる。
- ・前時の学習と合わせ、「手紙の心」を実践できる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・前時の想起をする。	・「手紙の心」にどのようなものがあつたか例示する。	・前時を想起できているか。
5	・ワークシート②を使い、内容を考える。	・ワークシートの「マメ知識」を参考にさせる。  ・机間指導によって、相手にとって失礼にあたる文面があつたら指摘する。同時に、発表する生徒を予め決めておく。	・相手にとって失礼な文面になっていないか。
25	・年賀状を清書する。		・丁寧に書けているか。
38	・年賀状を書くときに注意した点をそれぞれ発表する。	・今後、別の年賀状を書くときの参考にもさせる。	
48	・年賀状を提出する。	・各自の年賀状を確認した後返却して、個人で投函させる。	・「手紙の心」に気がつかなかった文面になっているか。

#### 《今後の課題》

まず、実際に手紙を書かせる活動を取り入れるかどうかという問題がある。本節は導入として短く終わらせればよいのではないかと考えたが、簡単なものでもいいから実際に書かせたほうがより本節に対する理解が深まると思い、手紙を書かせる活動を行うことにした。

また、実際に手紙を書かせるとしたら、どのような手紙を誰に宛てて書かせるかも問題である。今回は高校生にとって最も身近な「手紙」の一つであり、書きやすいものであると考え、年賀状を書かせることにした。そして、相手への配慮が必要であり（友人だとあまり気を遣う必要がないので「手紙の心」が反映しづらい）、生徒に書く意欲を与える人物ということで、送る相手を「お世話になった目上の人」という設定にした。しかし、授業が年賀状を書く時期に行われぬこともある。その時は、例えば夏なら暑中見舞いのように、時期にあった手紙を書かせるのがよいだろう。

#### 《参考文献》

有田彦造『心をつたえる手紙の書き方—コツと文例—』有紀書房、2001年  
『日本語学』vol.19、明治書院、2000年

## 「手紙の心」って何だろう

(4)組(5)番 氏名(梅原 誠)

### 1. 手紙の種類を調べてみよう!

年賀状・暑中見舞い・寒中見舞い・快気祝い  
ラブレター・ダイレクトメール・お礼状・招待状

### 2. 教科書の内容を整理しよう!

	種類	特徴	注意点
例	暑中見舞い	夏の暑さをねぎらう挨拶状	・時期に気を付けて出す
1	同窓会の案内状の返事	出席か欠席かを伝える。	・返事の内容には責任を持つ。 ・出席をしない場合は出席。
2	礼状	感謝の気持ちを伝える。	・本来は封書にするもの。 ・電気で済ませない。
3	ダイレクトメール	企業や商店などが個人宛に郵送する。広告印刷物など。	・相手が目を止めるように特別な工夫をする。
4	正月の挨拶のはがき	・新年の挨拶をする。 ・自分の近況を報告する。	・明るく内容にする。
5	結婚報告書への招待状の返事	出席か欠席かを伝える。	・少しでも早く返事をする。

### 3. 手紙に関する注意点をまとめてみよう!

- ・内容には責任をもつ。
- ・相手にとって失礼にあたることは害かない。
- ・出すタイミングを考える。
- ・丁寧に書く。

★手紙の心とは、相手のことを気にかう心である。

ワークシート②

## お世話になった方に年賀状を書いてみよう！

( ) 姓 ( ) 番 氏名 ( )

1. 書きたい内容を考えよう！

### ☆マメ知識☆

- ・ 差出人住所氏名は裏面に書く。
- ・ 送り先が先生の場合、宛名の敬称は「～先生」。それ以外なら一般的に「～様」を使う。「～殿」は目下の人間か同輩相手に使う。
- ・ 「贈賀新年」などの賀詞は必ず入れる。
- ・ 色インクや鉛筆書きは失礼にあたることも。

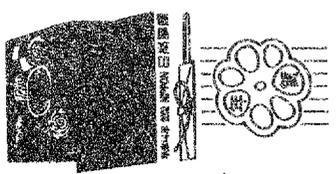
2. 下書きしてみよう!

郵便はがき

7398524

東広島市鏡山一丁目  
一番一号

広大本郎先生



【学生証はがき】  
1月15日～7月15日 くりし宛先部分を切り取って宛先住所へ貼ってください。  
郵便局で貼る場合は、郵便局の指定の場所へ貼ってください。

おけましておめでとうございませう  
 昨年中は本当に感謝を申しあげ、厚紙を  
 していただき、大変なご迷惑をおかけしました。  
 じつは今年も見逃して下さりおかげで  
 お慶び申し上げます。

〒739-0044

東広島市西条下見一丁目二番二号  
 一年二組 中崎 中子

### 第3章 表現の実践——通信・案内・伝達——

#### 第2節 手紙を書く

日本語教育学科

大久保 理恵 坂下 直子

##### 1、本節のねらい

今日、電子メールや電話による通信が盛んになってきている。そのため手紙や葉書を書く機会が減り、それらの魅力を知らない、もしくは忘れている人々が増えていると思われる。しかし、どんなに電子メールが便利で活用されているといっても、やはり手紙でしか伝わらない送り手の人柄や心情があるのではないだろうか。手紙を書くということは手間のかかる作業であり、相手のことを思いやらないとできないからである。

そこで、今回は前節の『手紙の心』をふまえて、生徒たちに手紙の良さ、手紙を書くこと・受け取ることの楽しさ、電話や電子メールではできない手紙だけの持つ有効性や可能性を経験し、知ってもらうことを本節のねらいとする。

この授業で手紙を書く目的として、「手紙でいかに、①相手を楽しませるか、②自分に興味を持たせるか、③送るには電子メールよりも手間のかかる手紙だが、謄み手が返事を書きたくないようにさせるか」という三点を挙げたいと思う。ただし手紙には決まりごと（形式）が存在する。形式は初めから存在していたのではなくて、理にかなっているから残っていったもの、つまり文化のひとつと考えられる。今回の授業で手紙の形式を学び、その形式の中で個性を発揮し、上の目的三点を達成できるように指導していきたい。

また、身近な人に手紙を書く場合、人間関係が成立しているため、返事がくる可能性は高いと考えられる。今回あえて見知らぬ人に手紙を書くことで、返事のくる可能性があるかどうか分からない状況を作る。そして、上記の目的を達成するように、生徒たちが各々工夫して手紙を書くという体験をさせたい。

このように、本節のねらいを実現させるために「見知らぬ人に手紙を書く」という授業を展開していこうと思う。

##### 2、学習者観（対象学年 高校一年生）

通信手段の発達で、高校生の多くが携帯電話を所有しており、さらに電子メールを盛んに活用していると思われる。これら携帯電話や電子メールでは、様々な人と容易にやりとりを交わすことができる。特に携帯電話のメール交換では、あまり文章を考えずに送信してしまう。そのため雑談風になり、手紙の延長というより電話音声の文字化となってしまう可能性もありえる。

情報化・通信手段の多様化の現代こそ、若者は相手のことを考えながら手紙を書き、自らの心情や人柄を伝え、相手とのつながりをより一層深いものにしていくことを体験する必要があるのではないだろうか。

### 3、本節の可能性

- 相手や目的にふさわしい手紙の書き方をすることができる。
- 相手を思いやりながら、手紙を書くことができる。
- 自らの心情や人柄を手紙で相手に伝えることができる。
- 「見知らぬ人に手紙を書く」という授業を展開することで、手紙を書く作業以外にも様々な作業の方法を身につけることができる。

### 指導目標

- ・「見知らぬ人に手紙を書く」ことで、いかに相手を楽しませるか、自分に興味を持たせるかを考え、相手や目的にふさわしい手紙の書き方を身につける。
- ・自らの心情や人柄を手紙で相手に伝えることができ、手紙を書く楽しさを知る。
- ・この活動を通して、手紙を書く作業以外にも様々な作業方法を身につけることができる。

### 指導計画

	指導目標	学習内容	指導上の留意点
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙の形式を理解させる。</li> <li>・「見知らぬ人に手紙を書く」という活動の理由と進め方の説明を行い理解させる。</li> <li>・誰に手紙を書くか考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙の形式を知る。</li> <li>・「見知らぬ人に手紙を書く」という理由と活動内容を理解する。</li> <li>・誰に手紙を書くか考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意味と使い方を教える。</li> <li>・具体例を提示する。</li> </ul>
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙を書かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形式をふまえた上で書かせる。</li> </ul>
第三時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の手紙の中から問題点を提示し話し合わせる。</li> <li>・話し合いの内容をふまえて、自分の手紙を見つめ直させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題点を話し合い、相手や目的にふさわしい手紙の書き方を知る。</li> <li>・自分の手紙と問題点を照らし合わせて、手紙を書き直す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・名前を出さずに生徒の手紙を提示する。</li> <li>・個別指導を行う。</li> </ul>
第四時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙を仕上げさせる。</li> <li>・返信がきた場合の対応について考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙を仕上げる。</li> <li>・返信がきた場合の対応について考える。(礼状の書き方)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終チェックを行う。</li> </ul>

第一時 指導案

○本時の目標

- ・「見知らぬ人に手紙を書く」という活動で、手紙を書くことに興味を持つことができる。
- ・教師が書いた手紙を分析し、返信がくるかどうかの根拠を示すことができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書を使って手紙の形式を学ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意味と使い方を例示しながら説明していく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手紙の形式を正しく理解しているか。</li> </ul>
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「見知らぬ人へ手紙を書く」理由と活動内容を理解する。</li> <li>・プリントを読んで進め方を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「見知らぬ人に手紙を書く」という活動の説明をする。</li> <li>・プリント（資料①）を配布して進め方の説明をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習目的を理解しているか。</li> </ul>
30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師が書いた手紙を示し、返信がくるか予想する。</li> <li>・グループでその根拠について話し合い、発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・返信が来るか予想させ、その根拠を考えさせる。</li> <li>・グループ内で意見を交換し、他の生徒の意見にも耳を傾けさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例示された手紙を分析し、返信がくるかどうかの根拠を示すことができるか。</li> </ul>
45	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次回までの課題を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次回までに相手を決めてくることを課題として出す。</li> <li>・実行可能な相手を選ぶように指導する。</li> <li>・手紙を書く相手が見つからない生徒に対して助言をする。</li> </ul>	

## 第二時 指導案

### ○本時の目標

- ・ 形式をふまえた上で、自分の個性を発揮できる。
- ・ いかに関手を楽しませるか、自分に興味を持たせるかを自主的に考えることができる。
- ・ 図書室で作業をすることにより、書くこと以外の作業方法を身につけることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今日の活動内容を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今日の活動内容を説明する。</li> </ul>	
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手紙を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手紙を書かせる。</li> <li>・ 個別指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 正しく形式を用いているか。</li> <li>・ 相手のことを考えて手紙を書くことができているか。</li> </ul>
45	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 必要な資料を探して、手紙に活用する。</li> <li>・ 手紙を提出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 図書室を利用して、必要な資料を探させる。</li> <li>・ できあがってなくても提出させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 図書室を適切に使用できているか。</li> </ul>

### 第三時 指導案

#### ○本時の目標

- ・生徒の手紙の中から問題点を提示し、話し合わせる。
- ・話し合いの内容をふまえて、自分の手紙を見つめなおさせる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に書いた自分たちの手紙の問題点を話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に回収していた生徒の手紙を返却する。</li> <li>・いくつかの手紙の中から名前をふせて問題点を抜粋し、何が悪いか、どう改善すればよいか考えさせる。(ワークシート)</li> <li>・相手や目的にふさわしい手紙の書き方があることを気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的に問題点の改善方法を考えているか。</li> </ul>
30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの内容をふまえて、自分の手紙を見つめなおす。</li> <li>・相手や目的にふさわしい書き方を考慮して手紙を書き直す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別指導を行う</li> <li>・相手や目的にふさわしい書き方ができているか確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合った内容をうまく生かして、手紙を書き直しているか。</li> <li>・相手や目的にふさわしい手紙の書き方ができているか。</li> </ul>

第四時 指導案

○本時の目標

- ・手紙を仕上げる。
- ・返信が来た場合の対応について考える。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・手紙を仕上げる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別指導を行う。(最終チェックも行う。)</li> <li>・前時の内容を思い出すように促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手や目的にふさわしい手紙の書き方ができているか。</li> </ul>
30	・返信がきた場合の対応について考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「返信がきた場合どうするべきか」と問いかける。</li> <li>・礼状(資料②)を例として示す。</li> <li>・礼状のほかに個別にとるべき対応について考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・返信がきた場合の対応について、積極的に考えているか。</li> <li>・自分の手紙や相手からの返信の内容をふまえて、どう対応するか考えているか。</li> </ul>
45	・今回の活動を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手や目的にふさわしい手紙の書き方をすることで、いかに読み手を楽しませ、自分に興味を持たせることが出来るかということを確認する。</li> <li>・手紙の中で相手を思いやる気持ち、自分の心情や人柄を表現できることに気づかせる。</li> <li>・手紙を書く楽しさに気づかせる。</li> </ul>	

#### 《今後の課題》

今回の「見知らぬ人に手紙を書く」活動は、普段手紙を書かない生徒が興味を持って参加できるように設定したものである。生徒自身が相手を探し、相手のことを考えながら書くということで、手紙本来の「自分の心情・人格を伝える」ことを自然に引き出すことができるだろう。今回あえて、教師が設定した状況をふまえて手紙を書くという活動にしなかったのは、このような理由からである。

しかしこの活動を進めていく上でいくつか考慮すべき点が出てきた。それを以下に挙げる。

- ・自分の手紙を第三者（ここでは教師）にチェックされるというのは、精神的に好ましくないのではないのか。授業で取り扱っているため、または、手紙を書く指導を受けているため、仕方ないのかもしれないが…。
- ・資料の探し方や住所の調べ方の方法をもっと丁寧にすべきか。
- ・生徒によっては、書き直し作業が長時間かかる子もいるだろう。授業外で持ち帰って作業をしないといけなくなるのではないか。
- ・見知らぬ知人に手紙を送るということに対して、抵抗を感じる生徒にどう対処すべきか。

この活動をさらに良いものにするために、今後これらに対してどう対応すべきか考えていく必要がある。

今後、生徒たちが生活していく中で、手紙を書く必要性が起こりうるだろう。その際、今回の活動がいくらか助けになることを願う。

資料①

見知らぬ人へ手紙を書くって？

「見知らぬ人へ手紙を書く」とはどういうことなのか、みんなの疑問点を応答形式で答えていきたいと思います。

Q 1 見知らぬ人へ手紙を書くとは？

A 手紙の有効性や可能性を知るための活動です。

Q 2 見知らぬ人って？

A 今まで一度も会ったことのない人です。

(例) 友達、友達、先輩、後輩、文通欄、美術類、博物館、大学、専門学校、図書館、会社など

Q 3 住所は？

A 自分で調べましょう。

Q 4 何を書けばいいの？

A 何を書いてもかまいません。ただし、相手に対して失礼、横着なもの、つまり相手が受け取って不愉快になるような内容は、敬しく禁じます。特に施設などに問い合わせたい場合は、何を問い合わせるのが明確にする必要があるでしょう。

Q 5 相手に失礼がどうか分からないときは？

A 内容については、チェックをします。具体的には書き直しをします。

Q 6 本当に投函するの？

A 勿論投函します。そのためには、封筒、便箋が必要ですね。相手が決まったら、是非自分で封筒、便箋選びをしましょう。切手は先生が用意します。

Q 7 いつ投函するの？

A ○月○日の授業までに手紙を仕上げます。その日の授業のチェックで合格したら、各自で投函してください。

まだ内容がよく分からないという人がほとんどだと思います。授業で私が例を示して見せるので、参考にしてみてください。

ワークシート

# 「見知らぬ人の手紙」をよんでみよう

前の時間に自由に手紙を書いてももらいました。その中からいくつか選んで、この内容でいいか、この書き方でよいかなどを話し合ってもらおうと思います。ではひとつずつ見ていきましょう。

《メモ》

《例その一》

拝啓

初めまして。私は〇さんの友人のA・Kです。いきなり手紙を書いてすみません。高校の授業で「見知らぬ人に手紙を書く」というのをやっていたので、Tさんを勝手に選んでしまいました。本当にごめんなさい。

私は〇〇高校の一年生です。学校ではバスケットボール部に入っています。毎日練習がきついです。趣味は友達と買い物に行くことです。特技はありません。この前「藤と千の紙隠し」を見ました。とてもおもしろかったです。もう見ましたか？

Tさんはどんな人ですか？手紙に書いて教えてください。

是非返事をください。では、さようなら。

敬具

〇月〇日

A・K

K・〇様

《例その二》

R・〇様

拝啓

初めまして。僕は〇〇高校一年のT・Sです。今回お手紙したのは、高校の授業で「見知らぬ人に手紙を書く」というのをやっていたので、R・〇さんを紹介してもらいました。突然でどうもすみません。

私はR・〇さんを見たところがありますが、話したことはありませんでした。これを機会に友達になつてください。

ではお返事待っています。

敬具

〇月〇日

T・S

資料②

返信信が来た！～お礼の手紙を書こう！～

あなたのもとへ返信が来ました！是非お礼の手紙を書いてみましょう。

T. O 様  
寒さも厳しくなりましたが、いかがお過ごしでしょうか。  
先日の突然の手紙に驚かれたことと思いますが、  
「丁寧にお返事をくださり、まことにありがとうございます」  
と、心から感謝の言葉を、熱心を持って  
くださるT. O さんのお話を、楽しく聞かせて  
いただきました。  
(中略)  
まだまだ寒さは続きますが、お体には十分気を  
付けてお過ごしください。ご家族の皆様によろしくお  
伝えください。それでは、この辺で失礼致します。  
平賀 O 君 O 氏 O 君  
N. S

このお礼の手紙はほんの一例です。返信してくれた相手に対して、素直に感謝する気持ちが  
を示してみましょう。

またお礼の手紙は、返信が来たらできるだけ早く出すのがいいですね。

## 第3章 表現の実践～通信・案内・伝達～

### 第3節 プレゼンテーションの必要性

心理学科

縄田 悠紀 脇坂 知子

#### I 本節のねらい

今日、聞き手が話を理解しているかどうかということを考えず、一方向的に“話しっぱなし”の人が多。しかし、伝達とは本来、双方向的なコミュニケーションである。現代社会においても、自分の考えを主張し、相手を説得できる人材が求められている。そこで本節では、自分の伝えたいことを相手に正確に伝え、理解させる、プレゼンテーション技能の修得をねらいとする。

#### II 学習者観

対象・高校1年生

「話す」という行為は、学習者も日々行っていることである。しかし、「聞き手の理解」に配慮した話し方ができているだろうか。相手に自分の伝えたいことを正確に伝え、理解させるためには、伝えたいことの吟味や整理にとどまらず、伝え方についても考える必要がある。

そこで本節では、学習者に、実際にプレゼンテーションをさせることで、相手を説得する伝達方法の必要性・重要性を実感させたい。

#### III 本節の可能性

- ・プレゼンテーション技能を身につけることができる。
- ・プレゼンテーションという伝達手段を用いることで、自分の伝えたいことを話すだけにとどまらず、相手に理解させる表現ができる。
- ・視覚資料を作成し、効果的に用いることができる。

## 指導目標

効果的なプレゼンテーションについて考え、プレゼンテーションを実際に行うことを通して、プレゼンテーションの必要性や重要性に気づくことができる。

## 指導計画

次	時	指導目標	学習内容	指導上の留意点
1	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼンテーションの必要性に気付くことができる。</li> <li>・プレゼンテーションの特徴について気付くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼンテーションにはどんなものがあるかを考える。</li> <li>・プレゼンテーションの特徴を考える。</li> <li>・実際にプレゼンテーションを行うにあたっての評価ポイントを考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・VTRを見ながら、プレゼンテーションの特徴をノートに書かせる。</li> <li>・プレゼンテーションを実際に行うことを告げ、テーマを発表する。</li> </ul>
2	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼンテーションを実施する際の基本的な流れを理解することができる。</li> <li>・自由な発想で、プレゼンテーションの内容を作成することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班ごとに、プレゼンテーションの内容を考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容が、プレゼンテーションできる程度に具体化したものとなるよう指導する。</li> </ul>
	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標（目的）・聴衆を確認する。</li> <li>・メインポイント（主張したいこと）を決定することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標（目的）の確認をする。</li> <li>・聴衆に対する意識を持つ。</li> <li>・ブレインストーミングを行い、メインポイントを決定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブレインストーミングの方法を指導する。</li> <li>・ブレインストーミング用にポストイットを用意する。</li> <li>・メインポイントを補足する説得ポイント＝サブポイント（事例、根拠、データ）を次の時間までに集めるように指示する。</li> </ul>
	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サブポイントを決定することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各班ごとにメインポイントを確認する。</li> </ul>	

	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼンテーションの構成を考えることができる。</li> <li>・視覚資料を作成することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブレインストーミングを行い、サブポイントを決定する。</li> <li>・プレゼンテーションの基本的な構成を学習する。</li> <li>・各班ごとに、詳細な構成原稿を作る。</li> <li>・必要な視覚資料を作成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館、パソコン等を使えるよう準備しておく。</li> <li>・ツールの使い方は適時指導する。</li> </ul>
3	6 ・ 7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際にプレゼンテーションを行うことができる。</li> <li>・他班の発表に対して、客観的な評価ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班ごとにプレゼンテーションを行うことができる。</li> <li>・他班の発表への評価を評価シートに書き込む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制限時間を守らせる。</li> <li>・各班のプレゼンテーションをビデオに撮る。</li> </ul>
4	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時のプレゼンテーションを振り返ることで、より高度な伝達記述を身につけることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちのプレゼンテーションと比較しながら、ビデオを見る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価シートを各班に返却する。</li> </ul>

指導案

第一次 第一時

○本時の目標

- ・プレゼンテーションの必要性を考える。
- ・プレゼンテーションの特徴に気づき、評価するポイントを考えることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・プレゼンテーションについて考える。	・プレゼンテーションという言葉から想像するものを発表させる。 ・プレゼンテーションを実際に行うこととそのテーマを明らかにする。	
10	・VTRを見ながら、プレゼンテーションの特徴をノートに書く。	・学習者の興味・関心に即したVTRを提示する。	・特徴を捉えようとしているか。
25	・気づいた特徴を発表する。	・挙げられた特徴を内容・伝え方・人柄(態度)に分けて板書し、プレゼンテーションの3要素を説明する(メラビアンの法則)。	・積極的に発表しているか。
35	・挙げられた特徴から、自分たちのプレゼンテーションにおける評価ポイントを決定する。	・基本的に、生徒に決めさせる。教師は補足する程度にとどめておく。	

指導案

第二次 第二時

○本時の目標

- ・プレゼンテーションの流れを理解することができる。
- ・自由な発想で、プレゼンテーションの内容を考えることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・プレゼンテーションの基本的な流れを理解する。	・視覚資料を用いて説明する。 ・実際のプレゼンテーションでも、視覚資料の使用を義務づける。	・プレゼンテーションの流れを理解しているか。
10	・プレゼンテーションの内容を考える。班ごとに何がしたいかを考え、決まった班から黒板に書く。  ・出てきた案をより具体的なものにする。	・班に分ける。 ・班ごとにプレゼンテーションの内容を決めさせる。  ・プレゼンテーションできるように、ワークシートの使用・机間指導で、内容を具体化させる。	・班ごとに協力して作業を行っているか。

内容を考える時間は適宜、調節して下さい

指導案

第二次 第三時

○本時の目標

- ・プレゼンテーションの目標を確認する。
- ・メインポイントを決定できる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・プレゼンテーションの目標(目的)の確認をする。		
5	・聴衆分析の知識を学習する。	・聞き手が誰であるか(高校生)を考えさせる。	
15	・メインポイント(主張したいこと)について、ブレンストーミングをする。	・ブレンストーミングについて説明する。 ・ポストイットを配布する。	・活発に意見が出ているか。 ・班ごとに協力して作業を行っているか
30	・主張したい順番に、メインポイントを並び替える。	・机間指導を行い、適切な援助を行う。(自主性を重んじる)	
45	・メインポイントを決定する。	・メインポイントを補足する説得ポイント=サブポイント(事例、根拠、データ)を次の時間までに集めるように指示する。	・メインポイントを決定できたか。

指導案

第二次 第四、五時

○本時の目標

- ・サブポイントを決定することができる。
- ・プレゼンテーションの構成を考慮することができる。
- ・視覚資料を作成することができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・班ごとにメインポイントを確認する。		・班ごとに協力して作業を行っているか。
3	・ブ레인・ストーミングを行い、サブポイントを決定する。	・ブ레인・ストーミングについて確認し、班ごとに行わせる。	・サブポイントを決定できたか。
8	・基本的な構成を学習する。	・視覚資料を用いて、基本的な構成を図示する。	・基本的な構成を理解できたか。
18	・班ごとに細かく構成を考え、原稿を作る。	・基本的な構成を基にして、自分たちの構成(視覚資料を提示するタイミングも含む)を作成するよう指示する。	・どのような構成にするか、考えることができたか。
	・必要な視覚資料を作成する。	・図書館、パソコン等を手配しておく。ツールの使い方は、適宜指導する。	・効果的な視覚資料を作成できたか。

指導案

第三次 第六、七時

○本時の目標

- ・ 実際に、プレゼンテーションを行うことができる。
- ・ 他班の発表を、客観的に評価できる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0		・ 評価シートを配る。	
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 班ごとにプレゼンテーションを行う(一班10分程度)</li> <li>・ 他班の発表を評価する(聞きながら評価)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プレゼンテーションをビデオに録画する。</li> <li>・ 制限時間を守らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 迅速に準備を行うことができたか。</li> <li>・ これまでの学習を生かして、発表を行えているか。</li> <li>・ 客観的に評価できているか。</li> </ul>
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前の班は片づけ、次の班は準備する。その間、他の人は評価シートを完成させる。</li> </ul>		
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 次の班が発表する。</li> </ul>		
48	以上を繰り返す	・ 評価シートを回収する。	

指導案

第四次 第八時

○本時の目標

- ・ 前時のプレゼンテーションを振り返ることで、より高度な説得技能を身につけることができる。
- ・ 自分たちのプレゼンテーションを見つめ直し、客観的に評価できる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0		・ 評価シートを各班に返却する。	
3	・ 前時のプレゼンテーションを振り返り、自分たちのものと他班のものを比較する中で、よりよいプレゼンテーション技能を学習する。	・ 評価シートを基に、各班の優れている点をまとめておき、録画したビデオとともに紹介する。 ・ 自分たちのプレゼンテーションと比較しながら、ビデオを見るように指示する。	・ 良い点、改善点について、客観的に比較できたか。
30	・ 気づき・感想（良い点、改善点を含む）を発表する。	・ 単におもしろい・おもしろくないと言った感想にとどめず、今後の学習や日常生活につながるような姿勢を養う。	・ 今後に生かそうとする姿勢が見られるか。
45		・ プレゼンテーション技能の応用について述べる。	

## 今後の課題

今回、私達は、プレゼンテーションの必要性和プレゼンテーション技能の学習に重点を置いた。そこで、生徒が準備段階からプレゼンテーションを体験する段階までの授業を、全八時で設定した。今回の授業は、プレゼンテーションの流れをつかむことを最重要課題とし、ポイントの絞り方・プレゼンテーションの構成の仕方に時間をかけた。これが最も基本的なことだと考えたからである。故に、十分な授業時間数をとらなかった部分がある。しかし、プレゼンテーションの流れを学習したことによって、それを補う以下の発展課題が考えられる。

### 1. プレゼンテーションの授業自体について

第一に、よりプレゼンテーションの内容や視覚資料に時間をかけ、プレゼンテーションの質を高める。第二に、プレゼンテーションに時間をかけて、質疑応答の時間をとる。第三に、個人でプレゼンテーションを行う。以上の三点が考えられる。特に第三の点は、これからの時代必ず求められるプレゼンテーション技能の習熟の為に、必須であると考えられる。

### 2. プレゼンテーションを他の授業に応用することについて

情報処理の授業で演習としてプレゼンテーションを使う。調査・研究の発表にプレゼンテーションを使う。

### 3. プレゼンテーションを日常生活に応用することについて

高校卒業後の進路が就職・進学に関わらず、プレゼンテーションの技能は必要となる。しかし、基本的なことに重点を置いたので、今回の授業だけで、社会から要求されたレベルに達することは難しい。授業後も、生徒にプレゼンテーションの機会を与え、熟練させることが必要だと考える。

## 参考文献

海保博之 説明と説得のためのプレゼンテーション～文章表現、図解、話術、議論のすべて～ 共立出版 1995

山口弘明 プレゼンテーションの進め方 日本経済新聞社 1986

日経 VIDEO 成功するプレゼンテーション[ビジネスに成功する新戦術] ①分かりやすい内容を作る

日本経済新聞社

日経 VIDEO 成功するプレゼンテーション[ビジネスに成功する新戦術] ②自分を上手に表現する  
日本経済新聞社

## 文化祭の企画（班）

### 企画のタイトル

一キュウ入魂

### 企画の内容

- ・リサイクル品を使って、文字を描く。
- ・望む未来を表す文字を、クラスで考え、決定する。
- ・よく見えるところに掲げる（壁からつるすとか？）
- ・なぜ、その文字に決定したかを紹介する。
- ・使った材料はリサイクルする。

ここがただの「展示作品」ではない！

- ・リサイクル品を使う。
- ・未来に向け、メッセージを発信する。

メインポイントのブレインストーミング例 (実際はポストイットです。)

クラス一丸となって、取り組める。

協力することでクラスの仲が、さらに良くなる。

メッセージ性が強い。

より良い社会 (未来) について、考えることができる。

リサイクル (ゴミ問題) について考えられる、訴えられる。

家族・地域社会と関わりがもてる。

みんなで一つの作品を作り上げる喜びや達成感が得られる。

ゴミが減る。

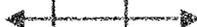


思い出に残る。

ゴミ拾いをしたら、町がきれいになる

出来上がったとき、感動する。

人々を感動させることができる。



## ( ) 班の評価

各班のプレゼンテーションを見て、項目ごとに5段階で評価します。1(良くない)ー2(あまり良くない)ー3(ふつう)ー4(わりと良い)ー5(良い)の中から、当てはまるところに○を書いてください。

	1	2	3	4	5
・ 声の大きさ					
・ 声の高さ					
・ 話の速さ					
・ アイコンタクト					
・ メインポイントの適切性 (テーマを支持する内容であったか)					
・ プレゼンテーションの流れ					
・ 視覚資料 (工夫が見られるか 適切なときに使えているか)					
・ 主張したいことが伝わってきたか					

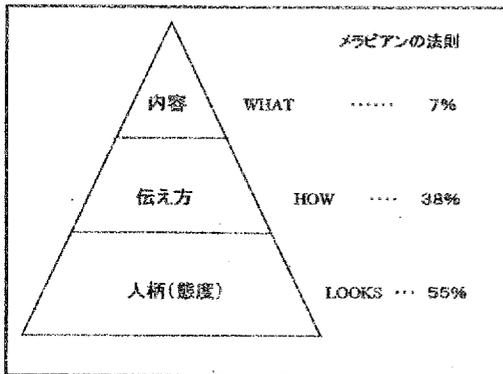
他に気づいた点を自由に書いてください。

## プレゼンテーションの必要性

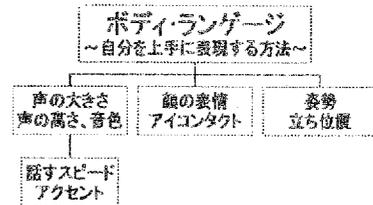
縄田 悠紀  
 藤坂 知子

## プレゼンテーションの定義

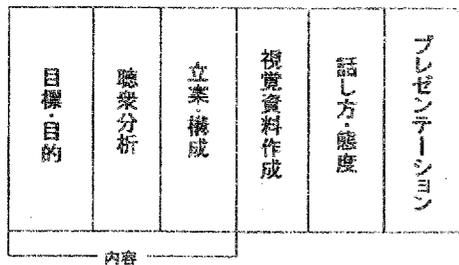
- 相手に対し意思を正しく伝え、認識させ、説得し、信頼感までも抱かせること。
- 経験や度胸よりも技術が必要である。



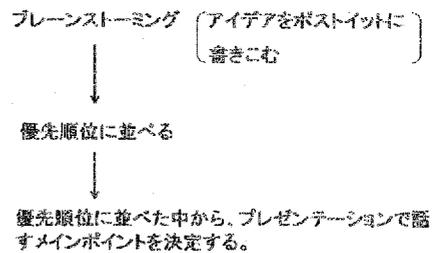
## 話し方・態度



## プレゼンテーションの流れ



## メインポイント決定の手順



## ブレインストーミング

課題について、思いのままに意見を出し合う。このとき、決められたルールを守る必要がある。

### オズボーンの4原則

- ・自由奔放に意見を出す。
- ・質より量を大切に。
- ・批判や評価はしない。
- ・他人のアイデアにどんどん結びつける。



## 内容の構成

導入 → 本論 → 結論  
(全体) (詳細) (全体)

## ① 導入

「本日、お話することは〇つあります。  
1つ目は、……。(メインポイントA)  
2つ目は、……。(メインポイントB)  
3つ目は、……。(メインポイントC)  
以上の〇つです。」

## ② 本論

サブポイントを加えて、メインポイントごとに詳しく述べる。  
「これから、1つ目の問題に入ります。……。  
2つ目の問題に入ります。……。」

## ③ 結論

メインポイントを、再度述べる。  
大切なことは、何度も繰り返す！！

## 視覚資料作成

### 視覚化の三大原則

- 1. 見やすい
- 2. わかりやすい
- 3. カラー化

## ツールの種類

1. 古典的ツール  
黒板、複写紙
2. AV機器  
スライド、映画、OHP、VTR
3. 電子機器



### 第3章 表現の実践(1) —通信・案内・伝達—

#### 第4節「紹介文・宣伝文を書く」

教科教育学科国語教育学専修

川津崇志 菅原光貴

#### 〔Ⅰ〕 本節のねらい

私たちの生活には、ありとあらゆる紹介文・宣伝文があふれている。代表としては企業による広告やポスターといったものであるが、これには商品売り出すためのセールスポイント(長所)が、様々な表現の工夫を凝らして効果的に書かれている。そして宣伝文が売りに上げに影響していることは言うまでもない。このように現代社会では紹介・宣伝の仕方によって、人・物の印象が大きく左右されるのである。

紹介文・宣伝文の書き方は、これまで学校現場ではあまり指導されてこなかった。しかし就職や入試の面接などを考えると、学習者にとって必要なのは、自分をアピールする、つまり自己表現力を養うことである。

個人的・社会的コミュニケーションにおいて紹介・宣伝を効果的に行うことは重要である。そこで本節の授業では、自己表現力を養う前段階として、文化祭におけるクラスの催しについての宣伝文を作ることを通して、宣伝文を書くときの留意点や工夫などの基礎を学ぶことをねらいとする。将来的には自己をしっかりとアピールし、長所的に表現できるようになることを目標とする。

#### 〔Ⅱ〕 学習者観 (対象 高校1年生 二学期)

高校一年生の学習者が、日常生活において何かの宣伝・紹介を行う機会はほとんどない。クラス替え等で自己紹介は行うものの、それは名前、部活、趣味を述べる程度のものであり、特別に長所を取り上げることはない。それ以前に、自分にはどのような長所があるのか分からない学習者が大半なのではないだろうか。そのような学習者が自らの長所を発見するためには、様々な角度から物事を見る姿勢を養う必要があると考えられる。そして、多角的な視点を持つということは、学校生活においては生徒会役員選挙やディベートの授業、将来的には大学入試や就職試験の面接など、多方面で役立つのである。

本節では文化祭のクラス催し物の宣伝文を作るという活動を行う。まずは個人でセールスポイント(長所)を考え、最後に他の人の作品を見ることで視野を広げることに繋げたい。

#### 〔Ⅲ〕 本節の可能性

- ・様々な物の見方を養うことができる。
- ・物事の長所を捉えようとする姿勢を身に付けることができる。
- ・他者を意識した、魅力ある文章を書く能力を養うことができる。

○指導目標

- ・様々な角度から物事を見て、それらの長所を見つけることができる。
- ・宣伝文の特質を理解し、事実にも忠実であり、かつ効果的な文章が書ける。
- ・宣伝文の必要性とその実用性を知り、実生活に役立てることができる。

時間	指導目標	学習内容	指導上の留意点
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 宣伝文を書くときの留意点を理解する。</li> <li>・ 多角的な視点から、そのものの長所を発見する。</li> <li>・ 事実にも忠実で、かつ魅力的な文章を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークシートを用いて、本文を読解する。</li> <li>・ クラスの催し物のセールスポイントとなる所をいくつかピックアップする。</li> <li>・ 宣伝文の下書きをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 書くときの基本的な決まりは、もれの無いようにしておく。</li> <li>・ 机間指導をしながら、できるだけ多くの長所を見付けさせる。</li> <li>・ ワークシートで確認した教材内の留意点を想起させる。</li> </ul>
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他者の目を引くような、個性ある作品を作る。</li> <li>・ 読み手を意識して文章を書く態度を養う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 見出しのキャッチコピーを考える。</li> <li>・ 清書用紙（A4の白紙）を配布する。</li> <li>・ 完成した作品を冊子にして配布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 宣伝文にキャッチコピーを添える理由を伝える。</li> <li>・ 他者に読ませるものだという意識させる。</li> </ul>

第一時 指導案

○本時の目標

- ・ 宣伝文を書くときの注意点を理解することができる。
- ・ 物事を多角的な視点から捉え、その長所を発見することができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0		・ 文化祭のクラス催し物についての宣伝ポスターを作ることを伝える。	
1	・ ワークシートを用いながら本文を読解する。	・ ワークシートを配布する。 ・ 宣伝文を書くときに注意しなければならない点を簡条書きにさせる。	・ 注意点を過不足なく書けているか。
20	・ クラスの催し物のセールスポイントをピックアップする。	・ ワークシートに記入させる。 ・ できるだけ多く挙げるように伝える。 ・ 机間指導を行い、行き詰まっている生徒には適宜アドバイスを行う。	・ 学習活動に積極的に取り組んでいるか。 ・ 多くのセールスポイントを発見できているか。
35	・ 宣伝文の下書きを書く。	・ 教材文から読み取った注意点を意識させる。	・ 注意点が守られているか ・ 自分が見つけたセールスポイントを文章内にきちんと盛り込んでいるか。

## 第二時 指導案

### ○本時の目標

- ・視覚的に効果のある、他者を意識した宣伝文を作成できる。
- ・宣伝文を書いてみることで、その特性・決まりを実感できる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・前時の想起、確認をする。		
1	・宣伝文の下書きを書く。 (前時の続き)	・机間指導をしながら、作業の進んでいない生徒を支援する	
16	・キャッチコピーの必要性を理解する。	・生徒が理解し易いように、簡単な例を1つ以上示す。	・キャッチコピー(見出し)と内容の関係について理解できたか。
19	・見出しとなるキャッチコピーを考える。	・あまり長い文章にならないように注意を促す。	・宣伝文の内容に適している、且つ、効果的なキャッチコピーとなっているか。
29	・宣伝文を清書する。	・清書用紙(A4白紙)を配布する。 ・レイアウトやイラストは生徒に任せる。	・作品の形式などに工夫がなされているか。
50	・完成した作品を提出する。	・完成した作品は冊子にして配布する。	

## <今後の課題>

今回の授業では、内容が学習者の今後の実生活に役立ち、かつ学習活動で生み出された物が実用的な物であるようにするという事に留意した。そのため文化祭のパンフレットの的なものを作ろうと考えたわけだが、授業を進めていく上でいくつか考慮しなければならない点がある。

まずは題材の選び方である。今回のように文化祭や体育祭を題材にすると、ある程度時期が限定されてしまうことである。この点は、例えばお菓子や電化製品のカタログなどを作るということである程度、問題解決できる。本や映画のパンフレットを作るというのもおもしろいだろう。

次に宣伝文を書く作業を、個人にするか班にするかということである。今回は一人一人に書くという作業が必要であること、また一人一人にそれぞれの達成感があるということを考え、個人作業にした。しかし個人作業ではどうしても学習者個人の差が明確になってしまうということ、また班内の話し合いによってさらに考えやアイデアが深まるという点も無視できない。

さらには評価の仕方をどうするかという問題もある。クラス全員が同じ題材に取り扱うため、冊子にしても実用的なパンフレットにはなりえない。評価がクラス内に留まってしまうのである。

この問題の解決案として、クラスで選考会を行い、各クラス一つずつ宣伝文を持ち寄って、学年としての文化祭パンフレットを作成するということが挙げられる。この方法であれば他学年はもちろん、地域の人々にも見てもらえる上に、催し物が飲食店ならば売り上げを、演劇などの出し物ならアンケートなどを比較することで、客観的に自分たちの作った宣伝の効果というものを実感、評価できるのではないだろうか。

今回取り扱った紹介文・宣伝文というものは、まだいくつもの可能性を秘めている。今回は文化祭の催しをテーマにしたことで、紹介文ではなく宣伝文作りに終始したが、紹介文を扱った授業というものも今後検討されるべきであろう。将来的な目標である自己表現力の向上までの、さらなる工夫が今後の課題である。

## <参考文献>

- |                       |      |         |       |     |
|-----------------------|------|---------|-------|-----|
| 『PL法と取扱説明書・カタログ・広告表現』 | 梁瀬和男 | 産能大学出版部 | 1994年 | 12月 |
| 『PL法時代の「広告・表現」戦略』     | 山田理英 | 産能大学出版部 | 1995年 | 5月  |
| 『朝日新聞濃縮版 平成13年10月号』   |      | 朝日新聞社   | 2001年 | 10月 |

◎ワークシート

「紹介文・宣伝文を書く」 補助プリント

1年5組 氏名 菅原光貴

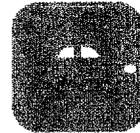
☆紹介文・宣伝文で注意しなければいけないことは何だろうか？  
教科書の中から探してみよう！！



- 事実と違うこと、誇大表現をしないこと。
- セールスポイントを作ること。
- 文体を柔らかくして、相手に呼びかけるような表現にすること。
- 情報が正確に伝わるようにすること。
- 読み手を意識すること。(知らない人にも分かるように)
- 箇条書き、文字サイズ、絵、写真など工夫をすること。

☆セールスポイントを挙げてみよう！！

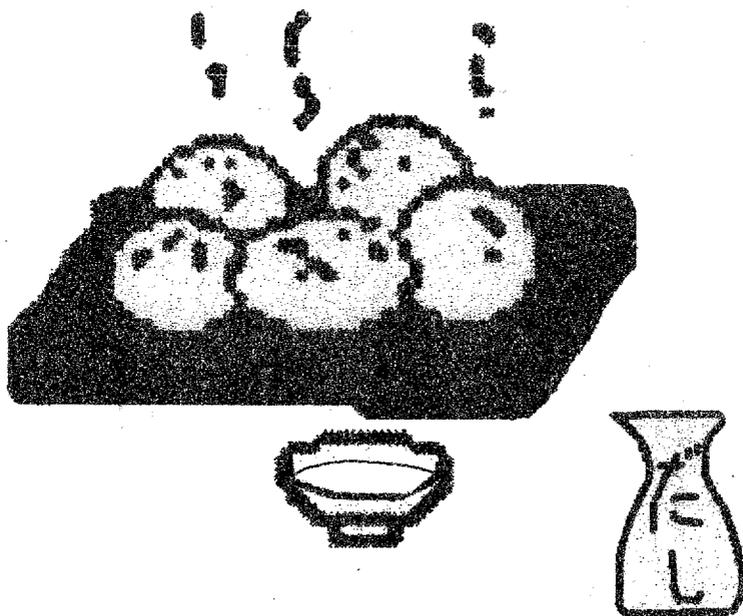
催し物 < 明石焼き屋 >



- あっさり味でおいしい。
- たくさん食べられる。
- 安い。
- とろとろで口の中が溶けるよう。
- あっあつ。
- 丸、こくまがおいしい。

# 明石焼き

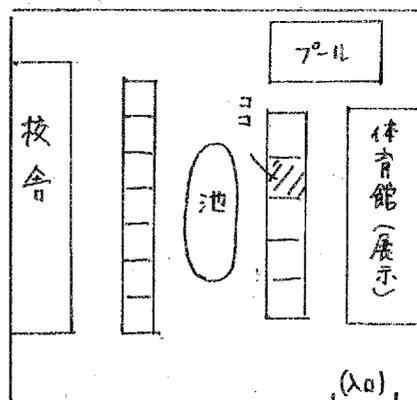
たこやきよりもあっさりで  
 口の中でフワッととろける  
 柔らかかな玉子にくるまれた  
 プリッツとした歯ごたえのタコ  
 特製のつけだしにひたせば  
 宇宙のかなたにトラヴェリング  
 アツアツ・トロトロのこの感触は  
 疲れた体といやしてくれる  
 ザ・ベスト・オヴ・ヒーリング  
 その名は



[日時] 平成00年XX月△△日(金)

[場所] □□高校内 (右図)

[価格] 200円 (一人前10ヶ入)



◎ なお、明石焼き本来の美味しさを味わって  
 いただくため、お持ち帰りをご遠慮願います。

# 幸せ、あります。

(明石焼き) × (ソース) = (たこ焼き)

上の式は間違っています。

(たこ焼き) - (ソース) = (明石焼き)

もちろん、これも間違いです。

明石焼きとたこ焼きは全くの別物なのです。

では、どこが違うのでしょうか。ちよと分析してみましょう。

まずは、味。明石焼きはたこ焼きのようにソースをかけて食べるものではありません。和風のおだしにつけて食べるものなのです。だしは昆布ベースのあさり味なので、いくらでも食べられちゃうんです。3人で100個をたிரらげた人達もいるとか...

次に、食感。明石焼きはほわほわのとろとろ。その中にはぷりぷりのたこが入っています。とろけるような口溶けと新鮮ぷりぷりのたこの存在感。食べる者の心を掴んで放しません。

あつあつ、ほわほわの明石焼きをあさり味のおだしにつけて口に放りにむ...。これ以上の幸せはありません。

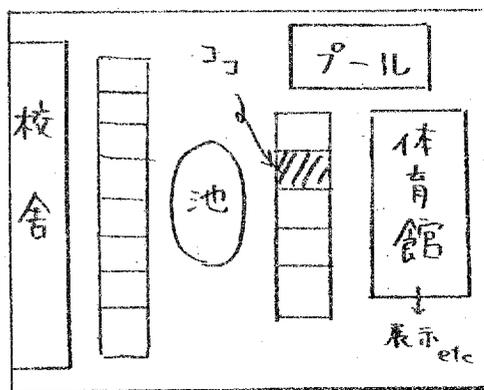
そんな幸せが欲しいあなた！当店の是非、お越し下さい。

日時：平成〇〇年XX月△△日

場所：□□高校内(右図参照)

価格：200円(1人前10ヶ)

◎なお、明石焼き本来の美味しさを味わって頂くため、お持ち帰りはお遠慮願います。



### 第3章 表現の実践(1) ——通信・案内・伝達——

#### 第5節 『二つの言葉が一緒になって』 池上彰

教科教育学科国語教育学専修  
福家香織 山口理恵

##### I 本節のねらい

第三章は、表現の実践を目的としている。しかし、学習者が実践する際に、言葉の意味を正確に分かって使っているとは言い切ることができない。そこで、本節は、学習者自身が普段使っている言葉の意味をしっかりと理解したうえで、その言葉を使う姿勢を身に付けさせることをねらいとする。今回私たちは、言葉の意味を理解できていないために起こる、おかしい言い方の例をとりあげる。この学習を通して、自分の身の回りにおかしい言い方が存在していることに気付かせることとする。

##### II 学習者観(対象 高校一年生三学期)

現代の高校生は、テレビや身近な人から受ける影響が大きい。学習者自身が使う言葉についてもそうである。学習者は、テレビや身近な人が使っている表現を、正しいかどうかの判断をすることなくそのまま使っている。しかし、これらの表現は常に正しいとは限らない。したがって、学習者は自分が使う表現を自分で吟味しなければならない。

本節では、自分の身の回りにおかしい言い方が存在していることに気付かせる。これをきっかけに、自分の言語生活を見直してもらいたい。

##### III 本節の可能性

- ・ 学習者も普段耳にするであろう誤った表現を例にすることで、問題を身近に感じさせることができる。
- ・ 身近な問題を取り上げることで、授業に積極的に取り組ませることができる。
- ・ 言葉の意味を理解することの大切さに気付かせることができる。

○指導目標

- ・ 日常生活で違和感なく聞く表現の中にも、誤りがあることに気付くことができる。
- ・ 正しく表現しようとする姿勢を養う。
- ・ 言葉を理解したうえで表現する必要性に気付き、自己の言語生活を見直すことができる。

○指導計画（全一時）

指導目標	学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普段耳にする表現の中にも、おかしい言い方があることに気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教科書の内容をつかむ。</li> <li>・ 班に分かれ、おかしい言い方を含んだ会話文を作る。</li> <li>・ 班ごとに発表する。他班は発表を聞き、正しい言い方は何かを考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 机間指導を行い、活動が進まない班に対しては助言する。</li> <li>・ 学習者に発表を注意して聞かせるようにする。</li> <li>・ 本時のまとめとして、いくつか例を挙げ説明を加える。</li> </ul>

○学習指導案

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師が提示した一文について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「あの人はいつもの的を得たことを言うねえ。」という一文を提示する。</li> <li>・ 本時の学習内容を明らかにする。</li> </ul>	
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本文を通読する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本文の内容について簡単な発問をする。</li> </ul>	
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 班に分かれ、おかしい言い方を含んだ会話文を作る。(ワークシート①を使用)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 以後の活動を説明する。会話文の例を示す。</li> <li>・ 班に一枚ずつカードを配る。</li> <li>・ 机間指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カードに書かれているおかしい言い方を理解できているか。</li> <li>・ 積極的に活動に参加できているか。</li> </ul>

1 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 班ごとに発表する。他班はおかしな言い方は何かに注意して聞き、なぜそれがおかしいのか、正しい言い方は何かを考え発表する。ワークシート②に記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発表はクイズ形式で行わせる。</li> <li>・ 会話文発表後、班で話し合う時間を与える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集中して発表を聞くことができているか。</li> <li>・ ワークシートに正しく記入できているか。</li> </ul>
4 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本時のまとめをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各班が発表した例を取り上げ、その誤り方による分類をする。いくつか他の例を挙げて説明を加える。</li> <li>・ 社会的慣習や、時代の変化によって、提示した例が必ずしも間違いだとは限らないことを補足する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師の説明を理解できているか。</li> </ul>

#### 《今後の課題》

本節は、日常の言語生活に即した問題を取り上げている。そこで、学習者が関心を持って積極的に取り組むことができるように、クイズ形式の活動を考えた。しかし、この活動を行うことで、三つの問題が生じた。

まずは、クイズが班単位の活動であるために、授業で扱う例に限られてしまうことである。日常の言語生活に即した問題であるために、多くの例を学習するほうが良いのかとも考えた。しかし今回は、多くの例を取り上げるよりも、数を絞ったほうが学習者の頭に入りやすいのではないかと考え、少ない例を扱うことにした。

次に、クイズのときに使うワークシートへの記入についてである。私たちは出題班の説明を注意して聞かせるために、学習者が必要だと思うことを自分で判断して記入するという方法をとった。しかし、この方法では、重要な点を書き漏らしてしまう学習者がいる恐れがある。そのため、教師が板書をし、記入する内容を明らかにするほうが良いかとも考えられる。

最後に、今回挙げた例が必ずしも誤りだと言いつけることができない点である。言葉の本来の意味から考えると誤りであっても、社会的慣習や時代の流れによって通用する表現がある。この点については、教師が最後に説明を付け加えることで、一応の対策とした。

以上三点を今後の課題とし、引き続き考えていく必要がある。

#### 《参考引用文献》

- |       |      |              |       |       |
|-------|------|--------------|-------|-------|
| ・ 監修者 | 成清良孝 | 『間違いやすい言葉辞典』 | 1999年 | 日本文芸社 |
| ・ 著者  | 宇野義方 | 『日常語の言い間違い集』 | 1994年 | ごま書房  |

<p>×愛想をふりまく 「愛嬌をふりまく」・「愛想を言う」の混同</p> <p>・「愛嬌」は「相手に好かれようとしてする言動」。「愛想」は「人に応対する仕方、人を喜ばせるための言葉、振る舞い」。「愛嬌」は「ふりまく」もので、「愛想」は「言う」ものである。「愛嬌がある」・「愛嬌がいい」は可。</p>	<p>×二の舞を踏む 「二の舞を演じる」・「二の足を踏む」の混同</p> <p>「二の舞を演じる」は、前の人と同じ失敗をすること。「二の足を踏む」は、進むのをためらうこと、しりこみすること。</p>	<p>×眉をしかめる 「眉をひそめる」・「顔をしかめる」の混同</p> <p>・「ひそめる」は、「眉のあたりにしわをよせる」こと。「しかめる」は、「額・顔の皮をちぢめてしわをよせる」こと。「眉をひそめる」・「顔をしかめる」は、ともに他人の不快な行為に対して行われるが、「眉」は「ひそめる」ものであり、「顔」は「しかめる」ものである。</p>	<p>×嫌気がする 「嫌気がさす」・「嫌な気がする」の混同</p> <p>・「嫌気」は「もう嫌だと感じる気持ち」で、「嫌気がさす」で、「嫌だ」という気持ちになる」という意味。「嫌気がする」というのは、「嫌気」をただ「嫌な気持ち」ととらえた誤り。同じ誤りに「眠気がする」がある。</p>
<p>×まだ未定 ・「未定」の「未」には「まだない」の意味がある。したがって「まだ未定」だと、同じ意味の語を重ねて使っていることになる。「まだ」・「未定」は単独で使うべきである。同じ誤りに「まず最初に」・「従来から」・「第〇日目」がある。</p>	<p>×遺産をのこす ・親などから遺された財産が「遺産」。遺産を「受け取る」「継承する」とは言えるが、「遺産を遺す」と言うのは重複表現になる。「財産を遺す」でよい。同じ誤りに「犯罪を犯す」・「期待して待つ」がある。</p>	<p>×熱にうなされる ・「熱に浮かされる」の誤り。「熱に浮かされる」は、「高熱のためにはうわごとを言う」、転じて「夢中になって分別を失う」の意味。「うなされる」は、「眠ったまま苦しそうな声をあげる」ことであり、「夢にうなされる」などと使う。</p>	<p>×さいさきが悪い ・「さいさき」は「幸先」と書く。漢字を見ると分かるが、物事の滑り出しがうまくいったとき、「幸先がいい」と言う。「幸先」の意味をただ「出だし、前兆」とだけ知っているために「幸先が悪い」と使ってしまったているが、これは誤り。</p>

× 過半数を超える

「過半数」・「半数を超える」の混同

・全体の半数より多い数が「過半数」なので、「過半数を超える」は重複表現である。「半数を超える」、あるいは「過半数になる」・「過半数を占める」でよい。

会話文例

- A A 今日席がえをしてもいいと思う。  
B B うん。クラスで多数決をとって、賛成が過半数を超えたら席がえしよう。  
A A うん。そうだね。

会話文を作るらー！

<p><b>【例 過半数を超える】</b></p> <p>「過半数を超える」は重複表現。</p> <p>「半数を超える」・「過半数になる」・「過半数を占める」が正しい。</p>	<p><b>【</b></p>
<p><b>【</b></p>	<p><b>【</b></p>
<p><b>【</b></p>	<p><b>【</b></p>
<p><b>【</b></p>	<p><b>【</b></p>

## 第4章

### 表現の実践(2) —— 記録・報告 ——

第1節 記録文

第2節 聞き書きを書く

第3節 レポートを書く

第4節 方言と共通語を使いこなす

第1節『記録文「アカテガニの大打進」畑正憲』

教育学科

酒匂慎一郎

教科教育学科国語教育学専修

富安慎吾

I 本節のねらい

第4章は、これまでの章を踏まえ、記録文、報告文、レポートなど、説明文と言える文章を書くことを目的としている。文章というものには、論説文、宣伝文、詩、小説など様々な種類のものがある。人は文章を書くとき、まず役割／目的を決め、その役割／目的に応じた文章の種類を選択し、実際に文章を作る。本節の「アカテガニの大打進」から、役割／目的を読み取り、それらがいかに効率良く文章になっているかを気づかせることで、文章というものが、無駄のない効率的なものでなければならないことを確認させる。

II 学習者観(対象 高校2年生1学期)

現代の学習者は、小学校までは作文教育を受けているが、中学・高校では、ほとんど受けていない。このことによって、学習者の多くは、文章を漫然と書いている状態がある。本来、文章というものは、それぞれ一文、一段落が全体中の一部として機能するものであり、意識的に書かれるべきものである。本節の中で、そのことを改めて確認させることで、これからの文章活動への意識付けを行ないたい。

III 本節の可能性

- ・文章というものが、役割／目的に応じて書かれるものであることを理解することが出来る。
- ・各文、各段落が、役割／目的に応じて、全体中的一部分として機能していることを確認出来る。

○学習指導計画

時	指導目標	学習活動	指導上の留意点
第一時	<p>○文章には役割／目的が存在していることを確認させる。</p> <p>○本文から筆者の主張のまとめを読み取らせる。</p>	<p>○これまで、読み／書きしてきた文章の種類を発表する。</p> <p>○挙げた文章の役割／目的を考える。</p> <p>○文章には、それぞれ役割／目的があり、それに応じた効率の良い文書を書くことが必要であることを理解する。</p> <p>○「アカテガニの大作」(以下本文)の範読を聞く。</p> <p>○筆者がこの文章に持たせている役割／目的を発表する。</p> <p>○八段落に書かれている筆者の主張を箇条書きにする。</p>	<p>○学習していたものも含め、これまで読み／書きしてきた文章の種類を発表させ板書する。</p> <p>○発表させた各文章について、その役割／目的を考えさせ、発表させる。</p> <p>○それぞれの各文章に、役割／目的があったことを押さえ、それに応じて文章は書かれるべきものであることを説明する。</p> <p>○範読の際、筆者がこの文章にどのような役割／目的を持たせているかを考えさせておく。</p> <p>○範読を聞いた上で、この文章での筆者の主張を押さえさせる。 筆者の主張が最もまとめられている段落を挙げさせる。</p> <p>○先に押さえた筆者の主張を踏まえ、八段落の内容を細かく箇条書きで発表させる。 「アカテガニには固有の時間感覚がある」ことを筆者がまとめとして言いたいことを捉えさせる。</p>
第二時	<p>○細かな記述／構成に注目させ、その効果を理解させる。</p> <p>○各段落と八段落の関係を理解させる。</p>	<p>○各段落の細かい記述／構成に着目し、各段落の主張を押さえる。</p> <p>○各段落と、八段落との関係を押さえ、この文章の役割／目的が、どのように関係していたかを確認する。</p> <p>○文章は、効率よく書かれるべきものであることを確認する。</p>	<p>○細かい記述／構成に注目させ、各段落がどのように効果的に主張を述べているかを押さえさせる。</p> <p>○箇条書きにした八段落の内容と、各段落の内容が、どのように関係していたかを確認させる。 「アカテガニには固有の時間感覚がある」というまとめにつながっていることを確認させる。</p> <p>○本文のように、文章を書く際には、役割／目的に応じた記述／構成を意識することが必要であることを確認させる。</p>

○第一時学習指導案

<指導目標>

- ・文章には役割／目的が存在していることを確認させる。
- ・本文から筆者の主張のまとめを読み取らせる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	○これまで、読み／書きしてきた文章の種類を発表する。	○学習してきたものも含め、これまで読み／書きしてきた文章の種類を発表させ、板書する。 例：小説、説明文、詩など→板書(1)	
5	○挙げた文章の役割／目的を考える。	○発表させた各文章について、その役割／目的を考えさせ、発表させる。 例：小説／作者の意志を婉曲に表現する。 楽しませる。 説明文／筆者の主張を伝える。説得する。 宣伝文／商品などの購買意欲を促進させる →板書(2) この際、具体例なども示し、この文章の場合、などの目的も押さえさせる。新規の文章ではなくこれまでの授業で行なったものを使用する。 →板書(3)	○各文章について、その役割／目的がそれぞれ異なっていることを理解して発表出来ているか。
20	○文章には、それぞれ役割／目的があり、それに応じた効率の良い文章を書くことが必要であることを理解する。	○それぞれ各文章に、役割／目的があったことを押さえ、それに応じて文章は書かれるべきものであることを説明する。	
25	○「アカテガニの大打進」(以下本文)の範読を聞く	○範読の際、筆者がこの文章にどのような役割／目的を持たせているかを考えさせておく。	
34	○筆者がこの文章に持たせている役割／目的を発表する。	○範読を聞いた上で、この文章での筆者の主張を押さえさせる。 筆者の主張が最もまとめられている段落を挙げさせる。(=八段落)	○文章には役割／目的があることを踏まえた上で筆者の主張が理解出来ているか。
40	○八段落に書かれている筆者の主張を発表する。	○先に押さえた筆者の主張を踏まえ、八段落の内容を細かく箇条書きで発表させる。 ・大潮の日を知っている。 ・時間さえ知っている。 ・日ごろの臆病ささえかなぐり捨てる。 ・時間に間に合わないものは、卵を食べて身を軽くする。 →板書(4) これらの内容から、「アカテガニには固有の時間感覚がある」ことを筆者がまとめとして言いたいことを捉えさせる。 →板書(5)	○八段落から主張となる部分を選びだすことが出来ているか。

板書については、第一時板書計画と関連。

○第二時学習指導案

<指導目標>

- ・各段落と八段落の関係を理解させる。
- ・細かな記述に注目させ、その効果を理解させる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0		○各段落に筆者の主張の論拠がそれぞれあることを押さえさせる。	
3	○一段落の内容／構造を押さえる。	○一段落が導入であることを押さえさせる。	
5	○二段落の内容／構造を押さえる。	○二段落が「アカテガニが多いことを言っている」→「全てのアカテガニが大潮の日を知っている」ということを言っていることを押さえさせる。	
13	○三段落の内容／構造を押さえる。	○「そんなこと」＝「べしゃんこにつぶれていた」という構図を示し、アカテガニの異常性が語られていることに着目させる。	○「そんなこと」などの効果を確認出来ているか
18	○四段落の内容／構造を押さえる。	○「本来なら」→「それなのに」→「そればかりか」という構図を示し、アカテガニの異常性が強調されていることを確認させる。  ○三段落と四段落が合わせてアカテガニの異常な様子を説明していることに気づかせる。 →板書での確認を行なう。	○「本来なら」～の流れによる効果を確認出来ているか。
25	○五段落の内容／構造を押さえる。	○五段落が産卵の様子を記録したもので、アカテガニが引き波に卵がさらわれることを考えて産卵を行なっていることを確認させる。 大潮の日に産卵を行なうことが、どのような効果があるのかを確認させる。	
28	○六段落の内容／構造を押さえる。	○アカテガニが完全にいなくなった様子が、「海がひたひたと～射している」という表現で強調して示されていることに注目させ、アカテガニが潮の時間を完全に知っていることを示しているのを確認させる。	○砂浜の記述の効果を理解させることが出来るか。
35	○七段落の内容／構造を押さえる。	○「魔法にでも～」という言葉で、アカテガニが完全にいなくなったことを強調していることを押さえさせる。 アカテガニの実験を記述することで、アカテガニが時間を完全に知っていることを強調していることを確認させる。  ○六段落と七段落が、合わせてアカテガニが潮の時間さえ知っていることを説明していることを確認させる。 →板書での確認を行なう。	○アカテガニの実験が描写されている意味を理解することが出来るか
40	○各段落と、八段落との関係を押さえ、この文章の役割／目的が、どのように文章に反映されていたかを確認する。	○箇条書きにした八段落の内容（第一時板書）と、各段落の内容がどのように関係していたかを確認させる。「アカテガニには固有の時間感覚がある」というまとめにつながっていることを確認させる。	○八段落のまとめのために、各段落が存在していることを再確認出来るか。

45	○文章は、効率よく書かれるべきものであることを確認する。	○本文のように、役割／目的に応じた構成を意識することが必要であることを確認させる。
----	------------------------------	---

これまで、読んだり書いたりしてきた文章

(1) ・小説

② 作者の意志を婉曲に表現すること。楽しませること。

(1) ・説明文

② 筆者の主張を伝えること。読者を説得すること。

(1) ・宣伝文

② 商品などの購買意欲を促進させること。

(3) 例 / 「手作り幻想」——説明文

・「手作り」について考え直させること。(作者の主張を伝えること)

## 「アカテガニの太行進」

畑正憲

筆者の主張が書かれている段落

(4) 第八段落

- ・大潮の日を知っている。
- ・時間さえ知っている。
- ・日ごろの腫病ささえかなぐり捨てる。
- ・時間に間に合わないものは、卵を食べて身を軽くする。



(5) 「アカテガニには固有の時間感覚がある」

このことが、この文章で筆者が主張したいこと、つまり、この文章の目的である。

第一段落

導入

第二段落

「本当なら、道が白く見えるはずであった。」

「道の表面をアカテガニが覆い、黒く見える。」

アカテガニがたくさんいること。

全てのカニが大潮の日を  
知っていることを  
言っている

第三段落

「べしゃんこにつぶれていた」

「そんなこと」⇨ 例 「たいしたことではない。  
鬼々迫る。」

「仲間の死体を踏み越えて」

アカテガニの異常性が  
強調されている

第四段落

本来なら 「アカテガニは、人の近づく姿を見ただけで逃げ惑うは  
ずだ。」

それなのに 「人がいよといまいと、おかまいなしで海へ急ぐ。」

そればかりか 「人が手を触れたとき、初めてわずかに逃げようと試み  
るだけだ」

第五段落

産卵の様子。「引き波にさらわれていった。」

⇨ 「大潮で効率良く」

第六段落

「静かな海に月の光だけが煙々と射している。」

例 「誰もいない寂しい様子  
静かにひそまった様子」

アカテガニがいつせいにい  
なくなったことを強調して  
いる。

第七段落

「魔法にでもかけられたような気」

「時間さえ知っている。」

海に入れても、卵を産もうとしない。

⇨ 時間に従って活動しているということ。

### <今後の課題>

今回の授業では、これから多くの文章を書くことになる学習者に、文章を書く上で注意すべき点を押さえさせることを目的とした。この授業では、実際に文章を書くという活動は設定していない。この節で取り扱っているのは、「自然物の記録文」である。学習者にとっては、書くことよりもその細かい記述に着目し、設定された役割／目標に応じる形でなされている記述／構成を確認することの方が有効であると判断した。

発展としては「アカテガニの太行進」だけではなく、種類の異なる文章を読むことで、役割／目的に応じた記述／構成の変化を確認するという活動が挙げられる。

また、今回の授業で学習したことを、実際に書くという活動を行なうことによって、確認することも有効であると考え。この際、今回の「記録文」で行なうのであれば、「自然物対象」と、「人間対象」という二つの方向が存在する。前者は、今回の「アカテガニの太行進」のような記録文であるが、このような記録文は、学習者にとって明確に「伝えたいこと」が設定しにくいと考えられる。「書く」という活動を考える場合には、「人間」についてのインタビューなどを元にした記録文作成の方が、(1)相手の話を聞いて、記録文にしたい主題を考える。(2)インタビューした相手の話で、重要だと考えた部分を精選する。(3)選びだした部分を、有効だと考える記述／構成によって文章化する。という観点を置くことが出来るという点で、より今回の授業を踏まえた活動を行なうことが可能であると考え。

### <参考文献>

最新 中学校国語科指導法講座 8

『理解(5) 説明、記録・報告、報道の指導』飛田多喜雄・小林一仁 明治図書 1983年10月

重要用語300の基礎知識 3巻

『国語科重要用語300の基礎知識』大槻和夫 明治図書 2001年5月

第2節 聞き書きを書く

教科教育学科国語教育学専修

小川俊輔 齋藤奈緒美

① 本節のねらい

自分自身が興味をもっていることについて話し手にも楽しんで話してもらうための、効果的な取材のしかたを知る。話し手の伝えたかったこと、強調していた点を正確に聞き取り、得た情報を効果的に伝えるための表現力を身につけさせる。さらに、今後人的資源への取材を情報収集の一つの方法として活用できるようにする。

また、話し手の人生における経験を直接取材し文章化することによって、話し手の人生観・思いに近づくことができる。そこから、自分自身の生き方、考え方を見つめ直すためのきっかけとしたい。

② 学習者観(高校二年生)

これまでの自己表現についての学習から、学習者はある程度自分の思いを言葉にすることに慣れてきている。しかし、この章では、前章までの自分の内部からの表現を踏まえ、外部からの情報を取り入れて、整理・加工して表現することが求められる。本単元では、取材をして他者の人生観と出会い、それをその人の言葉で忠実に表現しようとするにより、自分の狭い世界から抜け出して書くことにも意欲をもつことができると考える。また、高校二年生になり、進路選択の時期も近づいてくる。目の前の受験にだけ目を奪われ、大学卒業後の自分や人生の歩み方などに関心を持たない学習者も多い。豊かな人生経験をもつ他者を取材することにより、他者の人生に触れ、これからの生き方・人生観を様々な角度から考えることができるのではないだろうか。

さらに、他者の話を的確に聞き取り、第三者に伝える力は、社会に出たとき学習者に求められるものである。取材をして文章化することは、学習者にとって重要な経験になるだろう。

③本節の可能性

- ・ 自分の聞きたいことを話し手から聞き出すために、効果的な取材のしかたや質問項目を考えることができる。
- ・ 聞き取った情報を自分の中で整理・加工し、話し手の雰囲気や伝わるような文章の効果を考えてまとまりのある聞き書きとしてまとめることができる。
- ・ 他者の人生観に触れ、自分自身の生き方について様々な視点から考えることができる。

● 指導目標

- ・ 他者の生き方や人生経験などに触れ、自分自身の生き方を見つめ直すきっかけとする。
- ・ 効果的な取材をし、それを文章化する力を身につけさせる。
- ・ 明確な目的意識をもって取材し、他者の人生から学ぶ姿勢を身につけさせる。

● 指導計画 (全2時)

	指導目標	学習内容	指導上の留意点
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の聞きたいことを話し手から聞き出すために、効果的な取材のしかたや質問項目を考えさせる。</li> <li>・ 他者の人生観・職業観から学ぼうとする態度を身につけさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教科書の作品を読み、聞き手の存在に気付く。</li> <li>○ 教師がモデルインタビューを行い、取材の仕方を考える。</li> <li>○ テーマと取材対象者を決める。</li> <li>○ 質問項目を考える。</li> <li>○ 取材の流れを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作品には聞き手の質問が挟まれていることに気付かせる。</li> <li>・ 取材の留意点を考えさせる。</li> <li>・ 自分の興味のあるテーマを見つけさせる。</li> <li>・ 取材対象者の人生観、職業観にせまることができる質問を考える。</li> <li>・ テープレコーダーへの記録を促す。</li> </ul>
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 取材において感じた話し手の人生観や職業観を文章で再現することができる。</li> <li>・ 他者の生き方や人生経験などに触れ、自分自身を見つめるきっかけとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 聞き書きの書き方の説明を聞く。</li> <li>○ 聞き書きを書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークシート②を配り、説明する。</li> <li>・ 机間指導を行う。</li> </ul>

## 第1時指導案

### ○ 本時の目標

- ・ 自分の聞きたいことを話し手から聞き出すために、効果的な取材のしかたや質問項目を考えさせる。
- ・ 他者の人生観、職業観から学ぼうとする態度を身につけさせる。

分	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・教科書の作品を読み、聞き手がどのような質問をしているか考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人の語り手が語っているように見える文章の裏には聞き手がいて、その質問が挟まれていることに気づかせる。</li> <li>・段落ごとに考えてみるようにヒントを与える。</li> <li>・インタビューからこのような文章にまとめることを伝える。</li> </ul>	・作品から、聞き手の質問を読み取ることができているか。
10	・教師がモデルインタビューを行い、インタビューの際の留意点を考える。	・ワークシート①を用いて取材の際の留意点に考えさせ、発表させる。	・教師のインタビューに注目し、留意点を考えているか。
30	・取材対象者とテーマを考える。	・自分の興味のある職業、戦争体験などからテーマを選ばせる。	・自分が興味を持つテーマを見つけようとしているか。
35	・質問をつくり、取材の流れを考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目的意識をもって、自分の聞きたい質問を絞らせる。</li> <li>・どのような質問が取材対象者の人生観、職業観に迫ることができるか考えさせる。</li> <li>・抽象的な質問は避け、相手が答えやすい質問から始めるよう指導する。</li> <li>・相手にとって不快となる質問は避けさせる。</li> </ul>	・取材時の質問の流れをワークシート③に書きこめているか。
45	・取材のしかたを確認する。	・取材時は、考えた質問だけでなく流れの中で相手の思いを引き出すよう細かな問いを発するよう確認する。	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート①を用いて確認し、次時までには取材を行っておくことを伝える。</li> <li>・テープレコーダーに記録すると文章化しやすいことを伝える。</li> </ul>	
--	--	--

## 第2時指導案

### ○ 本時の目標

- ・取材において感じた話し手の人生観・職業観を、文章で再現させる。

分	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・文章化する際の留意点を聞く。	・ワークシート②を配布し、説明する。	
5	・取材時のメモやテープを用いて、文章化をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取材対象者の一人語りの形式で書かせる。</li> <li>・取材対象者の人生観をそのままの形で表現できるように、構成を考えさせる。</li> <li>・机間指導を行い、文章化の仕方を指導する。</li> </ul>	・取材対象者が伝えようとしたことを自分の中で整理・加工し、読者に伝わるように文章化できているか。
45	・完成した聞き書きを提出する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞き書きをまとめ、文集にし全員に配布することを伝える。</li> <li>・人的資源への取材を情報収集の一つの手段として活用できることに気づかせる。</li> </ul>	

## ●今後の課題

### ①取材への目的意識をどう持たせるか。

今回の授業では、教科書の作品の中にインタビュアーが隠れているということへの興味を導入とし、取材への意識を高めさせようとした。しかし、取材内容が将来の職業に役に立つということだけでなく、相手の人生観・職業観といった相手そのものを知りたいという気持ちを持たせることが重要な課題であると感じる。

### ②学習者全員が興味あるテーマを見つけられるか。取材したい人や、興味のある仕事に就いている人にアポイントを取れない場合はどうするのか。

教師の机間指導により、学習者が自分の興味や、将来への希望と向き合えるように指導したい。また、直接会って取材をすることが難しい人物の場合、電話での取材をすることも考えられる。学校図書館での人的資源マップ等の作成を進め、活用できるように指導したい。

### ③実際の取材が授業外の活動になってしまう。インタビューの流れの中でどのような質問をしたのか、相手への態度はどうだったかなど教師が直接見て指導することができない。

評価の問題にも関わるが、本単元の一つの大きな活動である取材が授業外の活動になってしまうため、指導がしにくいという課題が挙げられる。今回は教師がモデルインタビューをすることにより取材に大切なことを学ばせようとした。

### ④インタビューの注意点は学習者から出させるべきではないか。

今回は初めてのインタビューであり、注意点を見つける観点を教師側からある程度提示することが必要だと思われる。ワークシートの下に空欄を設け、学習者が自由に気付いたことを記入できるようにしたい。

### ⑤どう評価するのか。

聞き書きには取材という「話すこと・聞くこと」の活動と、それを文章化する「書くこと」の指導が含まれる。「書くこと」については作品や机間指導で評価することができるが、取材の中の「話すこと・聞くこと」は評価しにくい。取材の感想などを書かせることや自己評価が考えられる。

### ⑥テーマについてある程度知識をもって取材に行くべきである。

今回の授業では取材のために特に調べてから行くということではなかった。しかし、質問項目を具体的に絞って考えたり、取材対象者に好印象を抱いてもらったりするためにはある程度取材することについての知識を持っていることが必要である。図書館で調べ学習の時間を取ることも考えられる。

### ⑦各自が聞き書きをしたものを全員が読むことができる時間が必要である。

できるだけ多くの人の様々な人生観に触れるとともに、友人が興味をもって取材した人物について知るためにそれぞれの作品を読みあうことが重要である。今回の授業では文集として配ることで今後に生かそうとしたが、授業の中でそれぞれの作品を紹介する時間をとることも考えられる。

## 《参考文献》

田近洵一・浜本純逸・大槻和夫編『たのしくわかる高校国語Ⅰ・Ⅱの授業』あゆみ出版  
立花隆『「知」のソフトウェア』講談社現代新書  
立花隆+東京大学教養部立花隆ゼミ『二十歳のころ 立花ゼミ「調べて書く」共同制作』  
新潮社

# 聞き書きの流れ

—これさえあれば大丈夫!—

## 1、取材対象者を決めるんだ!

- ①事柄（関心のある職業、戦争体験、青春時代の行き方など）に対する（ ）から選ぶ。
- ②人物（祖父母、父母、先生など）に対する（ ）から選ぶ。

## 2、質問を考えようではないか!!

- ①自分の（ ）に沿って質問事項を考える。
- ②考えた質問事項をある程度分類してメモをする。
- ③相手に不快を感じさせる質問になっていないか、よく吟味する。

## 3、取材のアポイントメントをとろう!

- ①どんな事柄を聞きたいか事前によく考える。
- ②相手に取材をする時間と場所の交渉をし、（ ）をあらかじめ相手に伝えておく。

## 4、実際に取材をする際には、以下のことに気を付けよう!!!

- ①明確な（ ）をもって取材に行く。
- ②質問事項は出来るだけ頭に入れておき、質問に窮したときだけメモを見る。
- ③相手と良好な人間関係を築いた方が、当然多くを語ってもらえる。  
そのためには礼儀を心得ることが重要。
- ④いつ、どこで、だれが、何を、何故、どのように行ったか（＝ ）という話しのポイントを聞き落とさないようにメモを取る
- ⑤人名や地名などの固有名詞は、（ ）を確認する。
- ⑥年月日、数量などの（ ）にも注意する。
- ⑦メモは要点のみにとどめ、できるだけ相手の顔を（ ）たり、（ ）たりして聞くと、話が弾みやすい。
- ⑧また、テープレコーダーなどで録音しておく、話を文章化しやすい。  
ただし、その場合は（ ）を得ておく必要がある。
- ⑨用意している質問を機械的に投げかけるのではなく、相手の話の流れの中で質問をする順番を変えてもいいし、面白いと思ったら突っ込んで聞くようにする。

◎他にも気付いたことがあれば書こう!

**5、文章化する際には、以下のことに気を付けよう！！！！**

- ①取材したときの印象を文章に反映させるため、メモ（や録音）をもとにして（ ）文章化にとりかかる。
- ②聞き取った内容は膨大になる場合が多いので、すべてを書こうとしないで、（ ）に沿って内容を（ ）し、全体の構成を考えてまとめる。
- ③読みにくくない程度に方言など（ ）を盛り込み、その人らしい雰囲気を出すよう工夫する。
- ④話し手自身の（ ）や（ ）・（ ）などについて語っている部分を早めに提示しておく、読者は話に入りやすい。
- ⑤取材で自分が得た感情を、自分が構成した文を読んで、再度感じる事が出来るようにする。

《構成メモ欄》

## 一取材をしよう一

( )年( )組 名前( )

### ○誰に聞くのか？テーマは何にするか？

どんな仕事に興味があるだろう。戦争や過去の様々な出来事で聞いてみたいことはないだろうか。それを誰に聞いてみたいか考えよう。

### ○どんな質問をするのか？どんな順序で聞くのか？

話し手の伝えたいこと、自分の聞きたいことを引き出すためにはどのような質問をし、どのような順序で聞くと効果的なのか考えよう。

## 看護師の仕事について

荻田隆之・・・1977年生まれ。鹿児島大学医学部看護学科を卒業後、広島市立安佐市民病院勤務。

ぼくは市立病院の内科病棟に勤めている看護師なんだけど。看護師っていう仕事はね、簡単に言うと病院で患者さんのケアをする仕事为主で。朝病院に行くとすぐに、夜勤勤務の看護婦さんたちと業務の引継ぎミーティングがあってね、病棟にいる患者さんの状態を教えてもらうんよ。そこで、容態が変化したり特にケアに注意が必要な患者さんについて頭にたたきこまなきゃいけないのね。特にうちの場合、内科病棟じゃけえ、患者さんを外から見ただけじゃ判断できんけえ、このミーティングがすごい大切なんよ。このミーティングをいいかげんにすると、特定の病気にはの、絶対に使っちゃいけない薬があって、患者さんの命に関わることもあるんよ。ミーティングの後にはメディカルチェックってゆって患者の体温や血圧とかいった体調チェックをしてまわるね。その日にレントゲンや手術の入っている患者さんの食事制限を管理したりするんもぼくたちの仕事なんだよ。

ぼくが看護師になろうと思ったのは、ぼくのおふくろが看護婦をしとってね、うちは母子家庭だってね、育ててくれたおふくろには感謝しとるし尊敬してますね。たぶん、その影響が強いんじゃないかね。もう、小学校六年生んころには、文集に「看護婦になりたい」って書いてったです。そのころは、看護師っていう言葉はまだなかったし、看護婦っていうと実際女性ばかりじゃったし、友達に「看護婦になりたい」って言ったときには笑われたもんじゃね。でも、この職場で男性っていうのはまだまだめずらしいもんですよ。

男で看護師をやつとると、注射するとき嫌がられたりするのはよくあることじゃね。無神経だと思われるかねえ。ほいじゃけど、患者さんは結構ご年配の方が多いいえセクハラとか言われることはないっすねえ。病院内じゃあ、よく先生と間違えられます。力仕事の割合が多くなるのは女性と違うところですね。

今は、勤務は夜勤、準夜、日勤というな、一日三交代制なんよ。でも、今うちの場合、自治体が財政難じゃけえ、一日三交代制を一日二交代制にして給料カットをしようしとるんよ。でもな、そんなことしたらな、長時間労働で注意力が低下して、医療ミスが多くなるんじゃないかのって思うことはよくあるよ。もうひとつはインターンの医者が一人で当直医になって医療ミスを起こすケースが増えとるんじゃけど、研修医が当直するときにはもう一人医者がついてアドバイスできるようになったらええなと思う。

今の病院で一番怖いのは、院内感染じゃね。院内感染ちゅうのは、ウイルス感染の一種で人間がより強い抗生物質を作るとウイルスがそれ以上強く進化するんよ。いちごっこちゅうわけだ。病院内では、患者さんの抵抗力が弱いけえ、よく集団で院内感染が起こって問題になるね。あと、ベット不足も全国的に深刻になつとるね。救急車がいくら早く到着してもベットの空いている病院がなくなつたら一回しになるケースがよくあるし、いくら救急救命士の制度ができてあんなに効果ないよ。

看護師は医者の指示には絶対に従わなければならないのじゃけど、でも看護師がおらんと医療マネジメントはできんし、そういう意味じゃあ持ちつ持たれつの関係ちゅうことが言えるね。病棟の患者のことを一番よく知つとるのは医者じゃのうて看護しじゃけえね。実際には、そうい

う問題は看護婦長がみな医師と掛け合ってくれるけえわしらが直接医者とぶつかることはあんまないね。婦長さんはぼくらみたいな新米を教育したり、なんかあったら責任もとらんにゃあいけんし大変じゃね。

看護師をしていてうれしいのは、やっぱり患者さんに感謝されたときが一番じゃねえ。例えば、看護した患者が退院した後も、手紙を送ってくれたり野菜を送ってくれたりしたときにはほんまうれしいもんじゃね。元気になった患者さんが作ってくれた野菜を食べるのは、ぼくも元気もらったようで明日からも仕事がんばろっちゅう気になるよね。

一番大切にしているのは、患者さんの心のケアかな。患者さんの不安は多様じゃけど、患者さんの中には盲腸から末期ガンまでいてそれぞれの患者さんがそれぞれの不安を抱えて生活しとるし、言っちゃあいけんことや悟られちゃいけんことがあるんよね。それは家族の人にも言えるしね。経済的にも精神的にも家族に負担を強いることになるし、これからは家族の人へのケアも大切になってくると思うよ。

看護師といってもうちみたいな大きな総合病院と小さな個人病院じゃあ仕事の内容も違ってくるし。例えば、ちっちゃい病院じゃあ院内の掃除とか食事の配膳も看護師の仕事になるし、同じ看護師でも手術室勤務の看護師では休みの日にも緊急手術が入った時に備えてポケベルを携帯しとらにゃあいけんし、看護師・看護婦といっても勤務先によっていろんな内容の仕事がありますね。(採録：斎藤真一郎)

## 第4章 表現の実践(2) —記録・報告—

### 第3節 レポートを書く

科目等履修生 松下淳

教科教育学科国語教育学専修 片岡由香合

#### I 本節のねらい

報告文は、あるテーマについて調査や考察などを行い、得られた結果をまとめて報告するものである。報告文を書くには、調べる内容をはっきりさせ、必要な情報を収集し、整理してまとめる力が必要となる。

本節では、報告文を書く活動を通して、客観的に文章を書く力をつけ、自分の伝えたい内容を、適切な資料を用いることによって明確に表現する力を身につけさせる。また、最終的に発表することを考えながら、資料作りや発表の方法などを考え、限られた時間の中で適切に伝え、相手の理解を助けるような発表をする力を身につけさせる。

#### II 学習者観(高校二年生)

これまでの学習で、生徒たちが身につけていると期待される力は次の二点である。

一つめは、第二章で学習した文章表現力である。具体的には、わかりやすい表現を用いることや、自分が書いた文章を読み返して吟味すること、話のつじつまを合わせることなどである。

二つめは、第三章で学習した、人に伝えるための文章を書く力である。具体的には、手紙を書く形式を覚え、使うことができること、相手を意識した表現ができることなどである。

以上の力を身につけたことによって、生徒は国語表現を工夫し、それを人に伝える楽しさを感じることができるようだろう。しかし、実生活において、これらの力が本当に機能するためには、さらなる学習が必要である。

本節の「レポートを書く」活動は、作文を書くことや、手紙を書くことに比べて、高校生にとっては親しみのない活動であろう。加えて時間がかかる活動であるために、敬遠されがちである。しかし、生徒の言語生活の中で、知ったこと、分かったことを整理して、人に伝えるということは少なくない。伝え方が分かりやすく、まとまったものであるほど、読み手、聞き手の理解を得ることができるようだろう。かける時間の長さは違っても、情報を収集し、整理する力は多くの言語活動において必要な力である。

本節では「レポートを書く」活動を通して、生徒に情報を収集し、まとめ、発表する力を身につけさせる。それによって、生徒が話したり、書いたりする活動をより効果的におこなうことができるようになることを目指したい。

### Ⅲ 本節の可能性

- 報告文の書き方を知ることができる。
- 報告したい内容を自分で決めることができる。
- 必要な情報を収集することができる。  
(インターネット・図書室・アンケート・インタビューなどの活用)
- 集めた情報を整理して、考察することができる。
- 調べた結果から分かったことを、箇条書きなどを用いてまとめることができる。
- 聞き手が理解しやすいように発表を工夫することができる。  
(図やグラフを用いる。話し方に気を配る。決められた時間の中で伝える。)

#### IV 指導計画・指導案

・「レポートを書く」全体の指導目標

報告文の書き方を身につける。(技能)

報告文を書く上での様々な活動に主体的に取り組むことができる。(態度)

聞き手、読み手が理解しやすいよう配慮した発表ができる。(価値)

<指導計画> (全六時)

	指導目標	学習活動	指導上の留意点
第一 次	第一時 ・教科書をもとに報告文の書き方をおおまかに理解させる(導入) ・課題を考えさせる。	・教科書をもとに報告文の書き方を、順をおって確認する。 ・ワークシート①をもとに課題を設定する。	課題設定の範囲が広いものにならないよう、指導する。
第二 次	第二時 ・情報の集め方を身につけさせる。	・調べる内容に適した情報収集の方法を考え、実際に情報を集めてみる。 ・ワークシート②をもとに、情報を整理する。	アンケート形式の調べ方や、図書館資料、インターネットの利用の仕方などを示す。
	第三時 ・集めた情報から、課題の研究に必要なものを選び出して、考えをまとめることができるようにする。	・情報を整理して、報告文の形式にそってまとめる。(統計をとるなど) ・ワークシート③を元に、情報をまとめる。	
第三 次	第四時 ・発表にむけての資料作りや、発表原稿の作成などができるようにする。	OHP、グラフなどを活用して、読み易い資料作りをめざす。 発表の流れを考え、スピーチの内容を考える。	OHP や、透明なシートの使い方を指導する。
	第五・六時 ・報告文の形式を活用した、まとまりのある発表をする。	・前時で作成した資料、発表原稿を元に発表を行う。 ・ワークシート④の、評価シートの項目をもとに、評価を行う。(話し合い形式で)	・発表の役割にかたよりがないように注意する。

## 第一時 指導案

### ○ 本時の目標

- ・ 報告文の書き方を、手順をおって理解することができる。
- ・ 報告文の課題を設定することができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・ 本節の学習内容を知る。	・ 本節の学習内容が「レポートを書く」ことであることを伝える。	
2	・ 教科書 p78～p79の「レポートの書き方」を通読する。	・ 板書などを用いて、生徒が流れを確認できるように配慮する。	書き方のおおまかな流れを把握できているか。
15	・ 五人一組のグループを作り、報告文作りをする。		課題設定を適切に行っているか。
20	・ 「調べたいこと」を探して、報告文の課題を決めることができる。	・ ワークシート①を用いて、調べる対象とその調査方法を考えることができるようにする。 ・ 次回から、課題を調べる情報集めをすることを伝える。	
45			

## 第二時・三時 指導案

### ○ 本時の目標

- ・ 様々な情報収集の方法があることを知り、調べたいことに応じた情報集めができる。
- ・ 調べた情報を整理し、分かったことをまとめることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・ 前時で決めた課題の確認をする。		
3	・ 情報を集める方法を知る。		
8	・ 情報を集める方法を考える。	・ ワークシート②を配り、情報収集の方法を考えさせる。	・ 課題を調べるために適切な情報集めの手段を選んでいるか。
15	・ 情報を集める。	・ 図書館の利用や、インターネットの利用ができるよう準備しておく。	
45	・ 集めた情報を整理する。	・ ワークシート③を使って、報告文の構成を身につけさせる。	・ 表にしたり、箇条書きにしたりするなど、効果的にまとめられているか。
65	・ 結果から分かったことや、考えたことを文章にする。		・ 調査結果をふまえて書けているか。
90	・ 次回の学習内容を示す。	・ 次の時間から、発表にむけた資料づくりを行うことを伝える。	

#### 第四時 指導案

○ 本時の目標

- ・ 報告文の形式に沿って、資料を作ることができるようになる。
- ・ 発表に向けての資料作りや、発表原稿の作成ができるようになる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・ 第一時でやった報告文の構成を復習する。	・ ノート・教科書を開いて、再度簡単に説明する。	・ 報告文の構成を理解できているか。
3	・ いろいろな発表方法について学ぶ。	・ OHP の使い方を指導する。 ・ いろいろな発表の方法があるということを知らせる。 ・ 発表するときの注意点を指導する。	
10	・ グループごとに発表の仕方を考える。	・ 1 グループが発表する時間が10分であることを告げる。 ・ 一人一回は発表するように指導する。	
18	・ 発表のための資料作りをする。  ・ 発表の流れを考え、スピーチの内容を考える。	・ 報告文の形式からそれないように注意を促す。  ・ 資料を読むだけにならないように気をつけさせる。 ・ 伝えたいことが10分以内でおさまるようにさせる。	・ 報告文の形式に沿って、資料を作ることができるか。
49	・ 次時は実際に発表を行うことを知る。 ・ 発表の順番を決める。	・ 次の時間は発表を行うことを告げる。(出来上がっていないところには仕上げておくように言う。)	

第五・六時 指導案

○ 本時の目標

- ・ 報告文の形式を活用した、まとまりのある発表をすることができる。
- ・ 発表の仕方や資料の作り方について、報告文の書き方を元に評価をすることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	・ 本時の活動内容を知る。	発表を行うことと、聞く側はその評価を行うことを説明する。	
2	・ 発表を行う。 ・ 模造紙に書いた表や OHP などを活用した発表をする。 ・ 聞く側は、評価シートをもとに、発表を評価する。 ・ 一回の発表 10 分間について、一分間の評価シート記入の時間と、二分間の質疑応答時間を取る。	発表の役割に偏りがでている班がないか、注意する。  評価シートは、一度教師が回収して、評価した後、発表をした班に渡す。	・ 報告文の形式を活用できているか。資料やスピーチを効果的に使えているか。  ・ 発表の評価を、報告文の書き方をもとに行っているか。
95	・ 学習してきた内容の再確認をして、まとめをする。	・ 報告文を書くことで学習した、情報収集の仕方や、構成の仕方を今後の学習に生かせるように心がけさせる。	

## V 反省点と今後の展望

本節「レポートを書く」の指導計画、指導案をつくる過程で、いくつかの課題が生まれた。以下1から6までがその課題である。それぞれについて解決策を考えたが、今も未解決のものもある。それは4と6の課題である。それらは今後改善していける要素でもあるので、改善策を考えていきたい。

### 1、報告文の書き方の指導と、生徒の自主的な学習の両立するにはどうするか

ワークシート③を作成する段階で、生徒を誘導しすぎているのではないかという疑問が生まれた。そこで、発表原稿と資料を作成する活動を生徒が自主的に行えるようにした。そうすることで、生徒に書き方を身に付けさせるという学習と、実際に活用できるようにする学習の両方ができるのではないかと考えた。

### 2、課題の設定方法の提示は適切か

ワークシート①の作成にあたって、調査対象を教師の側から提示して、そこから生徒が選択して行えるようにするのはどうか、という考えが生まれた。しかし、「書く動機を生徒自身が持ってほしい」と考え自由設定にした。また、例を挙げることで、設定がしやすくなるように配慮した。

### 3、進度の違う生徒に対する配慮ができていますか

第二時、三時を弾力的にすることで、ある程度の進度の違いは考慮できるのではないかと考えた。ただし、三時間目が終わった段階で遅れている班が、四時間目の活動にスムーズに入れるかどうか、考える余地がある。

### 4、発表時間の設定は適切か

クラスの数が多い場合、発表の時間は二時間では足りない。その場合、時間を長くすると、学習のメリハリがなくなってしまうのでは、という課題が残る。質疑応答の時間に関しては、教師側から質問内容のしぼりこみをすることで、解決できるのではないかと思う。

### 5、ワークシートが多すぎないか

今回は四枚のワークシートを使う。学習者が高校生であるから、ノートを使うようにして、内容を板書で示すという方法もある。しかし、今回は生徒が報告文を書く活動にできるだけ時間をとりたいと考えたので、生徒が板書書きとりをする時間を減らす意味で、多くのワークシートを用いた。

### 6、実際に授業を行うにあたって

自分たちで報告文をかくことをしていないため、活動にどの程度の時間がかかるかの見当が十分についていない。グループ学習を前提にしているのも、その点でも時間配分が分からない。

## 課題を決めよう

レポートを書くために、まず、「調べたいこと」を決めましょう。

調べることを決める上での注意点は次の二点です。

- ・ 調べたいことを考える。  
自分が興味のあることや、周りの人に聞いてみたいことなどを取り上げるようにしましょう。
- ・ 調べる対象と、方法をきめる。  
クラスの中、学校、暮らしている町のことなど、調べる対象を決めましょう。また、それについてどんな方法で調べるかを考えましょう。

- I ①何について調べたいと思いますか？（例1・メディアの利用状況について）  
（例2・週休二日の使い方）

( )

②調べたいと思った理由を書きましょう。

( )

- II Iについて、調査の対象と方法を考えましょう（例1、インターネットを使って全国の情報を調べる）  
（例2、アンケートを使ってクラス中の情報を集める）

( )

- III 課題名を作りましょう。（例1、日本における、メディアの利用状況について）  
（例2、〇〇学校生徒の、週休二日の使い方について）

( )

## 情報を集めよう

調査対象が決まったら、次にすべきことは情報を集めることです。調べる内容や、範囲によって調べ方は異なりますが、代表的な情報収集のしかたは次の二通りです。

- 1、図書室、インターネットなどを活用して、既にある情報を集める。
- 2、アンケートやインタビューをするなどして、情報を現地で調達する。

1の方法が有効なのは、広範囲の情報が必要な場合です。全国の高校生の意識調査などは、2の現地調達のやり方では調べるにも限りがあります。既存の情報を活用することが有効でしょう。

インターネットの検索エンジン

GOOGLE <http://www.google.com/intl/ja/>

Yahoo!Japan <http://www.yahoo.co.jp>

2の方法が有効なのは、調べる範囲が比較的狭く、できるだけ新しい情報を得たい場合です。クラスのことについて調べるときなどに活用するとよいでしょう。

アンケートの作り方の一例

- ① 聞く内容を決める。
- ② ①について、質問の項目を作る。
- ③ 数の集計ができるように、選択回答式の質問を作る。
- ④ ③で聞けない意見を書けるように、自由に記述できる欄をつくる。

自分の課題にあった調査の仕方をするように工夫しましょう。

I, 調査の方法を考えましょう。具体的にどんなことを調べてみたいかを、箇条書きにしてみよう。

( )

II, Iについて、情報の集め方を考えましょう。箇条書きにした方法それぞれについて、考えるようにしましょう。

( )

( ) 班 氏名 ( )

ワークシート③  
それでは、報告文の流れに沿って資料を作る準備をしましょう。

課題 ( )

調べようと思った理由・目的⇒①

( )

調べたこと

参考文献・収集方法

④ ↓ ⑤ ↓ ⑥

[ ]

↓ 伝える内容を3～4つにしぼりこもう⇒③

項目ごとに分けて考えよう

この結果からわかることは何か。

グラフや表などを使って、

考察してみよう

まとめてやすくするように工夫しよう。

[ ]

結論⇒④

この調査を通して分かったことを箇条書きにあらわそう。

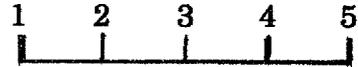
[ ]

☆ このワークシートに基づいて、次は発表資料を作成します。

# 発表評価シート

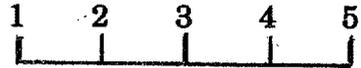
[ ] 班

・読みやすく、分かりやすい資料になっているか



[ OHP を使うなどの、工夫ができているか  
番号をふるなど、順序がわかるようになっているか。 ]

・聞き取りやすい話し方ができているか。  
[ 声の大きさや、要点を強調することができるか。 ]



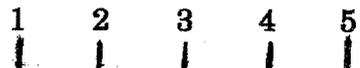
・調査対象の決め方は適切か。  
[ 範囲をしっかりと決めているか。  
調べる動機がはっきり示されているか。 ]



・調べる方法は適切か  
[ 方法と、情報の集め方の関係が適切か。 ]



・まとめ方、考察の仕方  
[ 表やグラフ、箇条書きを活用するなど、まとめる工夫ができているか。 ]



・感想、意見など

( )

## 第4節 方言と共通語を使いこなす

教育学部教科教育学科国語教育学専修

坂田 彩 里見 友紀

### 1. 本節のねらい

方言は学習者たちの最も身近にあるものであり、自分の感情や考え方を一番的確に表現するためのツールでもある。しかし、方言はいつなんどきでも使えるものではない。その土地土地に根ざしたものであるため、地域が異なれば自分の普段使っている表現でも相手に伝わらなかつたり、誤解されたりすることもある。また、同じような観点から、公の場において方言を使用することは特別な場合を除いては適切ではない。かといって、それならば共通語だけを使用すれば良いのかという決してそうではない。その土地や文化に根ざした言葉を使わないというのはなんともさびしいものである。つまり共通語、方言、どちらが欠けても味気ない言語活動となってしまうのである。豊かな言語生活を送るにはこの二つのタイプの日本語の使い分けが余儀なくされてくる。

本節では豊かな言語生活を学習者に手に入れてもらうために、方言が地方によってどれほど違いがあるかということを理解することを通して、共通語と方言の使い分け、共通語の重要性、方言の地域性、文化的価値などを感じてもらえれば、と思う。

### 2. 学習者観(高校二年生)

高校生ともなれば方言を話してもよい場(話したほうがよい場)、共通語を話さなければならぬ場というのは意識しなくても経験から理解していると思われる。しかし最近ではテレビなどの中央のメディアから発信される共通語に影響され、方言は影が薄れてきている。その一方で、地方テレビ局の番組では積極的に方言を使った情報の提供などが行われている。学習者たちはこのように共通語、方言両方に囲まれた環境で生活しているのである。普段何気なく使っている言葉でも、実はその地域限定の言葉で他所では通じないということもあるはずである。それを実感させることにより、共通語、方言双方の重要性を理解し、豊かな言語活動とは一体どのようなものかということを考えさせたい。

### 3. 本節の可能性

- ・全国には教科書の例である「かぼちゃ」ひとつをとっても様々な表現があることを理解し、共通語の重要性、日本語の表現の多様性について考えることができる。
- ・その土地の風土、文化に根ざした方言がなぜ豊かな言語生活には必要なのかを考えることができる。(なぜ全国を共通語で統一してはならないか、そうしないほうがいいのか)

○指導目標

- ・方言に関心を持つことができる。
- ・方言と共通語の特性を理解することができる。
- ・自らの言語生活の中で、方言と共通語を場面に応じて使い分けることができる。

○指導計画（全一時）

指導目標	学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・方言に関心を持つことができる。</li> <li>・方言と共通語の特性を理解することができる。</li> <li>・自らの言語生活の中で、方言と共通語を場面に応じて使い分けることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートで作業し、数名が発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書き言葉ではなく、実際に口に出して話す時の言葉を、正確に書くよう指導する。</li> <li>・机間指導を行い、活動が進まない学習者に対しては、助言する。</li> </ul>

○学習指導案

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	・教科書の方言分布図を見る。	・方言分布図を見て、周りの人と話し合うことで、方言について関心を持たせるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・方言に興味を持って、授業に取り組むことができているか。</li> <li>・方言と共通語の特性を理解し、使い分けることができているか。</li> <li>・方言を用いることで得られる効果について理解できているか。</li> <li>・方言、共通語ともに必要だという意識を持てたか。</li> </ul>
2分	・プリントを見て、様々な語彙の違いを知る。周りの人と話す。	・ワークシートを配る。方言のプリントを見て、周りの人と話し合わせる。一つの単語をとっても、全国的にかなり差異があるということを意識させる。	
10分	・ワークシートに記入する。	・机間指導を行い、活動が進んでいない学習者に対しては助言する。	
30分	・記入したものを発表する。	・指名し、発表させる。	
40分		<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のまとめをする。</li> <li>・ワークプリントを回収する。</li> </ul>	

### ○ 今後の課題

話しことばについて考える今回の授業は、学習者による活発な活動を通して行いたいと思った。そこでワークシートを用い、その中で学習者が実生活で経験しうる場面を設定し、共通語と方言を意識しながら使い分ける必要性を感じてもらえるようにした。今回は方言を用いて文章を書かせるという作業を取り入れたが、方言は日ごろ意識せずに使っているので実際それを書かせるという行為に疑問は残った。

今回私たちが一番頭を悩ませたのは高校二年生というこの時期に、方言の学習にどのくらいの時間を割いてよいものか、ということであった。私たちはあまり時間がとれないと判断し、全一時とした。話し合いの過程において、他にも様々な方法が挙げたが、時間の関係で採用しなかったものをここであげておく。

一つめはインターネットを活用する方法である。パソコンが学校にも普及し授業にも取り上げられるようになってきているので、インターネット上で他地域の方言について学習者自身に調べさせたり、他の学校の学習者と方言で交流したりすることも可能である。

二つめは授業前にテープレコーダーを用いて教室での学習者の声を録音しておき、授業に使ってみるという方法である。これに関連するものとして、地方局のテレビ番組や、ラジオなど音として耳に実際入ってくるものを効果的に授業に使っていくというものもある。

今回の指導案では「方言と共通語どちらも豊かな言語生活に必要なものである」という点に重点を置いていたにもかかわらず、方言を中心にしていたように思う。共通語の指導もあわせて行っていきたい。

### ◆参考文献

- |               |        |             |           |
|---------------|--------|-------------|-----------|
| 全国方言一覽辞典      | 江端義夫ら編 | 1998年12月1日  | 株式会社学習研究社 |
| 日本児童文学大系第二十八卷 | 斎藤寿始子編 | 1978年11月15日 | 株式会社ほるぷ出版 |

● こんばんは【今晚は】

1	北海道	オバンデス	25	滋賀	オシマイヤス
2	青森	オバンデコス	26	京都	オシマイヤス
3	岩手	オバンデカンス	27	大阪	コンバンワ
4	宮城	オバンデス	28	兵庫	コンバンワ
5	秋田	オバンデス	29	奈良	オシマイ
6	山形	オバンデス	30	和歌山	オシマイ
7	福島	オバンカダ	31	鳥取	バンナリマシタ
8	茨城	オバンデス	32	島根	バンジマシテ
9	栃木	オバンガタ	33	岡山	バンジマシタ
10	群馬	コンバンワ	34	広島	オシマイデカンスカ
11	埼玉	コンバンワ	35	山口	コンバンワ
12	千葉	コンバンワ	36	徳島	コンバンワ
13	東京	コンバンワ	37	香川	オシマイガサシセ
14	神奈川	コンバンワ	38	愛媛	コンバンワ
15	新潟	オバンデス	39	高知	コンバンワ
16	富山	オラレツケ	40	福岡	コンバンワ
17	石川	コンバンワ	41	佐賀	コンバンワ
18	福井	オシマイナシタカ	42	長崎	コンバンワ
19	山梨	オツカレナツテ	43	熊本	シマイナハリマシタカ
20	長野	コンバンワ	44	大分	オシマイデス
21	岐阜	コンバンワ	45	宮崎	シメナツタカ
22	静岡	オシマイデスカ	46	鹿児島	コンチャラゴアシタ
23	愛知	イラユースカエ	47	沖縄A	チャーピラ
24	三重	オシマイナシテ	48	沖縄B	チューウガナピラ

● つらい【辛い】

1	北海道	ユルグナイ	25	滋賀	キビシイ
2	青森	ヘズネ	26	京都	ツライ
3	岩手	ナンギダ	27	大阪	ツライ
4	宮城	ウンザネハグ	28	兵庫	シンドイ
5	秋田	セスネ	29	奈良	ズツナイ
6	山形	シェズナエ	30	和歌山	ツライ
7	福島	セスネ	31	鳥取	エライ
8	茨城	ツレー	32	島根	エライ
9	栃木	セスネ	33	岡山	エリヤ
10	群馬	ツレー	34	広島	シンドイ
11	埼玉	ツレー	35	山口	ゼツナイ
12	千葉	ツレー	36	徳島	ツライ
13	東京	ツライ	37	香川	ツライ
14	神奈川	ツライ	38	愛媛	ツライ
15	新潟	クルシ	39	高知	ストウナイ
16	富山	ウイ	40	福岡	ツラカ
17	石川	ヒドイ	41	佐賀	キツカ
18	福井	エレ	42	長崎	ツラカ
19	山梨	セツネ	43	熊本	キツカ
20	長野	ツライ	44	大分	ズツネ
21	岐阜	エレ	45	宮崎	ツレ
22	静岡	エリヤ	46	鹿児島	ツレ
23	愛知	エリヤ	47	沖縄A	クチサン
24	三重	ツライ	48	沖縄B	クチサン

● じゃがいも【馬鈴薯】

1	北海道	ゴシヨイモ	25	滋賀	ジャガイモ
2	青森	ゴシヨイモ	26	京都	ジャガイモ
3	岩手	ニドイモ	27	大阪	ジャガイモ
4	宮城	ヌドエモ	28	兵庫	ジャガイモ
5	秋田	ニドイモ	29	奈良	ニドイモ
6	山形	ナズエモ	30	和歌山	ジャガイモ
7	福島	カンプライモ	31	鳥取	コーボイモ
8	茨城	カンブラエモ	32	島根	コーボイモ
9	栃木	ジャガエモ	33	岡山	キンカイモ
10	群馬	ジャガイモ	34	広島	ジャガイモ
11	埼玉	ジャガタラ	35	山口	ジャガタラ
12	千葉	ジャガイモ	36	徳島	ニドイモ
13	東京	ジャガイモ	37	香川	ニドイモ
14	神奈川	ジャガイモ	38	愛媛	ジャガイモ
15	新潟	ニドエモ	39	高知	ジャンガイモ
16	富山	ジャガイモ	40	福岡	バレーショ
17	石川	ジャイモ	41	佐賀	ジャガイモ
18	福井	ゴガツイモ	42	長崎	ジャガタライモ
19	山梨	セーダイモ	43	熊本	ジャガタラ
20	長野	ナツイモ	44	大分	ジャガイモ
21	岐阜	ジャガイモ	45	宮崎	ジャガタラ
22	静岡	ジャガタラ	46	鹿児島	ジャガタラ
23	愛知	バレーショ	47	沖縄A	ジャガイモ
24	三重	ジャガイモ	48	沖縄B	ジャガイモ

● とうもろこし【玉蜀黍】

1	北海道	トーキビ	25	滋賀	チンパン
2	青森	キミ	26	京都	チンパ
3	岩手	キミ	27	大阪	チンパ
4	宮城	トーキビ	28	兵庫	キビ
5	秋田	キミ	29	奈良	チンパ
6	山形	トッキビ	30	和歌山	チンパ
7	福島	トーキビ	31	鳥取	キビ
8	茨城	トーキビ	32	島根	ナンパキ
9	栃木	トーキビ	33	岡山	チンパ
10	群馬	モロコシ	34	広島	トーキビ
11	埼玉	トシモロコシ	35	山口	ナンマンキビ
12	千葉	トーキビ	36	徳島	チンパ
13	東京	トーキビ	37	香川	コウキビ
14	神奈川	トーキビ	38	愛媛	トーキビ
15	新潟	トーキビ	39	高知	キビ
16	富山	トナワ	40	福岡	トーキビ
17	石川	トーキビ	41	佐賀	トーキビ
18	福井	トーキビ	42	長崎	トーキビ
19	山梨	モロコシ	43	熊本	トーキビ
20	長野	モロコシ	44	大分	トーキビ
21	岐阜	トノキビ	45	宮崎	トキビ
22	静岡	トシモロコシ	46	鹿児島	トキッ
23	愛知	コーラエ	47	沖縄A	トーキビ
24	三重	チンパ	48	沖縄B	トーナチン

解説  
別名、馬鈴薯。江戸時代にインドネシアのジャカルタから伝来したので、「ジャガタライモ」の言い方がある。また、1年に2度収穫できるので、「ニドイモ」とも言う。表のほかに、秋田「ゴドエモ」、福井「ニサコイモ」、広島「ジャガタライモ」、福岡「ジャガイモ」がある。

解説  
大別して、「キミ」「キビ」「ミギ」の類、「モロコシ」の類、「ナンパ」「ナンマン」の類の3つがある。また、「トーキ」に「唐」、「モロコシ」に「唐土」、「ナンパ」に「南蛮」が当てられるとすれば、もともと外国から輸入した穀物という意味とつながりがある。表のほかに、北海道「キミ・キビ(少)」、新潟「トーキビ(上品)」などがある。

★ワークシート★

氏名 ( ○ × △ 子 )

熊本

▼以下のシチュエーションを適切な言葉で書き分けてみよう

① 電話で次のことを相手に伝えよう！

1. 来週の土曜に私の学校で文化祭
2. 私たちのクラスのステージ発表は午後2時から
3. 出し物はファッションショー
4. 模擬店も多数あり

他校に通う中学時代の友達へ	中学時代の恩師へ
<p>もしもし、久しぶり。元気だった？                  あんね、来週の土曜日が明後？                  うちの学校で文化祭があるつた。い。                  うちのクラスはね、昼2時から                  ステージで発表だんね。ファッション                  ショーはするもんね。模擬店                  もたいてあるけん、友達も連                  れてきなせ。ん、ならね。</p>	<p>もしもし、〇×ですけど。先生、お                  元気でしたか。今日、お電話した                  のは、来週の土曜日、うちの学校                  がある文化祭に来ていただけなの                  かなーと思、たからなんです。私                  のクラスは午後2時からステージの                  方でファッションショーをやるです。                  模擬店とかもあるんで                  もし先生がお暇だら、ら、ぜひ                  いらしてやってFです。</p>

★この2つを書き分けてみて、何か気づいたことはないだろうか。

先生に伝える時は、2と3をつなげてわかりやすく言っ  
 ているが、友達にはダラダラと言っている気がする。また、先生  
 の方には、「あんね、」のように話をきりだす言葉がない。  
 また、模擬店についても、友達の方には「たいてい」という修  
 飾語がついている。  
 全体を通して、友達の方が無駄が多い。(情報が多い。)  
 先生の方は簡潔だが伝達事項のみで友達に言うには

先生に敬語を使うこと以外に何か友達の場合と違うところはあるかな？  
 友達に、先生に伝えたように伝えたらどうなるかな？  
 伝えたい内容は同じなのに、友達と先生に伝えたことの中身に少し違いがないかな？

↓ 次の文章を方言で書いてみよう

兵十のお母は、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたづらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることが出来なかった。そのままお母は死んちゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたづらをしなけりゃよかった。

兵十のお母は床について、うなぎは食べたかと言いらしたにちがいない。だけん兵十がはりきり網はもち出したつばい。けど、わしがいたづらばして、うなぎはエとして来てしめた。だけん兵十はお母にうなぎは食べさせることが出来なかつたつばい。そのままお母は死なしたつにちがいない。ああ、うなぎは食べたか、うなぎは食べたかあて思うらがる死なしたつばい。ちょッ、あんないたづらばせんならよかった。

↓ 元の文章と、方言で書いたものとはどんな違いがあるだろうか？

方言で書いている方が、普段自分が話したり聞いたりにしている日本語に近いので、あたたのみがある。もし、ごんが、こんな風に話していると思ったら、友達みたいに親近感がわくと思う。

どちらのほうが好き？

自分の生まれたところの言葉をごんが話しているとしたらどんな感じ？

★ワークシート★

氏名( 里見 友紀 )

▼以下のシチュエーションを適切な言葉で書き分けてみよう

広島

① 電話で次のことを相手に伝えよう!

1. 来週の土曜に私の学校で文化祭
2. 私たちのクラスのステージ発表は午後2時から
3. 出し物はファッションショー
4. 模擬店も多数あり

他校に通う中学時代の友達へ	中学時代の恩師へ
<p>もしも、元気してる？                  あんた、来週の土曜日に、学校で文化祭あるじゃん。で、うちのクラス発表は午後2時からあるじゃん。ファッションショーもある、来てくん？絶対楽しいけ。模擬店もいっぱいあるけん、来てーや。じゃ、その時は、バイバイ。</p>	<p>もしも、〇〇中学でお世話になってる里見です。久しぶりですね。今日電話したのは、来週の土曜日に私の学校がある文化祭に来て欲しいなって思っからなんです。私たちのクラスでは午後2時からファッションショーをするんですけど、模擬店もたくさんあるからぜひ来て下さい。よろしくお願いします。</p>

★この2つを書き分けてみて、何か気づいたことはないだろうか。

友達を誘う場合は、本当に来て欲しいように伝えることができた。(方言を使っているから?)

先生を誘おうとしても、ただ連絡事項を述べるだけで、気持ちまでうまく伝わるかわからない。

先生に敬語を使うこと以外に何か友達の場合と違うところはあるかな?

友達に、先生に伝えたように伝えたらどうなるかな?

伝えたい内容は同じなのに、友達と先生に伝えたことの中身に少し違いがないかな?

↓ 次の文章を方言で書いてみよう

兵十のお母は、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたづらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることが出来なかった。そのままお母は死んちゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたづらをしなけりゃよかった。

兵十のお母は、床について、うなぎが食べたいよーにちがいないわ。  
そん兵十がはりきりあみ（網）もち出したんじゅう。でも、うちがいたづらして、うなぎをとって来てしまった。じいけん兵十は、お母にうなぎを食べさせられんかったんじゅう。そんお母は死んでしまったんじゅう。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思っながら、死んだんじゅうわ。ちょッ、あんないたづらせんけりゃよかったわ。

↓ 元の文章と、方言で書いたものとはどんな違いがあるだろうか？

ほんとうに残念がっているのは方言のほうか伝わってる。  
でも物語として読むなら共通語のほうか感じがでてくるように思った。  
方言だと現実味がありませんって何だか嫌だ。

どちらのほうが好き？

自分の生まれたところの言葉をごんが話しているとしたらどんな感じ？

## 第5章

### 表現の実践(3) —— 意見・主張 ——

第1節 意見文を書く

第2節 ディベートをする

## 第5章 表現の実践(3) —意見・主張—

### 第1節 意見文を書く

科目等履修生

布谷友亮

教科教育学科国語教育学専修

西健吾

#### I 本節のねらい

前章までで学んだ文章の書き方をふまえて、自分の意見・主張を他者に伝えるための文章、意見文を書くことを目的とする。人を説得することを目的とする意見文を書くためには、自己と他者の思考を結びつけることのできる普遍的かつ具体的な体験、客観的な情報などが根拠として必要となること、またその根拠を生かすための文章構成を考えなければならないことを理解する。

与えられたテーマについてどのような課題があるのか、またその課題をどのように解決へと導けばよいのかを考え、自分の意見・主張を明確化し、取材を通して建設的な意見を述べる方法を確認する。自分の意見が他者に理解されるためにはどのような条件が必要となるのか、相互評価を通して自ら考え、つかむ事ができる。

#### II 学習者観(高校2年生)

学習者はこれまでの学習で、基本的な文章の書き方、取材の仕方などをすでに学んでいる。しかし、ひとつのテーマに基づいて自己の意見を明確化するといった思考や、読み手を説得するための文章の書き方などはまだ実践として経験した事はないだろう。日頃の経験から自己と他者との間に思考の違いが存在している事には気づいてはいるが、それがどのようなものなのか、具体的にはつかむ事ができないのではないか。

意見文を書くことで自己の意見・主張を文章の形で他者に伝える事ができることを理解させ、また文章を書く上での目的を達成するにはどのような条件が必要となるのかを、この節での実際に意見文を書き、また評価するという経験を通じて学習者に体得させたい。

#### III 本節の可能性

- 自分の意見・主張を他者に伝えるために、普遍的かつ具体的な経験・客観的な情報などの根拠をもとにして、論理的な文章を書くことができるようになる。
- 自分の意見・主張を文章にし、それを推敲することで、自己の思考を見つめ直し、より深めることができる。
- 他者の意見に触れ、自分以外の視点からの思考もできるようになる。
- 自己と他者とを文章を介してとらえ直すこと、また他者からの評価を受けとめることで、主観・客観の区別や思考をより深める事ができる。

学習指導計画（全4時）

指導目標

- 読み手を説得する意見文の書き方を考え、身につける。
- 意見文を書き、また読むことで、自己の価値観や世界観を広めたり、深めたりすることができる。
- 意見文の文章構成を理解した上で、目的を持って取材活動や書く活動に取り組むことができる。

		指導目標	学習活動	指導上の留意点
第一 次	第一 時	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒作品を読んで、構成・根拠・文題を考慮することができる。</li> <li>○ 文章の構成が理解できる。</li> <li>○ 意見文の書き方の手順が理解できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 意見文を書く目的を知る。</li> <li>○ 教科書の生徒作品を読み、文章構成、根拠、文題について考える。</li> <li>○ 意見文を書く手順と留意点について理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本節の学習内容が「意見文を書く」であることを伝え、意見文を書く目的を、教科書を用いて説明する。</li> <li>○ 文章構成の型、双括型・頭括型・尾括型を説明し、教科書の生徒作品は尾括型であることを確認する。</li> <li>○ 主題、根拠はどこか、読者をひきつける工夫はどこにされているのかを考えさせる。</li> <li>○ 教科書を用いて、意見文を書く手順を説明する。</li> </ul>
第二 次	第二 時	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 文章の主題を意識した情報収集活動ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 意見文を書くためにテーマ・主題を決定し、根拠となる情報を取材活動で得る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「環境問題」の中から自分の述べたいテーマを決め、600～800字程度で意見文を書くことを示す。</li> <li>○ 前時を想起し、意見文を書く上で「根拠」「構成」が重要となることを再度確認する。本時は根拠となる情報を得るために「取材」を行うことを告げる。</li> <li>○ 図書、新聞記事、インターネットなどの取材媒介を指示する。</li> <li>○ 取材する際には、主題の根拠となる材料の客観性や、主題との一貫性などに留意するよう確認する。</li> </ul>

				○生徒の進み具合を見て適宜指導を行う。
第二 次	第二 時			○早く取材を済ませた生徒には、文章構成を考えたり下書きを始めたりしておくように指示をする。 ○次時は、本時の取材で得た材料をもとに意見文を書くことを確認する。
	第三 時	○前時までの学習を生かし、収集した情報を効果的に使う文章構成ができる。	○前時で収集した情報をもとに文章構成を考え、意見文を書く。	○前時での取材をもとに、本時は600～800字程度の意見文を書くことを確認する。 ○取材で得た根拠を、より効果的に用いることのできる文章構成を考えて書かせる。 ○生徒の進み具合をみて適宜机間指導を行う。 ○書き終えなかった生徒は次時までの課題とする。
	第四 時	○他者の文章を分析して、評価することができる。  ○他者との比較から、自分の文章をもう一度見直すことができる。  ○意見文を書く目的を、本節での経験を通じて再確認する。	○前時までに書いた意見文の推敲・見直しを行い、清書する。  ○少人数のグループに分かれて相互評価を行う。  ○他者からの評価をふまえて自分の意見文を読み直す。  ○本節の活動をふりかえる。	○主題が一貫して書かれているか、わかりにくい表現はないか、誤った表記はないかなどに留意しながら見直すよう促す。  ○3人程度のグループに分かれて(テーマが重なる生徒はできるだけ同じグループに入れる)相互評価を行うことを確認する。  ○他者の評価をふまえた上で、自分の文章をもう一度読ませる。  ○意見文を書く目的を挙げて確認し、本節のまとめとする。 ○全員の意見文を回収し、次時までチェックして返却する。

第1次 第1時 指導案

本時の目標

- 「環境に優しい良い品を選ぼう」を読んで、構成、根拠、文題を理解できる。
- 意見文の書き方の手順が理解できる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	○ 本節の学習内容を知る。	○ 本節の学習内容が「意見文を書く」であることを伝え、意見文を書く目的を説明する。	○ 学習目的を理解できたか。
5分	○ 教科書の生徒作品を読み、文章構成について考える。	○ ワークシート①を配布する。 ○ 教科書の文章の読解を行い、文章構成の型には双括型・頭括型・尾括型があることを説明する。教科書の生徒作品は尾括型であることを確認する。ただし、文章を書くことに慣れていない生徒にとっては、結論を先に書く、双括型や頭括型のほうが書きやすいことも説明する。	○ 文章構成を理解できたか。
15分	○ 教科書 P.96 の文章を用いて、主題を支える根拠は何かを考える。	○ 主題、根拠はどこか、読者をひきつける工夫はどこにされているのかを考えさせる。	○ 根拠となる部分を押さえられたか。
35分	○ 文題の果たす役割・効果について考える。  ○ どのような手順で意見文を書くのかについて説明を聞く。	○ 読み手の興味・関心をひくにはどのような題をつければよいかを考えさせる。  ○ 教科書 P.92～93 の「意見文の書き方」四、五、六を読み、また、説明を加えて、文章を書く手順と留意点について理解させる。  ※確認事項 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・予想される反論を考え、それにこたえられる文章を書くこと。</li> <li>・具体的・客観的な根拠をあげること。</li> <li>・資料を豊富に集め、それぞれをどう用いるのか、方向性と意見とを固めておくこと。</li> </ul> </div>	○ 文題の果たす役割について理解できたか。  ○ 意見文を書く手順を理解できたか。

47分	○ 次時の学習内容を知る。	○ 次時から、自分でテーマを設定し、意見文を書くことを伝える。	
-----	---------------	---------------------------------	--

第2次 第2時 指導案

本時の指導目標

- 文章の主題を意識した情報収集活動ができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	○ 本時の学習内容を知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 授業開始前に図書室に移動させておく。</li> <li>○ 「環境問題」の中から自分の述べたいテーマを決め、600～800字程度で意見文を書くことを示す。</li> <li>○ 前時を想起し、意見文を書く上で「根拠」「構成」が重要となることを再度確認する。本時は根拠となる情報を得るために「取材」を行うことを告げる。</li> <li>○ 取材、文章構成のためのワークシート②を配布する。</li> <li>○ 図書、新聞記事、インターネットなど取材媒介を指示する。</li> <li>○ 取材する際には、主題の根拠となる材料の客観性や、主題との一貫性などに留意するよう確認する。</li> </ul>	○ 客観性や主題との一貫性に注意しながら、よりよい情報を収集する事に努めているか。
8分	○ テーマ・主題を決定し、取材活動を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒の進み具合を見て適宜指導を行う。</li> <li>○ 早く取材を済ませた生徒には、文章構成を考えたり下書きを始めたりにしておくように指示をする。</li> </ul>	
47分	○ 次時の学習内容を知る。	○ 次時は、本時の取材で得た材料をもとに意見文を書くことを確認する。	

第2次 第3時 指導案

本時の指導目標

- 前時までの学習を生かし、収集した情報を効果的に使う文章構成ができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	○ 本時の学習内容を知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前時での取材をもとに、本時は600～800字程度の意見文を書くことを確認する。</li> <li>○ 取材で得た根拠をより効果的に用いることのできる文章構成を考えさせる。</li> <li>○ 次時には4人程度のグループに分かれて互いの意見文を読みあい、評価しあうことを確認する。</li> </ul>	
7分	○ 意見文を書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒の進み具合をみて適宜机間指導を行う。</li> <li>○ 早く書き終えた生徒には文章を読み返し推敲を行うよう指示をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 構成の形式を理解した上で、簡潔な文章が書けているか。</li> <li>○ 前時までの学習をふまえて文章構成の組み立てができているか。</li> <li>○ 他者の理解を得られる具体的経験を材料として用いているか。</li> </ul>
47分	○ 次時の学習内容を知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ グループに分かれて相互評価を行うことを確認する。</li> <li>○ 書き終えなかった生徒は次時までの課題とする。</li> </ul>	

第2次 第4時 指導案

本時の指導目標

- 他者の文章を分析し、評価することができる。
- 他の意見文との比較から、自分の文章をもう一度見直すことができる。
- 意見文を書く目的を、本節での経験を通して再確認する。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0分	○ 本時の学習内容を知る。	○ 意見文の清書を行い、3人程度のグループに分かれて相互評価を行うことを確認する。	
3分	○ 前時までには書いた意見文を再度見直し、文章の推敲を行う。	○ 主題が一貫して書かれているか、わかりにくい表現はないか、誤った表記はないかなどに留意しながら見直すよう促す。	○ 自分の書いた文章を見直し、よりよいものにしてしようとする積極的な姿勢を持っているか。
25分	○ 3人程度のグループに分かれて互いの意見文を読み、ワークシート③を用いて相互評価を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 可能であればテーマが重なる生徒が同じグループに入るようにグループ分けを行う。</li> <li>○ 相互評価を行うためのワークシート③を配布する。</li> </ul> <p>※評価の観点</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体の関連性</li> <li>・現状の問題点が明示されているか。</li> <li>・主題の一貫性</li> <li>・主題と根拠の整合性</li> <li>・根拠の客観性</li> <li>・表現のわかりやすさ・正確さ</li> <li>・結論の現実性・将来性</li> <li>・総合的に見た説得力</li> <li>・その他、その意見文の長所など、気づいた点を記述する。</li> </ul> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 他者の意見文をただ肯定的に評価するのではなく、より良い文章を書くための建設的な意見を述べられているか。</li> <li>○ 教材の時と同様に文章を分析して考えられているか。</li> </ul>
45分	○ 自分の意見文を読み直し、本時のまとめを聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 他者の評価をふまえた上で、自分の文章をもう一度読ませる。</li> <li>○ 意見文を書く目的を挙げて確認し、本節のまとめとする。</li> <li>○ 全員の意見文を回収し、次時までにはチェックして返却する。</li> </ul>	○ 意見文の目的を理解できているか。

## 今後の課題

今回は、「環境問題」という題で意見文を書くという設定にした。環境問題は、今日、大学の入学試験や企業の入社試験などで頻繁に取りあげられている題材のひとつである。学習者が今後進学、就職どちらの進路を選ぼうとも、重要な題材となるだろう。私たちにとっても、身近な問題のひとつである。指導案を考えるうえで以下のような問題点が出てきた。

### 1. 題材の提示の仕方は適当だったか。

今回の学習は書く上での基礎段階にあたることから、いきなり細かく決められた題材を与えて書かせるのには作文嫌いを増やすことになるのではないかという危惧があった。そこで、あえて題を絞りきらずに生徒たちが自分で選択できる幅を少し残しておくこととした。

しかし、一口に「環境問題」と言っても範囲が広く、自分が書きたいことを決めるのに時間がかかるかもしれない。「森林伐採」「ゴミ問題」「二酸化炭素の増加」というようにもう少し題材を絞ったほうが評価の際には文章の細かなところまで目が届きやすく、構成や、主張の一貫性、意見の正当性を他の生徒が書いた文章と比較しやすかったのではないだろうか。

### 2. グループの分け方は適当だったか。

第2次第4時での相互評価は3人のグループに分けて行うこととした。しかし、清書を行った後で他の2人の意見文を読み、評価やコメントをするには時間的に余裕がなく、じっくりとひとつの意見文を見つめることが難しい。これについては、二人一組になってお互いの意見文を読み、優れた部分やわかりにくい部分等を指摘しあうという方法も考えられる。

### 3. どのようにすれば説得力のある意見文の書くことができるのか。

説得力のある意見文を書くためには、技法だけでなく、幅広い、基礎知識が必要である。基礎的な学力や知識をあまりに軽視しすぎると、緻密な思考を積み重ね、表現する力も身につかないまま、自己主張に終わるだけのひとりよがりな態度が形成される可能性がある。今日の社会問題はますます複雑になっていると言える。それを考えると、ある程度の幅広い共通の基礎知識がなければ、今回のように課題が漠然としている場合、自ら問題を発見することは難しいだろう。したがって、まず高校時代に基礎的な学力を充分身につけることを怠らないように取り組ませることも重要であると考え。

**意見文の特徴を知ろう**

「環境に優しい良い品を選ぼう」を分析し、その文章構成、根拠がその主題に対してどのような影響を及ぼしているのかを考えよう。

○ この文章のテーマ（題材）は何だろうか。

( )

○ この文章の主題は何か。

→双括型・頭括型・尾括型のうちどれを用いて書かれているだろうか。

< 型 >

○ 主題を支える根拠が2つ挙げられている。どの部分だろうか。

①

②

→根拠は主題にどのような影響を与えるのだろうか。

( )

**意見文を書く目的**

- ① 自分の考えや主張を提示し、読み手を説得する。
- ② 意見文を書いていく中で改めて自分自身の考えや行動を見つめ直したり、社会の事柄に対して考えを深めたりできる。
- ③ 他の人の書いた意見文を読むことによって、自分とは異なる考えを知り、自分のものの見方や考え方を広めたり深めたりすることができる。

情報を集めて構成を考えよう

① まず、自分がどのようなテーマで意見文を書きたいか、いくつが挙げてみよう。

--	--	--	--	--

② いくつが挙げたテーマの中からひとつに絞り、主題となる文を考えよう。

テーマ ( )

主題

--	--

③ 主題が決まったら、それを支えるための材料を取材でみつけよう。

※ 信頼性・確実性・客観性などに注意しながら情報を集めよう。インターネットを使う場合は、グラフをプリントアウトしてみよう。

--	--

④ 材料がそろったら、文章構成を考えよう。  
頭括型・尾括型・双括型それぞれの特徴を考えながら文章構成を考えよう。

--	--

お互いの文章を読んで、評価をしよう

以下に挙げたチェック項目で、文章に五段階の評価をつけよう。

○ 全体の関連性

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

○ 現状の問題点が明示されているか。  
現状にはどのような問題点があるのか、具体的に述べていることができるか。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

○ 主題の一貫性  
主題が文章中で断れることなく最初から最後まで一貫しているだろうか。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

○ 根拠の客観性  
主題にふさわしい情報が根拠として挙げられているだろうか。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

○ 根拠の客観性  
実際の調査に基づいたデータなど、客観的な根拠をもとに述べているか。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

○ 表現のわかりやすさ・正確さ  
難しい、分かりにくい表現はないか。誤字や脱字がなく、文法が正確か。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

○ 結論の現実性・将来性  
建設的な意見を最後で述べているか。理想論で終わっていないか。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

○ 総合的にみた読得力  
この文章が自分の心にどれだけ訴えかけてきただろうか。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

どんなところに工夫が感じられるだろうか。具体的に書いてみよう。

--	--

## 第5章 表現の実践(3) 一意見・主張一

### 第2節 『ディベートをする』

教科教育学科国語教育学専修

今井英里子 小川奈都

#### I 本節のねらい

日本人は、議論が苦手であるとよく言われる。自分の意見や考えを持っていても、それらを他者に論理的に話す力が不足しているため、自信を持って主張することができないのである。ディベートは、肯定・否定等の異なる立場から、一定のルールに従って展開された論の優劣を競う、特殊な討論である。本節では、論理的に考え、話す必然的な場を設定し、学習者全員にそれぞれの立場(討議・審判)で参加させる。ディベートの基本的技能の習得と共に、実践を通して聞く力や説得力、判断力を養うことをねらいとする。また、ディベートの楽しさを体験として学ばせ、議論に対する積極的な姿勢を形成させることも目的とする。

#### II 学習者観(対象:高校二年生)

高校二年生の学習者は、思いつくままに話すことはできても、論理的に考えたり話したりするのは苦手な人が多い。これからは、意見を戦わせなければならない場に直面することも多くなるだろう。しかし、その時常にきちんとした準備をし、立論をして理性的に述べることができるとは限らない。ディベートの基本的な仕組みや実際を知らなければ、有意義なディベートを行うことはさらに難しいだろう。そこでこの機会に、ディベートについて学習し、自分の意見を筋道立てて話すことの大切さや、そのコツを知るべきである。

本節では、学習者はディベートの方法をしっかりと学び、その上で実際に自分たちでディベートを行うことになる。このことを基礎として、論理的な思考の育成を図り、立論の仕方について習得させる。また、物事に対する自分の立場・意見を明確にすると共に、異なる立場・意見を知り、吟味する態度を身に付けてもらいたい。

#### III 本節の可能性

- ・ディベートの基本的なやり方と決まりを知ることができる。
- ・論理的思考力、論理的に説得する力を育成できる。
- ・実際にディベートを行うことで経験を積み、自信をつけることができる。

●指導目標

- ・議論の楽しさを知るとともに、語感を磨き、語彙を豊かにさせる。
- ・ディベートの方法、ルールを学び、実践することによって議論に必要な力を身につけさせる。
- ・物事に対して自分の意見を持ち、論理的に主張しようとする姿勢を養う。

●学習指導計画 <全六時>

次	時	指導目標	学習活動	指導上の留意点
第一次	第一時	○ディベートに興味を持たせる。  ○ディベートの基本的なルールを押さえさせる。	○インターネットのメリット・デメリットについて議論する。  ○教科書に従って、ディベートのルールを把握する。	○インターネットに対して自分の意見（良し悪し）を持たせる。  ○教科書を基に、ディベートの方法・手順・ルールを説明しながら板書する。  ○実際にディベートを行うことを告げ、論題を発表し、6~7人一組で班分けを行う。
	第二時	○効率よく情報を収集する方法を身につけさせる。 ○論題にふさわしい情報を選び出し、整理させる。	○ワークシート①を用いて、情報の収集方法を確認する。  ○図書室やインターネットを利用し、情報収集をする（班活動）。	○班を回って指導・助言を行う。
第二次	第三時	○内容や文脈にふさわしい語句を選び、構成を工夫させる。  ○論理的な文章を組み立てさせる。	○ワークシート②を用いて、論理の組み立て方を知る。  ○集めた情報に基づいて、立論する（班活動）。	○机間指導を行う。  ○相手の班に情報が伝わらないように注意させる。 ○机間指導を行う。
	第四時	○それぞれの立場で全員が参加することにより、議論の力・説得力・聞く力・判断力を養う。	○発声練習をし、話す際の留意点を確認する。  ○ディベートをする。 ・携帯電話は、高校生にとって有益ではない。  ○評価シートに記入する。  ○10分間休憩。	○発声練習のプリント・記録シートを配布する。  ○司会（兼計時係）は教師が行う。 ○話がそれすぎないように注意する。 ○審判をする側に、メモを取らせながら、評価シートに記入させる。
第三次	第五時		○ディベートをする。 ・内閣総理大臣は国民の直接選挙によって選ぶべきである。 ○評価シートに記入する。 ○教師の講評を聞く。 ○本時の感想・反省を書き、提出する。	○ディベートをした班には反省も書かせる。

第六時	<p>○それぞれの立場で全員が参加することにより、議論の力・説得力・聞く力・判断力を養う。</p> <p>○ディベートを振り返り、自己評価をすることができる。</p>	<p>○事前にディベートしやすい形に机を移動させておくように指示する。</p> <p>○ディベートをする。 ・アメリカの、テロへの報復攻撃は許される。</p> <p>○評価シートに記入する。</p> <p>○教師の講評を聞く。</p> <p>○本時の感想・反省を書き、提出する。</p> <p>○班内でディベートの反省をする。</p>	<p>○記録シートを配布する。</p> <p>○司会（兼計時係）は教師が行う。</p> <p>○話がそれすぎないように注意する。</p> <p>○審判をする側に、メモを取らせながら、評価シートに記入させる。</p> <p>○ディベートをした班には反省も書かせる。</p> <p>○評価シートは後日プリントにして配布する。</p> <p>○ディベートの内容や技術的なことについて反省させる。</p>
-----	---	---	--

第一時 指導案

○本時の目標

- ・ディベートに興味を持たせる。
- ・ディベートの基本的なルールを押さえさせる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	○インターネットのメリット・デメリットについて考え、ノートに書く。	○インターネットの良し悪しについて考えさせ、議論の基となる意見を持たせる。	○メリット・デメリットの両方について考えることができているか。
5	○メリットについて書いたもののみを発表する。	○メリットを板書する。	
10	○メリットについての反論を考え、発表する。	○ノートに書いたデメリットを基に反論を考えさせる。 ○反論を板書する。	
20	○ディベートについて理解する。	○ここまでのように対立する意見に基づいて討論をすることが、ディベートの要素であることを伝える。	○ここまでの議論とディベートとをうまく結び付けることができているか。
22	○ディベートの方法やルールについて知る。	○教科書を基に、ディベートの方法・手順・ルールを一つずつ説明しながら板書する。 ○具体例を示しながら説明し、イメージしやすくする。	○ディベートの基本的な方法・ルールを理解できているか。
42		○実際にディベートを行うことを告げ、論題を発表し（「携帯電話は、高校生にとって有益ではない。」「内閣総理大臣は国民の直接選挙によって選ぶべきである。」「アメリカの、テロへの報復攻撃は許される。」）、6～7人一組で班分けを行う。	
48		○次時は情報収集を行うことを予告する。	

## 第二時 指導案

### ○本時の目標

- ・効率よく情報を収集する方法を身に付けさせる。
- ・論題にふさわしい情報を選び出し、整理させる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	○ワークシート①を用いて、情報・資料の収集方法を知る。	○ワークシート①に検索エンジンを載せておく。	
10	○班ごとで図書室に移動する。 ○必要であれば、校内で情報ツールを使える場所に移動する。	○前に出るディベーター（4人）は、本番前時に決定することを伝える。ただし、ディベート中の選手交代も認めることとする。 ○授業終了5分前に教室に戻るよう伝える。	
15	○論題に応じた情報・資料を集め、整理する。	○班を回って指導・助言を行う。	○積極的に情報・資料を収集しようとしているか。 ○論題にふさわしい情報・資料を選び出せているか。
45	○教室に戻る。	○情報・資料が十分に集まっていない班は次時まで集めておくよう伝える。 ○次時に論理を組み立てることを予告する。	

### 第三時 指導案

#### ○本時の目標

- ・内容や文脈にふさわしい語句を選び、構成を工夫させる。
- ・論理的な文章を組み立てさせる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	○ワークシート②を用いて、論理の組み立て方を知る。	○班を回って指導・助言を行う。	
10	○肯定班は別室に移動する。 ○集めた情報・資料に基づいて、立論する。	○相手の班に情報が伝わらないように注意させる。 ○班を回って指導・助言を行う。 ○事実と意見を混同しないように構成させる。 ○班で協力させる。 ○足りない情報・資料がある場合は、図書室などへ移動することを認める。	○わかりやすい主張ができているか。 ○論拠を明らかにしているか。
45		○前に出るディベーター（4人）を指名する。 ○次時にディベートをすることを予告する。	

第四時・五時 指導案

○本時の目標

・それぞれの立場で全員が参加することにより、議論の力・説得力・聞く力・判断力を養う。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	○発声練習をする。	○発声練習のプリント・記録シートを配布する。	○大きな声を出せているか。
3	○話す際の留意点を確認する。	○話す速度や音量・言葉の使い方や言葉の調子・間のとり方などに注意するように指示する。	
12	○ディベートの準備をする。	○ディベートをしやすい形に机を移動させる。	
15	○「携帯電話は、高校生にとって有益ではない。」についてディベートをする。 立論：各3分 作戦タイム：2分 反対尋問・応答：各6分 最終弁論：各3分 判定：5分 合計：31分 ※以下時間配分は同じ。	○司会（兼計時係）は教師が行う。 ○議論が論題からはずれたり、発言者が持ち時間を超過したりしないように注意する。 ○記録シートに記入させる。 ○審判する側に、メモを取らせながら、評価シートに記入させる。	○話し手の論理の展開を的確にとらえているか。 ○話し方に気をつけて話せているか。 ○班で協力できているか。 ○主張をわかりやすくし、論拠を明らかにできているか。
46	○教師の講評を聞く。		
50	○休憩	○次のディベートの準備をさせる。	
60	○「内閣総理大臣は国民の直接選挙によって選ぶべきである。」についてディベートをする。	○司会（兼計時係）は教師が行う。 ○議論が論題からはずれたり、発言者が持ち時間を超過したりしないように注意する。 ○記録シートに記入させる。 ○審判する側に、メモを取らせながら、評価シートに記入させる。	○話し手の論理の展開を的確にとらえているか。 ○話し方に気をつけて話せているか。 ○班で協力できているか。 ○主張をわかりやすくし、論拠を明らかにできているか。
91	○教師の講評を聞く。		
95	○本時の感想を書き、できた人から提出する。	○ディベートをした班には反省も書かせる。	

## 第六時 指導案

### ○本時の目標

- ・それぞれの立場で全員が参加することで、議論の力・説得力・聞く力・判断力を養う。
- ・ディベートを振り返り、自己評価をすることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
0	○発声練習。	○事前にディベートをしやすい形に机を移動させておくように指示する。	○大きな声を出せているか。
2	○「アメリカの、テロへの報復攻撃は許される。」についてディベートをする。 立論：各3分 作戦タイム：2分 反対尋問・応答：各6分 最終弁論：各3分 判定：5分 合計：31分	○司会（兼計時係）は教師が行う。 ○議論が論題からはずれたり、発言者が持ち時間を超過したりしないように注意する。 ○記録シートに記入させる。 ○審判する側に、メモを取らせながら、評価シートに記入させる。	○話し手の論理の展開を的確にとらえているか。 ○話し方に気をつけて話せているか。 ○班で協力できているか。 ○主張をわかりやすくし、論拠を明らかにできているか。
3 3	○教師の講評を聞く。		
3 6	○本時の感想を書き、できた人から提出する。	○ディベートをした班には反省も書かせる。 ○評価シートは後日プリントにして配布する。	
4 1	○班内でディベートの反省をする。	○ディベートの内容や技術的なことについて反省させる。	

## 《今後の課題》

今回の授業では、ディベートの基本的な仕組みをよく理解させてから、実際にディベートを行うことで、学習者に知識に基づいたディベート体験をさせたいと考えた。しかし、実際に授業を考える上で、以下のような問題点が出てきた。

### 1. 情報収集・立論の時間が足りないのではないか。

実際にディベートをしてみることは、いろいろなことを体験できるという点で非常に重要ではある。しかし、ディベートの際に基となるのは論理と、それを支える情報である。情報を集め、それを取り入れつつ立論する時間はどうしても必要となってくる。

今回は、高校での初めてのディベートということで、あまり長い時間をかける授業は好ましくないのではないか、と考えた。そこで、学校での情報収集や立論の時間を少なくし、足りない部分を各自でやらせるという形にした。

### 2. 学習者にとって論題が身近に感じられないのではないか。

論題はできるだけ高校生が身近に感じ、ディベートへの積極的な態度を持てるように、時事問題などを組み込んだものにした。しかし、学習者が論じる必要性がないと感じる可能性はある。もっと学習者にとって身近で、ぜひ話し合うべきだと考えられる論題や、ディベートの結果が現実に活かせる論題だと良かったのかもしれない。また、設定した三つの論題に難易度や学習者の興味・関心の差があるかもしれないということも、改善すべき点である。学習者に話し合い等で論題を決めさせるという方法もあるが、その際にも論題としてふさわしいかどうか、吟味する必要がある。

### 3. 授業のレベルは適切か。

本節を高校での初めてのディベートだと想定したので、授業レベルが高校生にしては易しいかもしれない。けれども、今回は基礎をきちんと固めるという目的を重視することとした。よって、この授業で基本的な知識を身に付け、一通り実践した後は、準備等に十分な時間をかけて行うディベートも可能になるだろう。

## 《参考引用文献》

- ・『ディベート学習の考え方・進め方』魚住忠久 黎明書房 1997年12月10日
- ・『ディベートガイドー基礎からのディベートー』J・エリクソン、J・マーフィー、R・ゼウシュナー 訳者：渡辺春美、木下哲郎 溪水社 2000年3月15日
- ・『ディベートの技術 論理的な思考方法から議論に負けない話し方まで』北岡俊明 PHP研究所 1996年1月19日
- ・（講座『音声言語の授業』）『第三巻 話し合うことの指導』高橋俊三 明治図書 1994年6月
- ・『言語技術教育 第7号』日本言語技術教育学会 明治図書 1998年4月
- ・授業への挑戦116『国語科ディベート授業入門』花田修一 明治図書 1994年9月

**● 論拠となる情報・資料を、できるだけたくさん集めることが勝利への鍵！**

今回の論題

- ・携帯電話は、高校生にとって有益ではない。
- ・内閣総理大臣は国民の直接選挙によって選ぶべきである。
- ・アメリカの、テロへの報復攻撃は許される。

**○ 情報収集トラブルシューティング**

1. 欲しい文献の探し方がわからない、見つからない。  
→司書教諭に相談したり、文献検索用のデータベースを活用したりしよう。
2. 図書室の文献では情報が不十分。  
→インターネット検索エンジン（GOOGLE → <http://www.google.com/intl/ja/> ,  
Yahoo!Japan → <http://www.Yahoo.co.jp> など）を用いて、最新の情報を幅広く集めよう。
3. 文献やインターネットでは有効な情報が十分には集まらなかった。  
→アンケート・インタビューを用いて、自ら論拠となる情報を集めよう。

手段・範囲	書名・番組名・トピック等	要点・メモ
新聞		
雑誌		
単行本・文庫		
テレビ・ラジオ		
インターネット		
アンケート		
インタビュー		
その他		

◎ 論を立ててみよう！

論題 「

①主張を明確にする。

私達の班は、( ) と主張する。

②主張の理由を挙げる。

( )

③②の理由の中から効果的だと考えられる理由を選ぶ。

( )

④理由を裏付ける資料や具体例を挙げて、内容を説明できるようにする。

資料…

( )

資料…

( )

資料…

( )

資料…

( )

⑤相手からの反対尋問を予想し、応答を考える。

◎ 反対尋問

◎ 応答

・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・

⑥最終弁論を考える。

私達の班は、

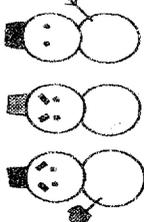
( ) という理由で、  
( ) と主張する。

**発声練習**

●声に出して読んでみよう。

① 壽限無壽限無五光の擲り切れず海砂利水氣水無末、雲来木風来木、食う寝るところ  
 た住むところ、やあぶら小陸藏小陸、はいはいはい、はいはいはい、はいはいはい、はいはいはい、  
 しゅうりんがんのくわりんたい、くわりんたいのほんほんびい、ほんほんなるの  
 長久命の長介。

② 隣のお婆さんが嫁三十日、嫁翁仏を申したと  
 申しましたが、申したことやら申さぬことやら、  
 申さぬことやら申したることやら、申したら申した  
 と申しましたが、申さんからは申したとは  
 申しませぬ。



**話し方**

●テーブルをさるときは次のことに気を付けて話そう。

- ① 話す速度      ↓早口になりすぎない程度に六人がよく話す。
- ② 声の大きさ    ↓教室の全員に届くように、姿勢を正しくし、口を大きく開けて話す。
- ③ 発音の仕方    ↓はっきりした発音で話す。
- ④ 言葉の使い方   ↓わかりやすい表現を使う。

**発展**

- ⑤ 身ぶり、手ぶりを加える。
- ⑥ 表情に変化をつけて話す。

●記録シート

( ) 班 氏名 ( )

論題：「 」

肯定側	矢印	否定側
《立論》		《立論》
《反対尋問》		《反対尋問》
《応答》		《応答》
《最終弁論》		《最終弁論》

評価・感想シート

( ) 班 氏名 ( )

●ディベート判定表

論題：「  
 ディベーター：肯定側 ( ) ( ) ( ) ( )  
 : 否定側 ( ) ( ) ( ) ( )

評価の基準		肯定側	否定側
立論 (3分)	①筋道は通っていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	②言葉ははっきりしていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	③話す表情や態度がよかったか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
反対尋問・応答 (6分)	④質問の意図がはっきりしていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	⑤相手の論理を崩すのに有効な質問であったか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	⑥筋道を立てて応答したか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	⑦活発に議論したか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
最終弁論 (3分)	⑧筋道は通っていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	⑨言葉ははっきりしていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	⑩話す表情や態度がよかったか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	⑪尋問の内容が活かされていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
資料・情報	⑫資料は十分に用意されていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	⑬資料は有効に活用されていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
総合	⑭積極的・意欲的に取り組んでいたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
合計	⑮班で協力できていたか。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
	①～⑮までの合計得点。	点	点
コメント			

●感想・反省

## おわりに

高校生が、教科目としての「国語表現」の授業に、関心を持って臨んでくれるだろうかという不安がありました。しかし、この D 出版社の教科書は、学生の間で人気が高く、楽しく演習ができました。学生が口々に楽しかったと感想を述べてくれましたので、確かな手応えを感じています。

当初、「表現の実践」を中心にして系統的な体系が構成されたこの教科書は、実施なさる先生にとって、ご苦労なものではなかろうかと心配したのですが、それは杞憂に過ぎませんでした。演習に参加した学生は、みんな「おもしろい、楽しい」と言いながら、どんどん新しい試みを積極的に行いました。

拙い「高校実用国語表現教室」の演習でしたが、「実用」という思想に共感してくれたのです。全部で十九の指導案ができています。力作ばかりです。自画自讀でおこがましいのですが、真剣に子供達の顔を思い描いて指導案作りをしてくれた学生達を誉めてやりたいと思います。このように、現場に役に立つ国語表現教育が愛情をこめて、広く行われていけば、国民全体の国語表現力は、しだいに高まっていくであろうと思います。

なお、ここに取り上げた十九の課題と指導案は、みな、OHP を使用して 10 分間でプレゼンテーションさせたものです。みんなの前で効果的にプレゼンする力も国語表現には必要だと思っています。私どもは、いつも、書いたものを提出するだけに留めなくて、必ず口言葉に直して説明させる工夫を試みています。本冊をお読み下さる皆様に、そのような教室の熱気をお汲み取りいただければ幸いです

( 江端義夫 )

21世紀教育実践の手引き

『高校実用国語表現教室』

印刷 平成14年1月30日

発行 平成14年2月10日

〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1

広島大学教育学部国語文化教育学研究室

(代表) 江端義夫

Tel: 0824-24-6789